

銀魂：白銀ノ魂録実況プレイ 虚ルート

一億年間ソロプレイ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

銀魂の架空アクションRPG（エディットキャラ投入型）の虚ルート開拓実況プレイ（生首饅頭風味）という体の小説です。

淫夢要素はないです。

妄想を多量に含んでいます。

現在番外編更新中です。

目次

平安時代編

キャラエディットく幼少期虚発見まで	part 1	1
幼少期虚遭遇く好感度蓄まで	part 2	18
平安時代終了まで	part 3	26
鎌倉く戦国時代編		
鎌倉時代く戦国時代終了まで	part 4	35
幕間 とある虚のなき声		44
第一次攘夷戦争編		
攘夷戦争勃発く臆遭遇まで	part 5	52
臆遭遇く松陽先生遭遇まで	part 6	63
松陽先生イベントく第一次攘夷戦争終了まで	part 7	72
幕間 画狂人の弟子		81
第二次攘夷戦争編		
第二次攘夷戦争勃発く坑道発見	part 8	101
坑道発見く天照院奈落潜入まで	part 9	110
エンディング5まで	最終回	118
番外編		
幕間 旅絵師の書いた約半年の旅路		132
「西郷特盛 西郷てる彦 共に保血を退治す」		145
「依頼主の絵：とにかくエロい姉ちゃん描いてくれ」		156
「冬の鴉」		172
「夢幻教と変な夢」		182
異説 『多き生なれど、今を楽しめ』		193

平安時代編

キャラエディット〜幼少期虚発見まで part 1

皆さんこんにちは、ゆつくりです。

突然ですが、銀魂：白銀ノ魂録を実況していききたいと思います。

タイトルから分かる通り、あの終わる終わる詐欺やFF現象などの数多くの名言と洗練されたギャグテイストが癖になるあの銀魂のゲームです。銀魂のゲームというとPS4だったりDSだったりWiiだったり色々と出されていますが、この銀魂：白銀ノ魂録は一味違います。

とりあえずスタート画面ポチつとな。

まずこの白銀ノ魂録はモードが三つあるんですね。銀魂編と自由編と魂録編。銀魂編はおなじみの原作ストーリーがフルボイス・フル3Dで遊べちゃうんです。しかも万屋側・新選組側・鬼兵隊側など多彩の陣営で遊べる仕様となっております。あの三つだけではなく夜兔側や蓮蓬側からも遊べますが、ニツチな陣営は基本的に出てきたストーリーくらいしか遊べません。陣営によって遊べるストーリーの数が違うんですね、細かすぎる。

自由編。これは好きなキャラクターで好きなストーリーを遊べるようになります。エリザベスで吉原炎上編とか、徳川茂々で紅桜編とか遊べちゃいます。そのストーリーではないキャラを操作していると各キャラクターから何でここにいんの!?!みたいなツツコミもされるので、反応を楽しむのも楽しみ方の一つです。

そしてこの魂録編。これはですね：：武将エディットモードと云えば分かるでしょうか。なんとこのモード、オリジナルキャラクターを作って、原作に介入できちゃいます。

全てフリーシナリオ、多彩に分岐したエンディングなどで今でも攻略wikiの更新が途絶えておりません。

死んでしまったキャラの救済も出来ますし、各キャラの好感度による√エンドだって出来ます。気になるあのキャラの掘り下げなんか

もあります。

今回はこの魂録編を実況していきたいと思います。

そして目指すエンディングというか目標なんですが…、虚ルートです。

もう一度言います。

虚ルートです。

前回の大きなアップデートによって松陽先生と虚さんが操作可能になり、魂録編でも攻略できる大革命が行われました。

やっと、師と本当の一番弟子で肩を並べて戦うことができたんやなって…。

さて、この虚ルートですが、非常に難しい類のルートです。松陽先生や朧さんルートでも難しいんですが、この虚ルートの難しさ、それは松陽先生と虚さんの匙加減と接触のしにくさです。松陽先生・朧さんルートならもう少し易しめなんですがね。

ある程度虚さんの好感度を上げている状態で、松陽先生の好感度を上げ過ぎると虚さんが松陽先生殺害後、自身が揺らぐ要因の一つとしてキャラを殺害してこようとしてきます。ロックオンされたら死を覚悟してください。一応戦闘できますが太刀打ちできずにゲームオーバーです。最低でもステータスマAXにしないと即死します。

次に、松陽先生殺害後の虚さんの好感度は上げるのがクソクソクソクソ難しいことです。加えてその時の虚さんと接触するには天照院奈落のNo.2もとい朧さんポジになってないと無理です。虚さんが現れる時間も不定期なのでマジで接触しにくいです。そして何より物をプレゼントして好感度を上げる手法が取れず、会話によって好感度を上げるしかないのですか非常に難しいです。地雷がそこかしこにあります。

ちなみに、なんとかして好感度を上げた虚さんに今一番欲しい物はなんですか？と聞くと自分の死と快く答えてくれます（血涙）

とまあ、原作ストーリー時点での虚さんルート開拓は無理と言っても過言ではありません。ならどうやって攻略すればいいんですか？…！と言うと、幼少期からの接触が一番やりやすいです。

この魂録編には年月日があります。このゲームでは幼少期虚さんがいるのは平安時代ということになっているようですので、キャラクターエディット時に生まれ年を選ぶのでそこで平安時代を選びます。そして種族を変異体にします。これで原作介入まで寿命が続きます。ここで普通の人間を選んでいた場合には普通に寿命で死の後、もつとも見られる虚さんのエンディング「地球崩壊」が出ます。私も何度種族を変え忘れてこのエンドに行ったことか…。

幼少期虚さんだと原作時の虚さんより格段に好感度は上げやすいですが、平安時代から原作までやり遂げれずに失踪するニキネキたちが大量発生しました。

いやあ…。何が何でも平安時代終了時には虚さんと離別してしまう運命なので、そこから原作キャラのいないゲーム進行に耐えられないってところですね。Amazonのレビューでもよく書かれている事です。

とりま、虚さんルート開拓は光源氏計画くらいが明確な攻略方法です。平安時代の他にも鎌倉とか選べますが、その頃には虚さんは八咫鳥の面被ってアサシンクリードしてるので接触も図ることができないこの始末。唯一まともに接触できるのが平安時代と原作ストーリーしかないって辛すぎるツピ！

いえ、天照院奈落ルートで好感度を上げるというのもありますが。奈落に入るには生まれが孤児だったり、お偉いさんの家系ですと確率で奈落のメンバーに拾われて暗殺技術を仕込まれて、奈落のメンバー入りするのが普通です。でも、頑張つてNo.2になったとしても頭領と話せる機会が少ないんだよなあ…。変異体で入って頭領と同じく死亡を装いまた奈落入りしたとしても中々会話が出来ません。めちやくちやシャイなので無言か首がいつの間にか分かれているか

なので前キャラは苦勞しました。

何が言いたいかと言うと、非常に警戒心が強いです。

散々このルートで試してやっても精々エンディング2「道連れ」です。このエンディングでは決戦（銀ノ魂編）で全ての人類が死に絶えた中で主人公らしき死体か墓の隣で一緒に終わってくれます。一部では人気ですが今回目指すエンディングは5の方なので、そうならないように確実な手段として幼少期接触の道を選びます。

さて、今回の実況では平安時代に生まれて虚さんに接触することが目的ですが、その虚さんがどこ辺りの村にいるかというのはランダムです。運が良ければ一か月で探し当てるか、運が悪ければ接触出来なまま平安時代が終わることになります。勿論接触出来なかった場合はやり直しです。ここが最初の鬼畜ポイントです。

その他諸々のシステムとかも要所要所で話していくので、まずはキャラクターエディットをしていきましょう。
ポチつとな。

まずは性別は男にします。女も選べますし、???も選べます。???は一部の天人のステータス表記です。

なぜ男かですって？

虚さんの恋愛ルートを開こうとたくさん女の子を作り特攻させましたがそのどれもが玉砕したので、女キャラのエディットに飽きてきたんですよ。

胸のサイズとかの調整がね…つい拘ってしまってますよね……。

話が逸れました。つまりは気分です。でも意外とこのゲーム、性に奔放なので性別関係なく恋愛ルート開けるんですよ。目指せワンチャン。

次は容姿、髪の色は黒です。黒一択。髪型は長めで（性癖）顔は…狐顔っぽくなりましたね。

体型は標準より痩せぎすにします。へへへ、不健康そう。

目の色は青色っぽくして…隈も付けてしまえ！（豹変）

肉感ある女子はもう飽きたんだよ…不健康なキャラを作りたくて仕方無かったんだよ!! (性癖暴露)

ふう。

よし、次はステータスですね。ステータスの項目は体力、霊力、知能、スタミナ、筋力、精神力、器用さ、素早さ、幸運です。

このキャラエディット時でのステータスでは気を付けることがあります。この時に100ポイント振り分けられることが出来ませんが、このポイントでステータスの値が決まる訳ではありません。確率を高めるための振り分けです。

意地でもステータスを弄らせたくないのか、基本的にキャラのステータスはキャラメイク時のポイントの振り分け方とそれに影響する乱数で決まります。つまり、ここでは高めになつて欲しい項目に多く振り分けるための欄です。鬼畜だなあ (n敗)

しかし更に気を付けて欲しいのが霊力の項目です。この項目だけは振り分け時に0になることが多いです。0だと霊力はとあるイベント以外では育成できません。霊力があると魔法的なのが使えますし、アバダケダブラも使えるようになる便利な物です。確実に霊力の項目が欲しければ、種族を決める際に陰陽師、呪術師にすると霊力確定のステータスで決めてくれます。

今回霊力がめちやくちや重要なので多めに振り分けます。残りは素早さを多めに、気休めに他の項目もちまちま振り分けます。一応霊力を使わない方法もありますが運要素が絡むのであまりオススメしません。

体力：+2

霊力：+40

知能：+7

スタミナ：+9

筋力：+9

精神力：＋5

器用さ：＋3

素早さ：＋22

幸運：＋3

これでヨシ（現場猫）

後は名前やら出身やら種族やらを決めていきましょう。名前に関してはネーミングセンスが無いので後に回します。

出身は地球、ここで徨安とかも選べますが地球です。当たり前だよなあ？

さて、種族ですが勿論変異体です（種族と言えるのか分かりませんが）。でなきや原作介入まで寿命が持ちません。

変異体になると魂特性の欄が消えて変異体特性の欄が現れましたね。こ→こ←大事です。

変異体特性というのは、変異体になった際に得られる特性の事です。有名な物ですと、念力と再生能力とかですかね。色々と超常現象を起こせる物だったり五感を鋭くさせるスキルなどのメリット系の特性や鈍足や不運などデメリット系の特性が得られます。上手くいけばメリット系のみの特性欄になります。大体はデメリット系特性多め、メリット系少なめの構成になります。

数は二個以上から十個まで乱数で決められます。なぜ二個以上なのかは振れば分かります。

それから先程消えた魂特性について話しておきます。魂特性は種族が変異体でなければ誰でも付与される特性のことです。特定の場面・キャラ・イベントなど発揮される条件が難しい物程強力な特性を付与されます。

例えば、対虚戦時の時の銀ちゃんには万屋の絆という特性が付与されています。この万屋の絆は体力が0になってもゲームオーバー扱いにならず復活できるというものです。

他にも攘夷四天王や、星海坊主一家、など色々な魂特性があるので是非とも試してみてください。

そろそろ変異体特性の方を振りしたいと思います。
では、イクゾー!!

おお、8個!

不老不死、五感強化、魔眼、日光弱体化、不眠症、蹴鞠恐怖症、寡黙、無痛覚

クソが（変態糞運土方）

失礼。取り乱しました。えーつとですね…ちよつとマズ味ですね。不老不死は確定で付く特性ですが、メリツトらしいのが五感強化と魔眼と無痛覚、その他はデメリツトですねクオレは…。

一つずつ順に解説していきます。まずは不老不死。これは名前の通りの効果です。このキャラの場合、出身を地球にしているので地球産のアルタナが無くならない限りはこの特性が機能しなくなることはありません。

次に五感強化。視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚のことです。この特性を持つてお妙さんの料理を食した場合には通常時よりも倍のダメージを喰らいます。恐ろしい…。しかしそういった場でなければ、キャラを動かす際に得られる情報量が違い、幅広い戦闘が行えるようになります。例えば、物音に紛れて手榴弾のピンを抜いたとしてもそれを察知し、回避することが出来ます。こうして例を出すとお妙さんの料理が手榴弾以上の威力ということになって（手記はここで途切れている）

魔眼くんはですね…。これも効果がまちまちらしいですね。アタリだと型○系の直死の魔眼とか石化の魔眼とかなんですが…これは使ってみないとよく分かりませんね。次。

日光弱体化ですか。これは日差しのあるフィールドで先程のステータスが全て半減になります。

半減になります。クソが（二回目）

不眠症はそのまんまですね。眠る行為が出来なくなります。寝れば減った体力や霊力、状態異常が回復しますが不眠症のお陰でもう寝られません。悲しいなあ……。自然治癒で頑張ってもらいましょう。このキャラの時間はたっぷりあるので。

無痛覚もそのまんま、痛覚が無くなります。通常だと、体力バーが減った時は瀕死時に赤くなりますがこの無痛覚を持っているとそうなりません。事故死しやすくなります。(114敗)ですが痛覚によって動けなくなるといったことが無くなるのでウマ味です。

寡黙についてはただ単にキャラの会話文が減多に表示されなくなるだけなんです。選択肢も顔を横に振る、などの動作になります。ただ他のキャラとの意思疎通及び好感度上げが難しいことになりました。

で、よく分からないのが蹴鞠恐怖症ですね。○○恐怖症っていう特性はたくさんあるのですが、その中でも蹴鞠っておま……。恐怖症の対象となるものを見た場合症状などは様々ですが、身動きが取れなくなったり恐慌状態に陥る特性ですね。まあええか……。蹴鞠なんてそんなに使わんやろ(鼻ホジ)

お次は性格と過去ですね。過去はフレーバー的な物ですが、この過去の欄によって出る性格の性向が決まったり、特定のイベントが起きるものもありますので慎重に決めましょう。

とは言っても、面倒なのでランダムで決めます。(掌クルー)ホレ。

「許せないことがあった」

あつ……。い、いや、まだあの性格だと決まった訳じゃない。まだ慌てるような時間じゃあない。

性格も振りますよ。性格は出てきた過去によってランダムで決まるものです。

「気長」

あー！あー！あー！あー！！（狂喜乱舞）

やりました！神引きです！！

性格が気長ですと…経った年月に連れて経験点という、先程紹介したステータスの値を上げるポイントが増えるという物です。

この経験点というのは一日ごとのリザルトで貰えるものです。その日はやったことのない事をした、原作のストーリーを体験するなどで経験点は貰えるものですが、中々渋いですよね。その点気長だと安心！平安時代からのスタートなので原作介入時には夢のステータスマックスでイケるかもしれませんが！！ひゃっほう！！

…いやですね。なんで過去であんな震えてたかというですね、あの過去が出た時点で80%くらいの確立で性格が「快樂殺人者」、「復讐者」など常日頃から人を殺さなければならぬ性格になるところだったんですね。「快樂殺人者」とかだと人を一人殺せば経験点が必要一つ貰えるんですけど…今回のルートでは御用所や真選組に追いかけられるのは不都合が生じるんですね。

他の実況者兄貴の方で「快樂殺人者」ルートで攻略している神動画があるのでそちらを見て。どうぞ。

さて最後に名前です。何にしましょうか。

毎回名づけで困るんですね…。壊滅的にネーミングセンスが無くして毎回適当に花の名前を付けてきましたが…。

ちなみに前の子の名前は百合ちゃんに桃ちゃんです。見事二人とも虚さんの恋愛ルート開拓の犠牲となりました。二人ともめっちゃ美人に出来たのに…ぴえん。

…よし、空木くんにしましょう。

庭で咲いてたからですな。

じゃ、開始ボタンを押して…イクゾー!!!

おお：村らしき場所からのスタートですね。でも燃えてるなんて、
イツタイナニガアツタンダロウ。

それよりもステータス確認ですね。どれどれ…。

霊力こい、霊力こい、霊力こいっ!!!

空木 変異体 男性

体力：26

霊力：0

知能：48

スタミナ：59

筋力：46

精神力：86

器用さ：73

素早さ：93

幸運：16

変異体特性【不老不死 五感強化 魔眼 日光弱体化 不眠症 蹴
鞠恐怖症 寡黙 無痛覚】

はっ？ちよつとまって。霊力が入つとらんやん…（絶望）どうして
くれんのこれ（憤慨）

以前ステータスでは経験点を振って上げることができると言いま
したが、霊力のステータスだけは無理です。最初から1とかでも割り
振られていれば上げられたんですがねえ…。

ですがこのまま行きます（鉄の意志）

霊力を使わないルートで虚ルートの攻略をしていきますよ。

ちよつと運任せですが、それまでに幸運のステータスを重点的に上
げておけば大体成功するはずです。

それにしても素早さが90代近くあって良かったです。何せ、デメ

リットの日光弱体化を持っているのでこれなら半減してもそれなりの速さを保てるでしょう。意外と精神力や器用さも高めですし、ウマウマ。

それから気になる魔眼くんの性能を調べましょう。

…。

……。

………？

特に視界がモノクロっぽくなるだけで変わりませんね。こんな魔眼ありましたっけ…。

後で調べてみます（攻略wiki頼み）

取り合えず魔眼の使用をやめて、炎上している村を置いて歩きましょう。

そうそう。スタートするとランダムで何月かから開始するようになっていきます。一定の時間が経つと一月が経つようになっていきます。平安時代ですが旧暦とか暦については深く考えてはいけません。

それで…今の月は5月ですって？

早く幼少期虚さんを見つけなきゃ（使命感）

平安時代などの原作外の時代になるとゲーム内では一年しかありません。そして、虚さんがどのマップの村にいるかなんていうのはランダムです。早く見つけないと再スタート待たなします。

うおおおおお!!唸れ素早さ93の足いいいいいい!!!

イベントが発生するまで倍速じゃあゝゝゝ

いるなら簡単に攻撃が通りますが空木くんは驚異の0です。

驚くほどにダメージが入りません。攻撃しても1、2、1、1のレベルです。

でもですね…この妖怪エンカウントでなんとか妖怪を倒して靈力を得られるケースもあるようですがそんなのは極稀です。靈力0では時間の浪費になります。

天邪鬼は二体いますね。そして今の時間帯は夜と…。

日光で弱体化の心配も無さそうなので逃げます。

当たり前だよなあ…。

妖怪は標的を見失うか、朝になると自然に逃げていくので空木くんは逃亡一択です。

あばよく妖怪どもおくくく！

……青年移動中……

まったく見つかりませんねえ…！

というのも、虚ルートではここが最初の難関であります。

虚さんは本当に、まったく、中々見つけれません。これは幼少期でも筋金入りです。

スタート時点では日本の北部あたりでしたので徐々に南下していきますが…、素早さ93でなければどうなっていたことやら…。

どこに虚さんがいるかという判断基準は幼少期虚さんがいた場合のテキストです。虚さんが周囲にいる場合、特殊なテキストが出てくるのでそれを待っています。一応五感強化されているので、察知能力は高い筈なんです…。

あ、そうだ（唐突）謎だった魔眼くんの性能が分かりました。何か急所を見れるらしいです。急所といっても大抵は股間を蹴れば急所になると思うんですが。

…日付変わりましたね。戦闘は時間のロスになるので逃げてますから、戦闘によって得られる経験点の一つもないです。

もう7月になっちまったよ…。やべーよ、やべーよ…。再スタートしたくねえよ…。

『皮膚の焼ける匂いがする』

ま。

!!!!!??????

!!!
(号泣)
確定演出です！とても胸の痛む確定演出テキストが出てきました

これは虚さんが丸太で縛り付けられて焼かれている時のテキストです。他にも『甲高い悲鳴が聞こえる』、『血の匂いが濃くなってきた』など豊富な種類があります。そんな所に力入れなくてもいいから(懇願)

幼少期虚さんが人から暴力を振るわれてますからね…。甲高い悲鳴の時は目玉をくり抜かれていたような気がします。悲しいなあ…。

ともあれ、今回は分かりやすいテキストです(不名誉)

焼かれているので煙が発生して見えますから、そこに行きます。

燃やされてる虚さんの周りで四人くらい人がいますね。最初は話しかけます。

『子供が焼かれている』

「おうなんだテメエはよ。」

「なんならテメエも混ざるか？死なねえ”鬼”殺し。」

…はい。これで虚さんであることが確定しました。これによって

村人の会話によって混ざる、混ざらないの選択肢が出てきますが混ざらないを押します。当たり前だよなあ（憤怒）

「デメエを薪にしてやるよー！」
ということで初めてのまともな戦闘開始です。

村人たちが敵対状態になり攻撃してきます。ここで一人でも村人を生かしておいたら増援を呼ばれて逃げる暇も無くなるので残さずやっちゃいましょう。

折角だから調べたばかりの魔眼くんを使ってみます。
急所見るだけなのにこんなモノクロの視界…フアツ!?

なんとということでしょう。恐らく急所だと思われる部分が緑色に輝いて主張しています。

股間はもちろんのこと、右腕や左腕、首なんてものも薄っすらと緑色の線に囲まれています。

ちよつと試しにやってみましょう。近くにいた鍬を持った人から右腕にある線を切るようにします。

「あがあうあつっ!？」

…ほ？立ち上がってきませんね。いくらなんでもこの装備で倒せるほど筋力も無い筈です。しかもこの村人たちは結構ステータスが高めのだ筈なんですが…。

「や、弥吉が死んだあ!!」

「この人殺しっ!!」

え、えええええ!?!あの一撃で絶命ですって???

もしかして急所って人生の急所ってことですか!?!なんつーチート魔眼じゃ!直死の魔眼レベルじゃねーか!!

おっと逃げようとしてますね！（逃がす訳が）ないです。

じゃけん、(線をスパスパと切ってヤツて) いきましようね。

戦闘終了です。

あーもう返り血まみれだよ。有能過ぎる魔眼くんを止めて燃やさ
れている虚くんを解放します。あちち。

「…だれ？」

ここからが胆です。通常であれば話しかけて会話が成立しますが
空木くんは寡黙です。頷くか頷かないだけでコミュニケーションを
図らなければなりません。

『子供の火傷跡がみると治っていく』

「ご、ごめんなさい…。気持ち悪かったですよね…。

なっ、殴らないで……。」

(横に顔を振るしか選択肢がないです。辛みが深すぎますよコレ。

「な、なぐらないの？それできつたりもしない…?」

顔を縦に振ります。選択肢が寂しすぎますね。通常であれば性格
に対応した選択肢が出てきますが寡黙のせいで動作しかありません。

何とかして寡黙は寡黙でも一言くらい話すレベルに行きたいです。

某三番隊隊長並の無言さはちよつと…。そのまま進行できるか不安
定になります。

あつ、会話しているキャラの立ち絵の会話テキスト部分の下辺りに
苗が見えるのが分かりますでしょうか。それが好感度の目安です。

桜の木がモチーフとなっており、苗↓細木↓大木↓蕾が付き始める
↓花が所々に咲く↓満開という風になります。

しっかし…立ち絵が瞬きするのって良くないですか。フリーシナ
リオに並べてこのグラフィックに立ち絵の細かさ…俺じゃなきや見
逃しちゃうね。

「…しゃべれないの?」

そうだよ(同意) 空木くんは喋れないんやで。なんで寡黙なんて特
性を出した!言えっ!(豹変)

ところで、考え込む虚くん可愛い…可愛くない？

そろそろハイライトの消えている瞳をハイライト入りにしていく育成ゲームが始まりますが、準備はよろしいでしょうか。

「あの…。」

………ついていっても、いいですか…？」

かゝわゝいゝいゝなゝあゝうゝつゝろゝくゝん

顔を縦にガン振りしかないです。

虚くんとの対面時は高確率で虚くんがついていってもいいかの選択肢が出ます。

虚くんが仲間になりました。今後は後ろを虚くんがてくてくとついていきます。そして今の足の速度だと虚くんを振り切ってしまうはぐれてしまうのでゆっくりめに歩くこととなります。

ということどこからがこのルートの土台となる重要な部分です。

ここで上げる好感度が大木程度だと地球破壊ルートに行くことになりません。原作の通り数多の惑星に行きアルタナを暴走させて地球にヘイトを集めて龍脈暴走…なんてことにならないように好感度上げが大事です。

虚くんは知識欲が旺盛ですので、何かを教えたりするとひよいひよい上がっていきます。

言葉を出せないなりに空木くんには頑張ってもらいましょう。

では丁度キリのいい所なので今回の実況はこれで終了とします。

ほな、さいなら。

幼少期虚遭遇く好感度蓄まで part 2

こんばんは。初めましての人は初めまして。ゆっくりです。

今回からは会話パートだらけのこのルートでの山場です。この虚さんの幼少期時に好感度を満開にすると独自のスキルも見れるんですがね。ちよつとそれには日数が足りなさそうです。

あっそうだ。この虚ルートでどのエンディングに行くかを言っけませんでした。そもそもエンディングについて初めのパートで言い忘れているクソ具合。

エンディングというのは特定の条件下で起きるこの魂録編の終了です。場面やキャラごとに細かくフラグが設定されており、そのフラグの達成条件でエンディングが分かれます。エンディングが来たからそこで終了、という訳ではなくエンディング後もエンディングを迎えたキャラで遊ぶことが出来ます。

現在確認されている中で虚さんのエンディングは6つ程度あります。

この動画ではエンディング5「鬼の笑う道」を目指します。このエンディングを迎える為に超重要な条件があります。

松陽先生と朧の生存です。

以前言った通り虚さんとは必ず平安時代で別れると言いましたね。これも平安時代の12月に厄介なイベントが入ってくるからです。イベントは色々ありますが、その中でも厄介なのが坂下畑麻呂イベントです。

一言でいえば、このイベントは坂下畑麻呂というこのゲームのオリジナルキャラが戦いを挑んできます。このイベントで一番厄介なのが坂下畑麻呂は出会った時のプレイヤーキャラのステータスと同じステータスになることです。ステータス差で殴り勝ちが出来ないのでプレイヤースキルで対応するしかないんです。

そして、勝つてもその坂下畑麻呂の部下が不意打ちでプレイヤーキャラ刺してくるとか、負けてもゾンビのように生き返り同士討ちを持ち込んで首を取られます。もう虚さん助けただけで罪になるこの

世界を破壊したい…したくない？

どうあがいてもこのフラグが叩き折ることができないことは検証済みなので、接触しようにもできなくなる前に好感度を上げておこうということですよ。

坂下イベント終了後は虚くんは中々にシャイ（暗殺業）なので出てこず、離別後は松陽先生との接触がメインになります。

以前松陽先生と虚さんの匙加減が難しいと言いましたね。この匙加減によって発生する障害は虚さんの好感度が蓄レベルだと無くなるので…。

今、この時期に！彼の好感度を蓄レベルまで上げなければならぬのです！

じゃないとエンディング1に直行です。朧くんは…まあ松陽先生生存ルートを辿れば大体生きてるので大丈夫です。

ちなみにエンディング2、4に関しては救いが無いです。バッドエンドというかメリバというか…ともかく後味悪いです。頑張つて虚さんの好感度MAXにした先駆者ネキの一番恋愛ルート系で幸せだと思われるエンディング3「君と羽ばたく空」の動画は泣けてきますので是非。

馬鹿野郎お前、俺はやるぞ（エンディング5）

ということが無口ながらコミュニケーションを図っていくゲーム part 2 の始まりです。

ここで確認したいのがステータスです。

体力：26

霊力：0

知能：48

スタミナ：59

筋力：46

精神力：86

器用さ：73

素早さ：93

幸運：16

ここで注目して欲しいのが知能の項目です。この知能が40以上あれば人に文字を教えることができます。

本体なら：このルートで知能の項目は必要無かったやねんけどな
：寡黙が入っちゃったからな：。

虚くんに文字を教えてコミュニケーションを図ります。

え？言葉を教えるには発声も必要？

……。

なんとかかります！空木くんの知能を信じましょう！

後ろをぼーつとついてくる虚くんに話しかけます。

今は村から出て森へ移動しています。昼中なので妖怪の妨害もないねんな。

虚くんに対して何をするかという選択肢が出るのでそこで文字を教えるを選択ウ！

『子供に文字を教えた。もう少しで覚えられそうだ。』

おっしや！もう一度や！選択肢を倍プツシユ！

『子供に文字を教えた。完全に覚えられたようだ。』

よし！これで何とかコミュニケーションが取れますね。良かった良かった。

これからは虚くんからドシドシ質問されますのでそれに答えるだけの作業です。

おお……。好感度が苗から細木になっています。やったぜ。

文字を教えていたら夜中になりましたね。道中に賊とかも出るのでスパス帕斬りましょう。たまに経験点が入ることがあります。妖怪エンカウントに気を付けながら移動します。

やっぱり日中でひ弱になっても一発KOできるのは強いです。本当に日光弱体化はクソ。縛りプレイくらいしか需要ないじゃろ。

”あれはなんですか”

どうやら虚くんが指差しているのは平均より小さい背丈の人型の
ような物体ですね。

つてんらんらん???

”天邪鬼”が現れた」

『：なんと教えようか。』

『餓鬼』『牛鬼』『天邪鬼』

何さり気なく妖怪エンカしてんですかねえ!?

ととと取り合えず、ここ、こ、ここで某ネコに教育するゲーム並
に間違った知識を教えることが出来ますがここは普通に天邪鬼を選
びます。

”なるほどー”」

うーん花丸笑顔が眩しいっ!

こんな状況じゃなければな!

逃げますよ!逃げるぞ俺は!!こんな所で死んでられるか!!

”天邪鬼も人のように切れますか?”」

『はい』『いいえ』『試したことは無い』

きらきらとハイライトが眩しーなー。

うわーどうしよっかなー。どれがアタリを選択肢か分かんない
なー。(白目)

今夜中だとしても空木くんの体力はクソザコ:!!天邪鬼の攻撃4
回くらいで死んでしまいます。たとえ蘇生可能だとしても死亡する
ことによつて虚くんの好感度を上げる時間が減るだけですしおすし
:。

?
いやでも、こんな笑顔の虚くんの期待を裏切ることが出来るのか?

ワクワクとした目で見つめる虚を?

試したことは無いを選びましょう。これ絶対『はい』と同等の意味
の奴でしょ(迷推理)

”もしかしたら切れるかもしれません!”

わたし、気になります!”」

はい。ということで妖怪でも空木くんの謎魔眼が通じるかの検証になります。

じゃけん、魔眼使いましょうね…。

はえー。ふうー。…ほおん？

見えるぞ、私にも敵（妖怪の線）が見えるぞ!!

人よりかは急所ラインが少なめですが見れはするのでやれるでしょう。

なので顔あたりに見える線をぎつくぎくと。

F o o → 気持ちいゝ

素早いとやっぱいいですね。戦闘も素早く終わり、虚くんのキラツキラの眼差しを浴びて戦闘終了です。

” どうやってるんですか？ ”

『分からない』『教えない』

（そんなことは投稿者も知ら）ないです。

どう回答するか迷いますが、ここは素直に『分からない』を選択しましょう。幼少期虚くんと選択肢はちゃんと答えてあげましょう。ハツタリのかまし合いか大人の時期だけで十分だから（焦燥）

取り合えずアタリだったようで、好感度が細木から大木になりました。やったぜ。

あとは似たようなことをするだけなので目ぼしいイベントがあるまでは倍速倍速ウ！

（あつ、日付変わってる…経験点振り忘れた…）

そしてこの間に軽くコメ返しをば。

Q1. ステータス項目の詳しい効果教えて。

素で忘れてました。この画像が一番分かりやすいです。（攻略w i

k i 引用）

体力：体力バーが増える。

霊力：生まれつき持つていなければ割り振ることができない。MP的なもの。呪法（魔法）が使えるようになる。

知能：選択肢が増える。霊力持ちの場合、呪法の消費霊力が減る。

スタミナ：体力の下にあるスタミナバーが増える。

筋力：攻撃力が上がる。重い武器も持てるようになる。

精神力：状態異常に掛かりにくくなる。霊力持ちの場合、呪法の威力が増す。

器用さ：攻撃のクリティカル率が上がったり、細かい作業が出来るようになる。

素早さ：動作が素早くなる。移動速度も上がる。

幸運：良いイベントが起きやすくなる。

Q2. 百合ちゃんと桃ちゃん教えて。

おかのした。

両者とも天照院奈落入りルートで、百合ちゃんは夢の巨乳系、桃ちゃんは魅惑の太もも系で攻めてみましたけどつちもスルーでした。

でも若干桃ちゃんの時は好感度の上がり及早かったような気がします。結局はエンディング2行きでしたね…。かなしいなあ…。

Q3. 霊力あった場合のルートでやるつもりだったのは別霊（わけみたま）？

Exactly（そのとおりでございます）

別霊くんの効果はたったの一つ。体を二つに分けることです。主な使用法は術者に別霊掛けて術の効果を二倍にさせることですが、これが虚さんにも効くことがウン十前のキャラで気が付きました。そのキャラは二人分の虚さんと戦うことになりバッドエンディング行きになりましたがね。

で、気付いたわけですよ。松陽先生がまだ主人格の時に掛けたら松陽先生と虚さんに別れるのではないかと。そしたら見事に松陽先生vs虚さんの夢の構図が見れちゃったんですよこれが。

なので、虚さんと対峙したり、虚ルートを攻略する場合なら霊力と別霊は持つておいた方が絶対いいです。

松陽先生は公式チートの名に恥じぬハイスペックで虚さんを圧倒
できます。流石先生。

何回か虚くんと問答を繰り返してたらもう9月になってますね…。
あと虚くんといられるのは3ヶ月だけです。

でもこの勢いなら蓄までなら確実に行けそうですね…って言うて
る間に好感度が蓄になりました！

ウホホーイ！この調子で特殊スチルを狙ってみましょう！

ここでキリが良いので終わります。

ほな、さいなら。

— — — — —

檻樓小屋の隙間から見える景色だけが癒しだった。

腐った木材と木材の間に見えるほんの小さな隙間、そこから見える
低木の花。

体を千切られ食べられ貪り尽くされて赤い視界の中でもよく映え
る白。

獣らによって千切られても目玉を抉られようがああ泉に浸からさ
れて治された。

最初は助けてくれと叫んだ。

それも漸う掠れていった。

声出すのが億劫になって、死んだ目でただ花を見つめる日々だっ
た。

とうに四肢を引き千切られる痛みは感じず、ただことを行う獣を見
ていると何かがつつと湧き上がる。

いつまでも飢えたように貪る獣。よく飽きないことだと感心すら
する。

…いつまで？

俺はいつまでも食られるのか？

——それに気が付けば村を燃やしていた。

皮膚が溶けても骨が焼けようとも蘇って苦しむ様は見物だった。死んでもまた徐々に蘇る、手足を虫の様にやたらと動かし苦しい苦しいと呻く姿で久しぶりに笑えた気がした。

それでも、ふと目に見えた光をなぞれば蘇ることなく死んでしまった。

それではあいなきこと。

もつと燃え焦がれればいい。

取り入れた血肉が無くなるまで、そう、ずっと。

獣が燃える火を見つめていれば、自分の名前は何だったのか忘れてしまっていた。

あれ、これ、それ、餌、肉。

あれは名前か？これは名前か？それも、餌も肉も？

名前。名前。名前？

辺りを見渡せば人よりも焼け焦げるのが早かった花の残骸が見えた。

空木。そう、名乗ればいいか。名乗らなくてもいいか。

餌よりも、肉よりもはいい。

どこへ行くことも分からず、ただ足を動かした。

平安時代終了まで part 3

おはようございます。初めましての人は初めまして、ゆっくりです。

とりあえずこの平安時代のパートでやることは終わったので安心しながら進めています。後は別れる時に坂下イベントが起きない事を祈るのみです。現在の月は9月。これならワンチャン好感度MAX行けるのでは…？ボブは訝しんだ。

ということでも頑張って上げてみようと思います…しかし、前回の倍速時と同じことをするだけなのでまたもや倍速です。すみませんねえ…。

というか（振り忘れた）経験点をそろそろ振り分けたいので月が替わって欲しい…欲しくない？

経験点をどこに割り振ろうか迷いますね。クソザコ体力か、これから重要になる幸運か…。

坂下イベントのことを考慮すれば体力に振り分けられない方が良いでしょうね。あやつ、マジでどういう理由なのかステータスコピーしてきますから。空木君のクソザコ体力をコピーしたら数回攻撃すれば落ちると思います。幸いにして、攻撃力に補正が掛かる筋力や器用さは高めなのでね。いや、攻撃速度とかを見れば一筋縄ではいかないんですが…。日光弱体化もありますので、日の当たる場所でイベント起こせば楽勝っぽいですね！

そう考えると坂下イベントが来ても怖くなくなってきたゾ。イベントが来た場合には何とか勝ってみようと思います。みとけよみとけよ…（坂下の死に様）

月が変わりました。経験点振り分けのお時間よ！ちなみに経験点を振り分けられるのはこの瞬間だけです。

あとはスキルといって、その動作を行う許可証みたいなもんも経験点を消費して得られる物があります…が、このチャートではスキルの習得はそんなに無いです。

空木 変異体 男性
体力：26

霊力：0

知能：48

スタミナ：59

筋力：46

精神力：86

器用さ：73

素早さ：93

幸運：16

変異体特性【不老不死 五感強化 魔眼 日光弱体化 不眠症 蹴

鞠恐怖症 寡黙 無痛覚】

経験点：11

経験点は11ですか…。まずまずですね。全部幸運に突っ込みましょう。

空木 変異体 男性

体力：26

霊力：0

知能：48

スタミナ：59

筋力：46

精神力：86

器用さ：73

素早さ：93

幸運：27

変異体特性【不老不死 五感強化 魔眼 日光弱体化 不眠症 蹴

鞠恐怖症 寡黙 無痛覚】

経験点：0

…よし！（肉炙り）

では10月入りまゝです。いつも通りに虚くんに会話責めする日々が始まります。今まで散々教えてきたのでもはや並大抵の会話では好感度は上がりません。なので普通に会話の選択肢（好まれる答え）、何らかのプレゼントも織り交ぜると効率良く好感度が上がります。ラーニングボーナスは最初の方だけなんですよねえ。プレゼントにも好感度が上がるもの下がるものがありますが…。

さて、視聴者の方々は背景で流れる会話で薄々お気づきでしょうか。

虚くんの目にハイライトが入りました。

これは好感度が蓄になるとなる現象です。カワイイ…カワイイ…。

やっぱ幼少期は…最高やな！

おっと失敬。

そうそう会話責めする際には10回話しかけたら少し時間を置くと良いです。画面上でも10回話したので一定時間は移動に当て、会話ボタンを押していません。

というのも、10回以上話しかけ続けるとどのキャラでも嫌がられるようになります。端の方に話しかけ続けた時の反応を乗せました。幼少期時点の虚くんでは眉を顰めてムツとした表情になります。連続で話しかけられたらそらね？

大人の虚さんに話しかけ続けると無言の笑みの圧力が掛かります。好感度によっては首を切られます（44敗）

特に見所さん!?!も無いのでカットだ（無慈悲）

11月になってます。この頃には虚くんの好感度が蕾から花が所々咲くようになってます。というのも、プレゼント効果のおかげです。自前の器用さを生かし、近くにあった木を伐採し木材に変えてから木像を作りまくってプレゼントしてました。手持ちにある刃物は刀しか無かったんですが…。刀は斧じゃないってそれ、一番言われているから。

正直言うと幼少期虚さんにプレゼントの好悪は無いです。なので物量で攻めました。折角の器用さと素早さを生かせば何十体もの木像を制作できます。

そしてそれをそのまま（幼少期虚さんに）シユウウウー！超！エキサイティン！（好感度満開）

いやー見られるとは思いませんでしたね、スチル。見とけよ見とけよ。

こんな花持つて無邪気に笑う子が将来ラスボスになるってマ？世界壊したくなりますよ（獣の感性）

はい、これで11月が終了です。この時に今まで貯めてきた経験点を入れ忘れないようにしましょう。

空木 変異体 男性

体力：26

霊力：0

知能：48

スタミナ：59

筋力：46

精神力：86

器用さ：73

素早さ：93

幸運：27

変異体特性【不老不死 五感強化 魔眼 日光弱体化 不眠症 蹴

鞠恐怖症 寡黙 無痛覚】

経験点：9

例によって幸運にぶち込みましょう。

空木 変異体 男性

体力：26

霊力：0

知能：48

スタミナ：59

筋力：46

精神力：86

器用さ：73

素早さ：93

幸運：36

変異体特性【不老不死 五感強化 魔眼 日光弱体化 不眠症 蹴鞠恐怖症 寡黙 無痛覚】

経験点：0

36、普通だな！

そしてとうとうやってまいりました12月。もういつ、何処で離別イベントが起こってもおかしくない状況です。そこらへんの地形やら石ころやらでも何かしら原因となつて虚くんと別れる時期になります。街道やあぜ道なんて持つてのほか：でも、出来るなら崖エンドがいいですね。死亡判定出されずにランダムで日本列島内を移動することが出来ます：つてあああああああ!!!

＜背後から馬の足音が聞こえる。

よりにもよつて坂下畑麻呂イベントです。畜生め！

虚くんには逃げろという選択肢を押しておきます。好感度も高いので素直に従つてくれます。可愛いですねえ…。

『我こそは坂下畑麻呂なり！』

馬から憎いあんちきしようが降りてきました。

はい、ということでも坂下畑麻呂戦です。というか今夜中で：あつ（察し）

『神々たちよ！私に力を！』

あーもうめちやくちやだよ（死亡フラグ）

ということでも先程紹介したステータスをコピーされて戦闘入りませう。救いなのは変異体特性まではコピーしないという点です。

空木くんのステータスには素早さが90代というのがあるので、何と難易度がバグったのかと言いたくなる位の速さで攻撃してきます。最大の敵は自分のステータス、はつきり分かんかね。

そして攻撃力には筋力や器用さなども加算されるので滅茶苦茶ダメージを削り取られること必死です。今まで自分がやってきた行い

が名乗りを上げて馬から降りた。

「貴殿がかの噂の鬼と聞き、退治に参った」

「鬼？俺が？」

「数多の民草を斬ってきた報い、ここで受けてもらおうぞ！

神々たちよ！私に力を！」

そう告げて刀を構えた途端、青白い気が目の前の奴から立っているのが見えた。

——危険だ、そう思つて後ろに避けた。その後、目の前の奴の刀が通り過ぎた。

速い。今まで対峙したことの無い速さに心臓が早まっっていく。体が少しばかり震えていく。

「己が力によつて身を滅ぼせえ！」

最初は避ける、その速度を見定める。相手の隙を見つける。何ならあの不思議な視界も使つて目の前の相手を殺さなくてはいけない。

僅かに自らが苛立ちを覚えていることに気付いた。目の前の、坂下畑麻呂と名乗る奴を許しては置けない。殺せ、殺せ。

その一心で相手の刀を受け止め弾く。動きは型に嵌り単調であり、先程から砂を掛ける石を投げるなどの搦め手も扱ってこない。それならば、相手はただの数の多い賊以下であり対処は楽だ。呼吸音は斬り出した時より上がっている、目が忙しく動き焦りを見せている。

一拍動きが遅れたその足、小石に纏れたその時に腕の具足の紐を切る。邪魔くさいそれらを土に塗れさせてやる。廻り殺してやる。

坂下の正面から即座に移動し背後に結ばれた諸々の具足の紐を切っていく。草摺、脇板、逆板らがぼろりと意味をなさずに落ちていく。坂下が反応しこちらを振り向く際には大袈裟な装飾の付いた兜の緒を切り蹴り落とす。

(ああ……いっ……)

速度に慣れていない。自分で振るつたはよいものの、速すぎて心が追い付いていない。体から青白く立ち昇る気、面妖な術を使って強くなつても内面は凡人のままであつて強くない。

「弱……」

「弱いだと……！」

つい零れた言葉に反応してか先程よりも乱暴に振るう。顔を真っ赤に染めながら我武者羅に振るうのは刀を習いたての時の稚児の行いだ。型も関係無く俺を斬りつけようと動く。動物的な動きは、先程より単調だがどう動くのかは不規則。

「俺は選ばれたんだ！お前を消すために！」

「大層な御使命をお持ちで」

ただの餌だった俺如きに神仏も妙な奴に加護をお授けなさる。俺の声は届かなかったというのに、こういった奴の声は届きその御手を差し伸べるのか。ああ不可解なり神仏の心情。

具足を全て剥ぎ取られた坂下と鏢迫り合うような形になる。

「お前は神仏への感謝を忘れた不屈き者だ。尊き血を持ちながらその血を穢した一族め……！」

「貴様のような賊には言われたくない言葉だ」

無性に苛立つ。勝手にあれこれと言われるのは嫌いだ。数回打ち合い、後ろへと下がったその身を目掛けて不思議な視界へと繋げる。

瞬時に無彩色の世界が広がっていく。俺を生かした泉と同等の、忌々しい色の光が生命線を告げる。右太腿、刀を持った左腕、首、それから頭。その線に向かって長く握ってきた刀で断ち切る。

「かはっ！」

穢れた音を出しながら目の前の男の体から血が噴き出した。その姿に張り詰めていた息を出す。

：その時、確かに俺は気を抜いていた。己が速度に稚拙ながらも付いてきたことに驚いていた。

だから、背後の方で荒げた息が聞こえず首を許してしまった。

途端に宙を舞う視界、集中が途切れて視界も元に戻った。己の首を取ったと高らかに笑う、もう一人の具足の男。その遙か後ろの茂みに見えた茅色の髪の童と目が合った。怯えながら、全身を出会った時の様に震わせながら光の消えた瞳がこちらを見つめていた。

——逃げろと言ったのに

暫く意識は戻りそうにない、そう思いながら俺の意識は暗く落ちて

い
っ
た。
。

鎌倉〜戦国時代編

鎌倉時代〜戦国時代終了まで part 4

こんにちは皆さん。初めましての方は初めまして。

一先ずするべきことが終わったのでこれから何をするかと言うと、経験点稼ぎです。それから戦国時代に是非とも作っておきたいコネがあるので今回はちゃちゃつと鎌倉時代をやって主に戦国時代のサブイベント垂れ流し回です。

そして空木くんの選択肢が動作じゃなくてやつと言葉も出てくるようになってきたpart4が始まります。

鎌倉時代や戦国時代などの戦乱の時代で一番良いと思うのが人を斬るだけで好感度がぬるつと上がるところです。戦場で人を殺せば英雄になれるって：本当だったんやなって……。

ということと戦に参加しましょう。この時代なら傭兵的な存在として戦争に参加できますので。どこに入っても特に影響はないので好きな陣営に入りますよ。この時代と言ったらあれですよ、元寇。そして、元寇といえばTSUSHIMA。

それじゃあ皆一緒に!!

コトウン・ハーン!!

特にないのでカットカットオ!!

鎌倉時代の12月が終わりそうなところで：戦国時代に突・入!

ここでは後の仙望郷へのフラグ乱立ターンです。というのも来るスタンド温泉編で武将たちに顔パス効かせて超ロックおな女将に働かせてもらうだけなんですけどね。それからちよつと特殊なイベントが起きるのでその為のフラグ成立への布石でもあります。

戦国時代に入ったら真つ先に織田信長陣営の足軽募集会場に行きます。鎌倉時代と違って必ず織田信長陣営に入ってください。後々のフラグになるので。それから戦国時代では徳川の天下泰平までが12月なので、戦乱の渦にわざと入り込み経験点稼ぎと天下人の好感度稼ぎをしましょう。明智光秀の好感度はあまり無くても大丈夫で

す。光秀よりかは信長の方が遥かに好感度は上がりやすいのです。

武将の好感度を上げる方法は戦場で人を斬ってあげれば良いだけなので。プレゼントとか会話イベントも必要ありません。なんて楽な方法なんだ：（恍惚）

はい。無事に織田軍の甲冑を背負った足軽になれたのでこつからはただ斬り殺していくだけの作業ゲーです。五感強化+甲冑の笠によつて日光弱体化が無くなった今、向かう所敵なしです。

ということではいいはい倍速倍速。

そうすると（ダルダルのブリーフを履いた）織田信長から呼び出しが掛かります。これにいいえを押すと即打ち首なのでいいを押しましょう。というかメリツトしかないのではいいを押すしかないんですがね。

すると褒美として刀を貰いました。ここで貰える刀はランダムです。へし切り長谷部とかも貰えちゃったりします。今回の刀は特に号の付いていない無名のゲームオリジナル武器です。うーん、このシンプルに織田家の家紋の入った蠟色塗の鞘セクシー！エロイ！刃も肉厚でええやん：。攻撃力が鎌倉時代から使用している刀より高いので装備しましょう。オニニューな装備で戦場を駆け巡るぜ！

そして戦場に戻り作業ゲーの繰り返しです。武将のイベントが起きるまでこれなのでカットですよカット。

オラッ！○ボタン押して無双ゲー解放すつぞテーマー！

次は織田信長から茶会の呼び出しが掛かります。これにいいえを押すと打ち首（以下略）

ただの会話パートなんで読み飛ばしてもいいです。武将の茶会イベントは「お前の事信頼してるで」という好感度が爆上がり+対象の武将に顔パスが効くようになるだけなので。

でも好きな武将に信頼を置かれるのはいいですよ。まあ、私の好きな武将は銀魂本編に出てこないモブなので好感度上げられないんですけど（クソデカ中指）

そうすると本能寺の変で織田信長が死亡したので、戦場から一旦離

れることになります。今度は豊臣秀吉の足輕募集会場に行きます。戦場で結構顔を会わせているせいかな秀吉の好感度が高めだったので歓迎されました。これ流れる的に山崎の戦い…いえ何でもありません。パパとかつての同僚を斬りましょう。すまん明智光秀、名持ち武将の経験点は美味いんだ（下衆道）

次は（染み付きブリーフを履いた）羽柴秀吉から茶会の呼び出しが掛かります。これにいいえ（以下略）

時代が時代なので上下関係が厳しいです。上司の呼び出しには絶対に答えましょう（9敗）

豊臣秀吉ですがなんとまた刀を貰っちゃいました。またもやゲームオリジナル武器ですが、この刀も中々良いですね。案の定豊臣の家紋付きですが、螺鈿つて綺麗ですよねえ…。でも攻撃力が信長から貰った物より低いので装備しません（無情）

カットしまくり、今度は（高級ボクサーパンツを履いた）徳川家康から茶会の呼び出しが掛かります。この徳川家康の茶会イベントではもう天下取ってるので経験点稼ぎの戦場が無くなります。太平の世が来るのちよいと早い…早くない？もつと長引いて経験点稼ぎさしてくださいよお（人間の屑）

とか言ってる間に刀を貰っちゃいました。まあたゲームオリジナル武器ですが、珍しく梨地塗ではなく印籠刻の鞘です。これまたかっこいい…攻撃力は信長から貰った物と五分五分ですね。気分によって使い分けてやんよ。

…というかアイテム欄確認すると滅茶苦茶刀が入ってますね。戦場で拾ったにしろ多すぎる…。つてお！ええやん！名刀があるやないの！

つてええええええええ!?村雨があるじゃないですかあー！ヤダー

!!!（大歓喜）

おっと、取り乱してしまいました。このゲームにはこういったね…ソハヤノツルギとかの刀も充実しているんですよ。その中でも村雨といったたら人を斬れば斬る程切れ味が良くなり攻撃力が高まるといった効果があります。いわゆるコンボ効果とも言いますか…。と

もかく、レア刀が手に入ったので超絶ラッキーです。

やや、ここで戦国時代の12月が終わりました。史実と違ううんぬんかんぬんは流しましょう。

それから経験点を振り分けましょう（振り分け忘れがち）

空木 変異体 男性

体力：26

霊力：0

知能：48

スタミナ：59

筋力：46

精神力：86

器用さ：73

素早さ：93

幸運：36

変異体特性【不老不死 五感強化 魔眼 日光弱体化 不眠症 蹴

鞠恐怖症 寡黙 無痛覚】

経験点：82

おっほwww経験点うまうまでござるwww

人を斬るだけでこんなに貰えるなんて…戦国時代は最高やな！

もう幸運に全てぶち込み、それから素早さにもぶち込み…残りはスタミナにでもぶち込みましょう！

空木 変異体 男性

体力：26

霊力：0

知能：48

スタミナ：72

筋力：46

精神力：86

器用さ：73

素早さ：99

幸運：99

変異体特性【不老不死 五感強化 魔眼 日光弱体化 不眠症 蹴鞠恐怖症 寡黙 無痛覚】

経験点：0

そしてやっと来ましたよ。江戸時代。そろそろ天人の初めての地球襲撃が起きる所で終わろうと思います。

そう：皆さんお待ちかねの第一次攘夷戦争が始まります。ほな、さいなら。

一一一

戦によって寄せ集められた民兵たちは震えていた。支給してもらった武器も防具も手が震えて付けられず、その場に立ち竦む。耳の良い農民が音を聞いた。人の悲鳴、掛け声、肉の斬られる音に刃が空を切る音。

その音を聞いてしまった農民は哀れにも膝が震えて立てなくなつた。この付近にはアンモニア臭が漂うほど、民兵たちは怯え切つていた。死ぬために戦に来た訳ではない。畑や家族を守る為、楽に飯にありつく為の者も多かったがどれも共通しているのは死にたくないという感情。

「おつかねえ…おつかねえ…！」

「さっさと逃げんと殺される…！た、助けてくれえ！」

足の震える音だけではなく怯え切つた悲鳴が彼らの首を斬る。目前には彼らの悲鳴を聞きやってきた鬼がいる。

片手には先程まで談笑し合っていた者の首が無惨な顔を晒しながら露呈していた。

目の前の鬼は見たことの無い色をしていた。見たことが無いというのは恐ろしいこと、目の前で首を瞬時に斬るような輩なんぞ。

「お、に…」

鬼じゃないか。そう呟こうとした民兵の頭は刈り取られた。

鬼は首を投げ捨てながら次の獲物を探す。敵は殺せ、誰一人として生かさない。そういつた気風の時は、少なからず100年以上も人

に恨みを抱いていた鬼には酷く心地が良い物であった。人を斬るだけで飯にありつける。何とも良い時代だと、鬼は笑う。

かつてはこの世にいて猛威を振るっていた怪異もいなくなった。喧しい人々の神秘的な存在への信仰心も徐々に薄れ、関心を寄せていなくなつた。神仏を象る像も腐り錆びれば無様、放置され兵に踏まれば滑稽な造物である。

とても気分が良い。酒で酔つたことは無い鬼は、上機嫌になりながら人を斬る。

——しかし、脳裏に掠める茅色の髪の子が、こんな姿を見たらと思う時もある。わざわざ卯の花を手折って見せてきたあの童の笑顔が鬼には刻み付いていた。

もう死んでいることだろう。傷の治りは早くとも、寿命までは伸ばせまい。ああ、それでもあの童の目があの時の様に怯えていたら…。

益体も無い幻に鬼は翻弄されながら、先程より些か勢いが落ちながら鬼はひたすらに戦場を駆けた。

大名から刀を貰うことも増え、その刀の切れ味や性能が良ければ幾らでも貰う。その恩があつても敵対するなら殺してきた。女や領地には関心も良い思い出も無いので呼ばれようとも無視して避けた。無理に女を差し向けられようが、刺客を送られても斬り殺せば良いだけである。寝れもしない鬼に夜に忍ぶ者達は一斉効かなかつた。

時には同じ陣営にいた者を斬り殺した。恩知らずと叫ぶその首は何度目だろうと鬼は考えながら斬る。

人の屍を積み重ねれば重ねる程鬼は英雄視され、畏怖されていった。

そうして世の中に泰平が訪れた。徳川家康率いる東軍にその鬼の姿はあつた。

一一一

「ほほほ…まさか、かの鬼卯月殿に東軍に付いて頂けるとは」

「…その名は何だ」

目の前で金色に揚げられた天婦羅を食べながら狸が言う。確か、そう言った不可解な名でそう呼ばれることは多々あった。自らは空木と名乗った筈だが周囲には卯月と聞こえてからはその名で呼ばれていたが：しかし鬼と付くのは嫌いだ。

食膳に乗せられた猪口に徳利を傾けた。透明な色が流れ猪口を満たしていく。：透明な酒というのはいっつ見ても不思議なものだ。酒はいつも濁っている物が普通だった。

「数多の戦場を潜り抜け、どんな軍勢も策も向かう所敵無しであった貴方の異名ですよ」

「はあ…」

少し目を瞑れば疲れは取れ、物音が人よりよく聞こえ、目も遠くを見渡せるだけだ。どんな軍も指揮を執る頭を潰せば良いだけだ。ヤケクソになつて立ち向かう奴らには隙に斬り込めば良いだけだ。

「貴方には領地を与えるよりも刀の方がよろしいでしょうから、特別に腕の良い刀鍛冶に用意させたんですよ」

狸は立ち上がって軸の前にある刀掛けにある刀を取った。黒地に印籠刻の鞘が特徴だ。鏢から数えて二つか三つ目の所に徳川を象徴する三つ葵の家紋が刻まれてある。

「これをどうぞ」

放り投げられて掴み取る。丁寧に巻かれた柄巻を握り刀身を確認める。信長に貰った刀と同じで刃が厚く、それよりかは細身だった。刀身を鞘に戻す。切れ味も使い勝手も良さそうだ。

「感謝する」

「ほほ……何、貴方には頼みたいことがあるだけですよ」

「何だ」

そういつて目の前の狸は人の良さげな笑みから真剣な顔付きへと変わった。食膳の前に戻り、好物である天婦羅にも手を付けずに肘掛に掛けながら見据えている。

刀を側に置き、視線を返す。

「そう、私が若者であった頃から一切年を取っていない貴方にしか頼めません」

戦場では若くして死ぬ奴の方が多い、狸の様な長く生きている奴の方が珍しいくらいではなからうか。：まあ年を取ってないと不思議がられる、その度に若作りだの二世だの何だと言っておいたがこういった奴には見抜かれてしまう位稚拙な嘘ではあった。

「私の元に古くから時の権力者の暗部を担ってきた天照院奈落が付きました。これからは彼らを使つて政敵を消していくでしょう」
「…」

「そして、我が徳川家の栄光も続く。しかし、長く続く物には膿が溜まりやすい。：私よりも長く世を見てきた貴方なら分かるでしょう」

猪口の酒を一煽りし、家康はそう告げる。凡人はよく永遠を望むものだ。永遠の命、永遠の若さ、永遠の繁栄…。終わるからこそ良い物だと分からずに、愚直にそれらを求めて自滅する。

永劫に続く命など生きているとは言えない物だ。死んでいるのと同義であると、そのことを理解せずに消えていく。もつと他の事に時間を使えばいいというのに。

「そうなった場合には、是非とも我が徳川家の裁定を願いたい。世俗から離れている貴殿なら時勢に流されず腐った栄光を断ち切つてくれるでしょう」

「…行う利が無いな」

「いいえ、何れありますでしょう。我らが疎ましくなられる時が」
「…」

永遠の命を求めるのは大抵が権力者だ。かの隋だの唐の国の方でも不老不死を求めた皇帝の逸話があるという。

確かに今まで狙つてきたのはそう言った奴らだ、農民や商人らは日銭を稼ぐのに忙しく、そんな夢物語を一々探す暇も無い。だから大抵が暇な金持ち、権力者だ。そういった奴らを物理的に消すのは簡単だが、些か波が立ちすぎる。

恐らく今も続いているであろうあの家系に、俺の存命を疑われるのも面倒だ。

「私の日記に残しておきます。何れその刀を持った者が腐りを断ち切ると」

「受けるとは言っていないが」

「その刀を受け取った時点で了承したも同然ですよ」

けらけらと笑う狸にしてやられたと思ったが、同時に有難いとも思った。気に入らない奴を斬る大義名分が出来た訳だ。目の前の狸に抗うのは諦めて猪口に注いだ酒を飲む。ついでに天婦羅。意外と上手いがこういった時にしか食べられないのが難だ。

…いつそのこと自分で作るか？材料と器具、厨さえあれば何とかなるか？

「本日はゆつくりしていつてください。何、戦友との語らいの場ですから家臣も忍も付けてはおりません」

「随分と気を許しているな」

「それは勿論」

それからは目の前の狸と戦場であつた笑い話や逸話のことなどを話し、徳利の酒が五度変えられた辺りで帰ることにした。

忌々しき日はとうに落ち、徳川家の屋敷の廊下は暗かった。ああ落ち着くと思いながら屋敷の出口を目指す。

隣に人が通り過ぎたのが分かった。…ここらでは中々見当たらない、茅色の髪をしていた。

脳裏にあの童が過る。あの子は無事に天命を尽くせただろうか。何事も無く、人らしく生きていただろうか。ただ傷の治りが早いというだけの童も寿命には勝てまい。もうあの童はどこにもいないのだ。そのことを切なく思いながら屋敷を出る。

冷たい夜の空気が肌に馴染む。次は何処へ身を隠そうか、そのようなことを考えながら道なき道を歩いた。

幕間 とある虚のなき声

父も母の顔も知らず、赤子の頃からぼつりと村に置かれていたのが私だった。みなしごである私を村は受け入れ、普通の子供として育ててくれた。

同年代の子と追いかかけ合い、私は酷い転び方をした。肌が擦り切れ、皮膚に石がのめり込むほどの怪我であった。しかし、そんな傷は心配して私の元へ来てくれた子供の目の前で治った。

そこから悪夢の始まりであった。

そのことを子供は言いふらし、私は気味悪がられるようになった。その子から遊ぶ誘いも無く、人の視線に貫かれる日々だった。みなしごである私を受け入れてくれた、家族と呼んでいた人からもその視線は注がれ続け、時には手をあげられた。

日々が過ぎるにつれ、私には視線だけではなく石が投げつけられるようになった。初めて私に石を投げたのはあの日共に遊び、私がこのような状況になった原因の子供であった。

石を投げつけられることが普通になり、次第に村人たちから暴力を振るわれることが私の日常となった。

痛かった。投げられた石は頭に当たり、皮膚を用意に切り裂いた。向けられた暴力で骨は何度も何度も折れた。首の骨を折られた時、初めて死亡した時には意識が暗く落ちて：：また目が開けられることに絶望した。霞んだ視界でも怯え歪んだ村人の顔はよく見えた。口が僅かに動き「鬼」と言われたことも聞こえた。

そこからは村人総出で私の殺し方を模索するように、私は何度も殺された。薪割り用の重たい斧の刃で首を切られた。頭を棒で殴りつけられ中身が出ても構い無しに叩き込んだ。心臓を抉り出されて目の前で握り潰された。

殺し方を模索するというより、村人たちは楽しんでいた。それと同じ時に私を恐れていた。だからいつも縄で縛られて身動きの取れない私を甚振った。目玉を抉られた、耳を削がれた、足を潰された、気絶するまで体中を殴られたこともあった、痛みに震える私を面白がった

のかゆつくりと刃物を突き刺されたこともあった。

長く続く暴力に疲弊して叫ぶのを止めた。何をされようともどうでも良いと思つた。

しかし、村人たちにとって反応が無くなるのは困る事だった。私は丸太に括られ焼かれることになった。未知の痛みには私は久方ぶりに叫び声をあげた。皮膚がちりちりと徐々に爛れていく、何とも言えない匂いが辺りに充満した時だった。

見慣れない人を見た。顔が俯いており、剥き身の刀を引き摺って歩いていて。髪が無造作に伸びてその人の陰気さを一層醸し出した。た。

「おうなんだテメエはよ」

「なんならテメエも混ぜるか？死なねえ”鬼”殺し」

村人が気安く声を掛けた。その人は少し顔を上げ、髪で隠れていた緑の目を露出させた。じいっと三人の村人の顔を眺めてから、ゆつくりと顔を横に振つた。

村人はやれやれと溜息を吐いて、燃やされる前まで私を殴ることに使っていた鍬を構えていた。危ない、逃げて、と言おうとしたが声は掠れて届かなかった。

「テメエを薪にしてやるよ！」

その人はそつと瞬きをして手に持つ刀を振るつた。その刀が村人の右腕をそつと撫ぜた瞬間だった。

「あがあうあつっ!!」

口から血を吐き出しながら村人の体が崩れた。たった一振りのことだった。見覚えのある顔が白目を剥きながら、私と同じように体を虫の如く震わせて止まった。からんと落ちる鍬の音だけが響き、二人が怯えたようにその人を見ていた。緑の目がまたもゆつくりと瞬きをし、その二人を捉えていた。

「や、弥吉が死んだあ!!」

「この人殺しっ!!」

悪態を吐きながら二人が逃げるのを許さず、目にも見えぬ速さで近づき、弥吉と呼ばれた村人と同じ様に首や左腕を刀で撫ぜて、その二

人も同じように死んでいった。

呆気ない終わりだった。私を今まで苛んできた者を容易く振り払ったその人は、燃えている私に気付いたのか私を括りつけた縄ごと丸太を斬った。地面に崩れ落ちた私をその目が見つめていた。

…その人の目でなら何度も蘇る私を殺してくれるのだろうかと思えた。

「……だれ？」

せめて名前だけでも聞きたかった。そんな思いを抱いた。…その時の私は自分の状態を忘れていた。足元は火傷跡まみれだった。燃やされている間、何度も火傷が治ってはまた火傷を負うことの繰り返しだった。私を燃やしていた火が無くなった今、火傷は治るだけであつた。

その様子をその人の目が見つめていた。皮膚が蠢き、元の白さに戻っていく悍ましい光景すら瞬きせずにと見つめられ、私の胸は曇るばかりだった。

「ご、ごめんなさい…。気持ち悪かったですよね…。」

なっ、殴らないで……。」

一歩動いたその人に身構えた。頭を殴られるのはいつも痛い、腕を顔の前に出して殴られても大丈夫なように構えを取った。

目を瞑り、痛みに耐えようと心構えを決めていた。しかし、いつまでたってもそれはやって来ず、ちらりとその人を見た。その人の緑の目と視線が合つて、顔を横に振られた。

嘘のようだ。あんな光景を見たから、自分は叩かれる物だと私は認識していた。

「な、なぐらないの？それできつたりもしない…？」

愚かにも私は質問を投げ、その人は顔を横に振った。口を一切動かさず、動作のみでその人は私と対話していた。僅かに眉を下げている、そんな気がした。

その人は喋らなかつた。何も、叫びも呻き声も無く、互いの呼吸音と燃える丸太がぱちりと火の粉を散らす音だけがその場にあつた。その人の様子に、私は一つの考えが浮かんだ。

「…しゃべれないの？」

その人は顔を縦に振った。——ああそうなんだ。この人もなんだ。そんな根拠のない自信が私にその言葉を告げさせた。

「あの…。」

………ついでにいつても、いいですか…？」

その人が顔を縦に振り、私の悪夢が終わった。

村が燃える火はあんなに綺麗だったのかと感じた。体に、心全てが喜んでる様だった。

久しぶりに自由に障害物の無い道を歩いた。体を動かせることに喜びを感じた。そんな私を緑の目が…、初めて見た時よりも柔らかい印象を与える様になった目が見つめていた。

その人は私に文字を教えてくれた。それによつてその人と言葉を交えることが出来た。

その人は私に知識を与えてくれた。物、花、たまに出会う怪異について知っていることを教えてくれた。ニアはレプリカントが一番最高だと教えてくれた。ニア、レプリカントというのは分からなかった。

その人は私に物を与えてくれた。『アツガイ』と呼ばれる機体が初代の作中で一番可愛いものだとして教えてくれた。初代というのが何なのかは分からなかった。

その人は私に秘密を話してくれた。視界が人より違うのだと、それによつてあの村人も消してくれたのだと教えてくれた。

その人は色々な物を私に与えてくれた。失っていた物を取り戻したかのような、充足した日々だった。

私は常に楽しくて堪らなかった。もつとこんな日が続けばいいのにと願っていた。

しかし、唐突にしてそれは崩れた。月も見えぬ夜空の中、不思議と馬の足音が聞こえていた。

「逃げろ」

たったの三文字の言葉だった。初めて聞いたその人の声だった。それでも有無を言わせぬ力があって、私はその場を離れた。…離れて

しまった。

逃げろと言われて、人から見えぬ場所、草が方々と生い茂る場所へ無理矢理掻き分けながら進んだ。足を進める度に夜が深くなっている。進む度に縋りつきたくなる気持ちになっていった。それでも「逃げろ」と言われたならば逃げなければならなかった。：しかし、私は身に走る恐怖に負けて道を戻った。

遠目から、その人が——師が、誰かと戦っている姿が見えた。師はいつも一振りで賊も、怪異も薙ぎ倒していたから少しばかり新鮮だった。草葉に隠れながら見る闘いは、やはり師の方が優勢であり見事にその首を討ち取った。師は凄いお人なんだ。そう思って、その姿に駆け寄ろうと足を動かした、その時だった。

師の腹から刃が生えていた。赤い、幼き頃に何度も見た血が、流れて地に落ちていた。

それを行った無粋者は、次に師の首を斬った。滑らかに、高らかにその御首が飛んでいた。斬られた黒髪が夜に溶けながらも揺れ、その：忘れがたき緑、蒼とも呼べる瞳が、真中に深淵を映した瞳が私を捉えた。

無様に震えた私を見て、諦念の色を浮かべて閉じられた。

弧を描いて飛んだ師の御首は無粋者の手に収められ、そいつが獣の様に興奮しながら雄叫びを上げていた。そのまま馬で駆けていく姿を横目に、私は震えながら首の無い師の元へ寄った。周囲には伸ばされていた黒い髪がくるりと円になりながら落ちていた。それを集めながら、首の無い師を揺さぶった。

「ね、ねえ…起きてください、起きてください」

揺さぶっても師は起きない。師はいつも私より早く起きていたからだ。

私は師の名前を知らなかったことを、その時に気が付いた。私は隣にいなながらも、師について何も、名も経歴も知らなかった。：師が寝ていなかったことにすら、師の隣で惰眠を貪っていた私はまったく気が付かなかった。

「起きて、ください」

師は起きなかった。

私は遺体を土に埋めようとしたが、私の腕の力は酷く弱いものだった。せめてもの、師の代わりとして師がよく扱っていた刀を持ってその場から逃げた。

行き先なんて分からず、月の光も差さない道を歩いた。何日も、日が昇ろうと月が満ちようと歩き、私は倒れた。

その先で村に拾われて、受け入れられた。…だが、そこでも私はまた不死を露呈させた。

救いだっただのはその村人は私を痛めつけようとしなかったことだ。近くの洞に木の檻を建て、そこに私を入れて鍵を掛けられた。入る際に師の刀を取り上げられようとした。私は無我夢中になりながらその村人たちの手から逃げて、自ら檻に入ることを選択した。

一日ごとに脱走しないか見張る気配がした。しかし、それが段々三日、七日と間が空いていった。出る隙はいつでもあつた、師の刀を振るえば木の檻だつて切れた。それでも私は逃げなかった。

逃げてでも逃げなくても、私の傍に師がいない。そんな生を生きることが辛く感じた。

長く、長く、自らの記憶を反芻した。あの悪夢から救い出してくれた師を思い、何度も何度も私は反芻した。

その後は酷く苦しい物だった。師は傍におられない、師が亡くなられた。傍で見つめるあの瞳はもういない。

ことり。私の呼吸しか響かぬ洞に音が響いた。それは檻の鍵が腐り落ちた音だった。

記憶の反芻は、師への想いと、苦しみを与える人間への憎しみへと変わり、私を分裂させた。

ある私が外に出て、殺戮の限りを尽くした。且て、師が行っていたように村を焼き、人を殺した。身分関係無く、人の姿が見えるのなら師の刀で斬った。私がされた様に、焼いた、斧で切った、目玉を抉った、頭を潰した。

私は捕まった。そして三羽鴉の仮面を与えられ、時の権力者の元でこの刃を振るう事となった。

天照院奈落、その組織の頭領として幾つもの私が過ごし、死んできた。

何度も死を偽装し、頭領となつただろうか。その中でも手に握る刀と、根深く刻まれた記憶だけは変わらず、私に幻想を抱かせた。

弱い私は現実を見ようとせず、その願いを抱いた。今まで死んできた私にも、今の私にも……全ての私の根底に共通する願い。

師はまだ生きている。

そんな筈は無いというのに。眼前で空を舞う首と流れる黒髪を目に焼き付けておきながら……愚かにも私はあの姿を、時代が幾つも変わろうと探していた。

そんな折だった。

「……師がおられた」

本日の仕事途中。醜い狸の謀反を企てた者らも最早暗闇の中、事切れた死体と誰もいなくなった屋敷の中にて零れた。

そうしてふと過ぎった。先刻、隣を過ぎたあの瞳は誰ぞと。あの目、あの緑色の目を。私の中で、その目をするのはただ一人だけだった。

「師が、おられた」

あの日々の記憶は年月が経つほど鮮明に、色濃く私に刻まれる。

見間違える筈もない、常人には見えぬあの瞳の輝きを。奥深くに潜む暗き深淵を。

「師がおられた」

首元に不愉快な傷跡を残しながらも、記憶の中と寸分違わぬ姿でおられた。目の色彩も隈の濃さも変わらず。

その身に纏う血の匂いだけは依然として濃く、それでも背丈すらも変わらずに！

変わらず、変わらず、変わらず変わらず変わらず、変わらず変わらず変わらず変わらず変わらず！

第一次攘夷戦争編

攘夷戦争勃発〜隴遭遇まで part5

こんばんは皆さん。初めましての方は初めまして。そろそろ原作キャラがたくさん登場してくるpart5、始まります。

(やっつと) 天人が地球に進撃してきます。

その日侍は思い出さないし普通に知らなかった……この地球に天人の狙うエネルギー資源が満ちていたことを…。

紅蓮の弓矢もとい勇敢なる攘夷志士たちで天人たちを皆殺しにしていけます。準備は良いか？

そろそろ松陽先生とか隴くんとかの動向も日付に注意しながらやっていきたいですな。彼らが天照院奈落を抜けるのが5月です。しかし、6月までは戦場にへばりついてひたすら経験点稼ぎです。

おっ、もう第一次攘夷戦争やってる？じゃ、入れさせてもらおうぜ〜
(経験点稼ぎ)

あ、そうだ(痴呆) その前にそこらへんの店で顔が隠れるタイプの笠を買きましょう。この深編笠とか天蓋とかの顔がバツチエ隠れる笠がグッドです。でも普通の笠も買つときましよう、後々必要になるので。

笠の他にも服も買しましょう。ここはいつちよ奮発して、かつちよいい着物と袴を購入しました。それからタートルネックインナーも。

なぜなら坂下畑麻呂イベントに遭遇するとキャラモデルの首に線が入ります。

キャラグラにまで影響してくるから本当にこの野郎…。

空木くんいつも着物一枚(初期装備)だったので初の着替えでは無からうか。ボブ訝。

…ん？何故金が溜まるかって？このゲームは敵を倒せばドクエ方式で金を落とします。多分キャラがカツアゲしてると思うんですが(名推理)

空木くんは戦場で荒稼ぎしてきたので土地くらいはいはい買える

額が溜まってます。服代とかはした金ですよ。

装備は忘れずにしましょう…って完全に不審者ですねクオレ。いや、このインパクトが大事なんです。攘夷戦争に参加すると後々指名手配やら真選組と見廻組節穴警察にターゲットイングされて身動きが取りにくくなるので。ええ！構わないんです！深編笠かつこいいじやないですか！！それにフルフェイスの鎧姿とか滅茶苦茶かつこいいじやないですか！！（竜狩りの鎧だいすき）

そしてこのまま攘夷戦争やっちゃいましょうよ！ということ場でエリアへ移動しと←つ→にゆう〜←！！

おつす！激レアな黒髪時代の西郷さんが出迎えてくれました。彼は後に結成されるかぶき町四天王でも良心的な存在であり、とても頼もしいナイスガイです。仲良くなつときましましょう。

終戦後での就職先に困った時にはかまつ娘倶楽部で働くという選択肢が出るのでね…。犯罪者予備軍の攘夷志士も快く受けてくれる聖母（男）です、良い子の皆は…崇めようね！（洗脳）

軽い挨拶も後にしてそろそろ天人襲撃のお時間です。心なしか今装備している村雨くんも震えているぜ。

…所で皆さん、前回私は名持ちの武将は経験点が美味いと言いましたよね。これって攘夷戦争時の天人にも言えることとして…：りーダー格の天人は狩るといつもより多く経験点を貰えるんですよね。

ひゃつはー！！お前たちの経験点を寄越せえええ！！（大量虐殺）
やつちまええ！祖国を守るんだよ祖国をよおおお！！

侍の意地…アツ空木くんは侍じやないな…えーと…。

地球産変異体の底力を見せつけるんだよオラオラオラオラオラオラアアアア！！

「中々良いヤリっぶりじやないのさあ！！」

『無言でピース』『無言でサムズダウン』

ピースの方にしときましようか。にしても選択肢が楽しんでますねこやつ。この後予定が色々詰まってるから是非とも楽しんでくれ
（吐血）

第一波が終わったようです。この第一次攘夷戦争、収束する月まで

いられるレイドボス戦的なシステムでして：正にボーナスステージです。言うなれば常時PSO2のアナウンス流れてる感じです。結構長く続くので入れるなら入っておきましょう。

しかし、第一次攘夷戦争は出てくる天人がクソ強いです。ステータスに自信が無いならやめて、第二次攘夷戦争とかいう攘夷四天王のイベント起きまくりの戦場の方が難易度は優しいめです。それにJOY4の活躍が傍で見れますし好感度とかも上がりますし、死にかけそうになったら助けてくれる人間の鑑の団体御一行です。お辞儀をするのだ、プレイヤーよ…。

ともかく、第一次攘夷戦争は鎌倉時代や戦国時代とか霞んで見える位地獄ゾ。空木くんのクソザコ体力なんて良くて二撃、悪くて一撃でアウトです。でも体力は上げません。

そう、当たらなければどうということはない。

体力よりも筋力、スタミナ、器用さなど攻撃に補正が掛かるステータスを上げるスタンスです私は（隙自語）

なので被弾に気を付けながら攻撃を叩きこんでいきましょうね。

あ、先輩、隙ツス！危なかったですねえ。

はえ〜茶吉尼族すっごい大きい…スポーツとかやってらっしゃるんですか？え？趣味はサーフィンですか？じゃあ氏ね！

辰羅族じゃーん。こんなとこにいて大丈夫？すぐやられたりしない？じゃあ死のうか…。物量？全部消せば関係ねーんだよ！バターみたいに柔らけーなお前たちの体力！経験点多いし無限リスポーンみたいなことしてくるから大好き!!ほらもつと来てコンボ数稼がせな!!!

うははははは!!リーダー天人が多いぜ！これも幸運99のお陰やな！ありがとう！そしてありがとう!!

つてうおおい!!!体力バー塵やないの!?!被弾しとるやないか!?!

そつか無痛覚だったコイツ！痛みに気付け馬鹿野郎！

というか、今日の前にいるのって…：猩覚だ!?!お前いたのか…：(困惑)

ぐぬぬ、猩覚の攻撃の巻き添えで被弾したようですね…。隣のお侍殿がミンチになってます。南無南無。

いくら猩覚であつても今ハイ(になつてゐるであろう)空木くんには力業は通用せんぞ!ふははは!!!村雨の切れ味を食らいやがれえ!!!
辰羅族で貯めたコンボ数で高ダメージ入るのクツソ気持ちイイイ!!魔眼無しでコレっすよ?村雨マジパネエ!!!

最後はやっぱりコレ!上から突き刺し!この地球に来たことを悔いろ!!

今の月はまだ5月。もうちよつと経験点稼げますね……あつ、6月になりました。

仕方ありません、一旦切り上げましょう。

空木 変異体 男性

体力：26

霊力：0

知能：48

スタミナ：72

筋力：46

精神力：86

器用さ：73

素早さ：99

幸運：99

変異体特性【不老不死 五感強化 魔眼 日光弱体化 不眠症 蹴

鞠恐怖症 寡黙 無痛覚】

経験点：102

あく生き返るわあく (経験点過多)

こんななんあれですよ、色々とステータスMAXに出来ちゃあくうへ

じゃ、器用さと筋力とスタミナにぶっこみましようね。

空木 変異体 男性

体力：26

霊力：0

知能：48

スタミナ：95

筋力：99

精神力：86

器用さ：99

素早さ：99

幸運：99

変異体特性【不老不死 五感強化 魔眼 日光弱体化 不眠症 蹴

鞠恐怖症 寡黙 無痛覚】

経験点：0

いいゾ〜コレ（恍惚）

あ、そうだ。月が変わると陣営に飛ばされて強制的に戦闘終了されます。なので抜けるなら今の内です。

定時退社はノルマを達成し終えた全ての会社員に認められた権限です（キレ）意気揚々と戦場エリアから抜けて装備を元に戻しましょう。あ、でも笠は以前買った普通タイプの物を付けます。

そうそう、この原作突入前時代になると『鴉の視線を感じる』というテキストが出る。天照院奈落、ひいては天道衆の視線と同等です。とりあえず笠を付けておけば恐怖の奈落エンカウントは少なくなります。おのれ小癩な天人どもめ…（攘夷志士感）

この時代、特に攘夷志士陣営になると妖怪エンカウントならぬ奈落エンカウントが入ります。彼奴等は鴉を監視カメラにしてやっているので、そのための笠という訳です。気を付けましょう、急に虚さんとか臃くんとか来るからさ（7敗）

さーて、二人が旅しているマップにまで行きましょう。素早さ99なら（イベントまでに余裕で追いつくから）安心！素早さが10代じゃなきゃ間に合います。でもこのチャートは平安時代からスピードが求められるので素早さ10代なんてリセットですよりセット。

移動中にこれからやることの説明をしましょう。今年での5月〜6月は例のお二人が奈落を抜け出して旅をしています。そして6月には二人が別れるイベントが発生します。事前に臃くん救済ルートを辿りたいなら5月に合流することをお勧めします。

今回は臃くんとは対面するのが目的です。臃くんもどこぞの虚さん

と同じで、この機会を逃したらシャイ（暗殺業）になるので中々見つかりません。

お、イベントが発生する崖エリアに着きました。崖下ではうじゃうじゃ奈落どもがいますね。頭は見つけられましたか？（大ヒント：崖上）

松陽先生との対面はまた今度です。あの人（虚さんと違って）段違いに見つけやすいから後です。そこら辺歩いているNPCに『この辺りで私塾を開いている人物を知らないか』と聞けば確実に見つかります。

おーっと、あの白もさもさ頭は臙くんだ。やっぱ幼少期は最高やな…！

はい、頭領の刀が刺さって奈落の刀もずぶずぶ追加注文してますね。人間の屑がこの野郎…（憤怒）

臙くんが苦無を投げてかーらーのー こんしんの いわなだれ！

ならくは うろたえている！

そんな状況で素早く崖から降りて臙くん救出です。というかちよちよいと臙くん的位置を動かすだけでいいです。

ポイントなのは岩が落ちた跡の土煙で空木くんも臙くんも隠れることです。彼奴には臙くんの犠牲の元で銀さんに会ってもらわねばなりません。

じゃないと第二次攘夷戦争も松陽先生投獄イベントも発生しないので…。許して…。

刀が花に生けられる剣山が如く刺さっている臙くんです。痛ましいですねえ…。

「……………」

このテキストが出たら顔合わせは成功です。ここのイベント、完！
そして去る！

訳が無いです（キレ）

話しかけましょう。おつ、大丈夫か大丈夫か？

「その目……貴方が先生が言っていた……」

『先生?』『誰だ』

『誰だ』でも選んどきましよう。

「是非とも、先生に、会ってあげてください。」

先生は、きつと弟子たちに、手習いを教えてますから…」

隼くんが一番弟子なのに松下村塾の輪に入れてないってマ?世界壊したくなりますよお〜(血涙)

という方は5月にでも合流しましょう。このチャートは6月合流ルートなんで…。

「…僕のごことは放っておいてください」

『はい』『いいえ』

ここは『はい』を押します。『いいえ』を押したい気分ではありませんが、そうすると奈落エンカウト率が爆上がりします。それはちよつとこれから先での重要イベントに行けなくなる可能性が増えるので、血涙を流しながら『はい』です。ええ。

すると彼が奈落の動向を操作したり、後々に色んなことを融通してくれるので助かるんですよ。隼くん、元気にやるんやで…。

「ありがとうございます…」

隼くんを壁際で安置させましょう。それから崖エリアから出てイベントを終了。

さて、区切りが良いので今回の実況は終わりたいと思います。

次回はお待ちかね、松陽先生のとこへ行こうと思います。

ほな、さいなら。

一一一

地球に天人が突如として襲撃をした。幕府は開国を宣言し、宇宙から天人たちが蔓延るようになっていった。

それに不満を募らせた侍たちが攘夷を決起し、第一次攘夷戦争が勃発した。

天人と侍の入り乱れる戦場にも鬼は現れた。天人が襲来するまでは平和に暮らしていたが、天人が蔓延る様になったことで許せないこ

とが鬼の身に起きた。

素行の悪い天人が諸国を旅している鬼にぶつかりこう言った。

「このアマアア！」

鬼には少なからず女顔寄りの顔であることは自覚していた。髪が女性の様に長いこともそれを加味していることも承知であった。

鬼は髪を切ろうとした。しかし、切った髪も体組織の欠損と見なされるのか、身に流れる血潮が髪を再生していた。何度切っても起こる現象だったので鬼は諦めていた。髪を切ることを。

それによつて水道代、シャンプー代が女性の様に多くなろうとも甘んじて受けようと思った。

しかしその天人の発言で鬼の何かが切れた。その天人は即座に消した。

天人の往来が増えてからはそのような出来事が多く起こり、何かを堪えながら旅をしている鬼に天人なる種族との戦争を起こしているという情報が耳に入った。

鬼は戦国時代から暫くは大人しくしようと、人の生き死にから離れようとした。茶屋で団子を頼み、長い時の中でいつの間にか出来ていた景勝地へ訪れてゆっくり昼寝(振り)をするような生活をしていた。自由気ままに散歩、気になった食物を食べるといったお一人様旅行を楽しんでいた。

：穏やかになろうとしていた鬼は天人からの行いを思い出し、その戦争に参加することにした。

今までの経験から戦場で人に姿を見せるのは後々面倒になると思いい、顔を隠す笠と新しく購買した着物と袴を着用し、鬼は戦場へと赴いた。

「誰が女顔じゃアア!!」

「誰も言つとらんだろそんなことオオ!!」

叫びながらその手に握る村雨を天人へ突っ込み、斬りかかり、突っ込まれながらも村雨を振り、容易く天人たちの亡骸を築き上げていった。天人の扱う不可思議な武器や砲撃に出会うも難なく避けては一太刀で命を切り結び、大勢で囲まれても驟雨の如く全てを喰らい尽く

した。

「いい斬りっぷりだねエアンター！」

「そちらこそ、中々良いふんどしの赤具合ではないか」

「おいおい、話してる場合かテメエら」

「随分と余裕なこつて」

時には見知らぬ奴らと背を合わせて天人たちを斬り。

「中々やるじゃねエのお前エ。あの一撃の余波でまだ生きてるなんてな」

「猿は帰って湯にでも入っている」

時には死にかけつつも撃破していった。

白ふんの西郷、大俠客次郎長と共に恐れられたその名を——村雨。

鬼の振るう刀の名と攘夷戦争への参加と退場が突然過ぎたことから名付けられた名である。

一一一

先生を、まだ見ぬ弟子たちを守りたいと思った。

今のままでは奈落の追手から逃げられない、そう考えた私の取った行動は間違っていないかつたと今でも思う。

私は先生の刀を自ら腹に刺して追手に私を発見させた。痛みを耐えながらも嘘を吐いたが、私の嘘は簡単に見破られるものだった。

体に、仕込み刀が突き刺さる。通常であれば気絶していたが、私に分け与えられた先生の血が再生しようとしていた。

先生が眠る前、足止めする為の罨だと教えてくれたその場所へ苦無を投げた。

瞬く間に罨が作動し、私に刃を突き刺したまま、追手たちは硬直していた。

潰されていく追手と共に私も潰れる覚悟をしていた。この身が終わろうとも、先生の作る学び舎を支えたかった。

目を閉じる前に、黒い影が動くのが見えた。

…それは一瞬にして私に刺さる刀を折り、岩に潰される私をその場

から引きずり出した。

目下で追手たちが潰れていく様が見え、遠くへと走っていくあの人の姿が見えた。

これで良いのだと、そう思った。

「無事なのか…？」

「その目…：貴方が先生が言っていた…：」

話しかけられた先では笠の影に隠れて緑が見えた。そこだけ切り取られたように光り、視線を離さない。

暫くその目を見つめていれば、その更に、奥の方で見える暗闇が見えた。

——ああ、この人が、きつとあの人が言っていた”師”だ。

旅の道中、あの人が話してくれたことだった。あの人も以前は私の様に拾われて救われたことを。

緑色の目をしていると言っていた。ただの緑ではなく、奥底に闇が見える瞳であると。

黒く長い髪をしていると言っていた。闇夜に溶けて見えなくなる程の色であると。

私の背を抱いていた人は正にその特徴をしていた。

「誰だ」

端的で冷たい声だ。それでも伝えなければいけないと使命感に駆られた。

このままでは先生と目の前の人はすれ違うだけだと。

「是非とも、先生に、会ってあげてください。」

先生は、きつと弟子たちに、手習いを教えてますから…」

「…そいつをそんなに俺に会わせたいのか？」

「ええ、会うべき、です。絶対に」

意識が薄れていく前に。目の前の人が興味を失って去る前に。繋ぎ留めなければいけなかった。

「…その先生とやらはお前が傷付いても助けやしないのだろう」

「いいえ、僕が選んだのです。先生を、陽の当たる、場所へと」

「随分献身的なことだ。何故その様な風貌になってまで先生とやらに

「尽くす？」

「恩があるからです。私を、ゴミの様に、死んでいただけだった、私を、救って、くれたのです。」

そして、今の私が、生きていられたのも、先生が、先生になるきっかけを、作ったのは、貴方、なんです。」

会って、あげて、ください……」

「……」

目の前の人は黙っていた。

「…僕のごことは放っておいてください」

「…見ず知らずの子供を連れて行くほど俺は親切ではない」

今思えば支えようとしていたのだろう。伸ばされていた手が一瞬止まり、また動いて私を岩壁へと動かした。

そのまま去っていく背に安堵し、御二方が出会えることを願い、私は目を閉じた。

しかし、先生の血は私を再び動かした。傷の癒えた私は再び奈落へ入ることにした。

先生が幸せに暮らせる様、確実に師と出会える様に…奈落の頭領となり、先代頭領への追手を散らした。

…それでも、身の底に溜まっていた黒い感情が、先生の幸せを壊すまでそう遠くはなかった。

朧遭遇〜松陽先生遭遇まで Part 6

おはようございます皆さん。初めましての方は初めまして。やつと虚もとい松陽先生と遭遇する Part 6、始まります。

前回は幼気な朧くんの献身を見て終了でしたね。はい。何が何でも生存ルートを辿らせませよええ。

今の月は7月ですね。ちよつと10月くらいまでにならないと松陽先生が腰を落ち着けて塾を開いてくれないのでその間は天人でも狩っておきましょう。おら、経験点寄せ。

あ、そうです。今の間にコメント返信しますね。同じような内容はまとめてあります。

Q1. 体力そのまま上げずにプレイして

何を言っているんだお前は…(頭抱え)縛りプレイとか日光弱体化の時点で既に縛りプレイですよ。確かに精神力があると瀕死攻撃食らっても何度も食いしぼりみたいなのは出来ませんが…。

Q2. 刀以外の武器使わんの？

あ…。ま、まあね、前回は村雨の凄さをシチョー||シャ||サンたちに見せる為だったんです。今度から弓とか火縄銃とか槍とか色々使わせていただきますよ。戦国時代やら攘夷戦争やらでアイテムボックスに武器がたくさんありますからね。

そうですね…今度参加するときには戈とか使ってみましようか。長柄武器は刀の時とモーシヨンが違いますからいつもと違った戦闘シーンになるでしょう。ええ！

Q3. (松陽先生の)切り分けた後の体ってアイテムボックスに入るの？

入ります。滅茶苦茶にボックス内の容量を使いますが入ります。

お、月も10月。そろそろ手を止めて経験点がどれだけ稼げたでしょうか…。

空木 変異体 男性

体力：26

霊力：0

知能：48
スタミナ：95
筋力：99
精神力：86
器用さ：99
素早さ：99
幸運：99
変異体特性【不老不死 五感強化 魔眼 日光弱体化 不眠症 蹴鞠恐怖症 寡黙 無痛覚】
経験点：67

性格が気長というのもあって良いんじゃないでしょうか。
まずは精神力とスタミナをフルに入れて知能に残りを突っ込みましょうか。

空木 変異体 男性
体力：26
霊力：0
知能：98
スタミナ：99
筋力：99
精神力：99
器用さ：99
素早さ：99
幸運：99
変異体特性【不老不死 五感強化 魔眼 日光弱体化 不眠症 蹴鞠恐怖症 寡黙 無痛覚】
経験点：0

はい、装備を戻して笠を付けて松陽先生が塾を開いてる場所までイクゾー！

来年の4月に寛政の大獄が起きて松陽先生投獄イベントが発生するので…出来るだけ攘夷戦争に参加しつつ必ず一回は松陽先生とコ

はー、中々強い奴を引き当てちゃったみたいですねー。……(ガクブルガクブル)

「我らの力を下等な猿に見せよ!」

あつ、辰羅族っぽいですね。ってことはこの襲撃イベントで出てくるリーダー格天人は華陀ちゃんです。やつほーい!美人のお出まじだ!血の化粧で飾ったりしましょう!

辰羅族は傭兵三大部族の中でもステータスは貧弱ですが、恐るべきはスタミナと体力の多さと数です。削り切ったと思ったら削り切れてないことが多いのでしつかり殺してやりましょう(外道)

カスが、アルタナ狙いの天人なんてこの地球に必要なねーんだよ(豹変)

他に言う事があるとするとするなら、華陀ちゃんが戦っている姿が見られるとしか言い様が無いイベントですね。

ほれ、こうしてこのように調理すれば…。

んんん?何故倒れている…って。

ア。ー!?(死亡判定)

食いしばり食いしばり!死ぬう、このままじゃ死んで時間を有効に使えなくなるウ!!まだ松陽先生イベント起こしてないのにそれは困るウ!!(レバガチャ)

何故に死んだお前ってアー!状態異常の音オ!!

そうです、言い忘れましたが華陀ちゃんもとい辰羅族と戦う時は状態異常にも気を付けましょう。奴らは卑劣なので状態異常を駆使してきます。さつきは猛毒でやられましたね、ちくせう。精神力MAXにしても掛かる時は掛かるんでね…。

ほつ。何とか復活出来ました。

オッハー!!じゃあ今までのちかえしをたっぷりとさせて貰おうじゃないか…ということに削り取ってやんよそのやわらか体力ウー!

ということとで襲撃イベント終了です。お疲れさーした。

「こ、今回は引いてやろう!」

次会う時はかぶき町四天王編ですね。首洗って待ってて(刀用意)

原作の流れのままにして置いたら折角の経験点が牢屋でぽつんと一人残されることになります。それは流石にもつたいない可哀そうなので命を刈り取って上げましょう。

原作のストーリーにある程度介入するとストーリー終了後に経験点ボーナスが貰えるので介入したいニキネキ達はじゃんじゃんやりましょうね。関わったキャラとの好感度が上がる効果もあるので出来るならやるべきです。

さ、再び装備を戻して松下村塾通り過ぎウオツチングに勤しみみましょうか。ウエヒビ。

え？松陽先生イベント？

……。

忘れてませんよ。ええ。平安時代で虚さんと接触ルートを通つてそのイベント起こすと少々厄介なことが起きるとかそんなことありませんとも。ええ。

でも避けてても致し方無いですね。そろそろ接触しましょう…おつ、いいタイミングでしたね。

ちやんとメニュー画面でセーブしてからイベントやりましょう（17敗）ほんの少しの操作ミスで選択肢ミスるとかよくありますからね。

という所で松陽先生イベント入りそうなところで今回は終了です。すみませんねえ…尺が長すぎると低解像度になっちゃうので…。

今回は松陽先生イベント垂れ流しから始まります。

ほな、さいなら。

一一一

「アルタナを探せとな…。まったく元老も無茶なことを言うものじゃ」

宇宙海賊春雨には元老からある命令が出ており、その為に地球へ赴いている。面倒な様子で華陀は髪を白装束の帽子に纏めていた。

アルタナとは大地に巡る惑星のエネルギー。このアルタナを實用

可能なエネルギーに変換できるようになり、天人たちの文明は飛躍した。しかし、それと同時にそれは戦争を引き起こした。

アルタナを巡り数多の星の間で戦争が引き起こされた。戦争が原因か、はたまたアルタナを使用し過ぎたのが原因か多くの星のアルタナは枯渇し、滅んでいった。

その戦争の後、天人たちはアルタナを研究し管理する組織を設立した。

突如として天人が地球を襲撃した背景にはこのエネルギーが関わっている。地球はかつてない程のアルタナを含んでいる星だった。それと同時に、アルタナに見られる奇跡を体現した存在が発見された惑星でもあった。

アルタナはただのエネルギーではない。アルタナには生命体に何らかの変質を与える現象が見られている。体の傷が一瞬にして治った、アルタナの泉に触れたら巨大化した、病が治ったなど奇跡といふべき現象が起こることが分かっている。

その中でも格別に違うと言えるのは不老不死。

アルタナの研究者らが求めたのは地球で見られた不老不死の存在だ。アルタナ保全協会もとい天道衆、それと繋がる春雨にはその現象を体現した存在とアルタナの満ちる地域の搜索の指令が出されていた。

華陀ら春雨第四師団の船がある地域へ着陸した。それは奇しくも不老不死の存在が私塾を開いている場所に近かった。

そして、とある子供に導かれて鬼がその場へ近付いていた場所でもあった。

春雨第四師団が着陸してから少し歩いた先には鬼がいた。多くの人、天人を殺害してきた鬼が戈を携えながらぞろぞろと向かってくる辰羅族に、戈を構えた。

鬼を視認していた白い装束に身を包んだ辰羅族たちも武器を構えて戦闘態勢へと移行した。

「我らの力を下等な猿に見せよ！」

華陀の一声によって目の前に佇む鬼に辰羅族たちが襲い掛かる。鬼は少し息を吐いて、戈の柄を握りしめた。

辰羅族は傭兵三大部族の一つとして数えられるが、同じく数えられている荼吉尼族や夜兎族とは違って人外染みたパワーはない。単純な戦闘力で言えば地球にいる侍と変わりはない。

しかし、辰羅族が誇るものは卑劣さと残虐さ。そして、数の暴力。一騎当千を誇る武士であろうと数の暴力には抗えず、気力を消耗し、いずれは倒される。そのことを何よりも辰羅族は知っていた。

だから、目の前の鬼さえも退治出来ようと思っていた。腕に覚えがあるのか、一人で我らと対峙しようとしている哀れな猿を殺してやろうと意気込んでいた。

鬼が戈を振るう。それは辰羅族の首を目掛けて、あるいは四肢の一部を目掛けて、あるいは体の中心目掛けて。

軽々しく振るう割に、その戈から齎される力は大きく、鋭い物だった。

一瞬で刈り取られる首。宙を舞う腕や足。成す術も無く辰羅族の多くが刈り取られていった。

辰羅族の身に纏う白装束が同族の血によって赤く染められていく。まるで血の雨を降らせるかの如き所業。

華陀はその存在の名を知っていた。春雨の中でも要注意人物として取り上げられていた地球人、村雨。

その手に持つ獲物は村雨と名の付く刀であった筈だが、それでも華陀は理解してしまった。

目の前にいるのが村雨であることを。そして、今の状況では到底勝てないことを。

理解したから奥の手を使うことにした。

仲間の死体に隠れてあの村雨に毒を打ち込む。たったそれだけのことだが、華陀には勝算があった。

じり、と音を立てず、目立たないように動いていく。その間に同族がやられていくが華陀は関係無しに進む。

そして死体に隠れ、十分に毒を塗った暗器が届く距離までやってき

た。

華陀が懐取り出したそれは細い針だ。しかし、先端には華陀が特別に調合した毒が塗られてあった。

針はまっすぐ、戈の攻撃の合間を潜り抜けて鬼へと刺さった。途端に鬼の態勢がガクンと崩れ、目や口、鼻などのありとあらゆる穴から血が噴き出た。

「ふふふ…どうじゃ？我の特製の毒は。猿に食べさせるのも勿体ない位じゃが…美味しいじゃろう？」

己らが勝利を確信した華陀が死体の山から立ち上がり、仲間と共に鬼へ襲い掛かった。

華陀の毒はあの荼吉尼族でさえも落とす威力を持っていた。本来ならば使う予定も、その毒の調合や素材の調達が難しく予備も無い一点物だったが、あの夜兎族率いる春雨第七師団がこぞって「戦ってみたい」と言わしめる村雨には充分だと感じていた。

「死ねエー！」

辰羅族たちの刃が鬼の急所へと届く。その時。

カキン

甲高い音が鳴り、鬼へと向けられた刃がくるくると空を飛んだ。倒れた時に手放された筈の戈が再び辰羅族へと襲い掛かった。

先程まで降り止んでいた筈の、血の雨がまた降り始めた。

鬼の目がぎよろりと動き華陀を捉えた。崩れた態勢から立ち直り、矛をそのまま、華陀の毒を投げた左腕へと薙いだ。スパリと肉と骨を瞬時に断ち切られ、プシヤアと血が噴き出た。

そのことを理解した華陀が及び腰になりながら逃げる。それを援護する為、残り少ない辰羅族が援護の為に鬼へと刃を向けた。呆気なくそれらは散っていった。

「こ、今回は引いてやろうー！」

無事に船へと辿り着いた華陀が地球から離れていく。

それを見送った鬼が、どきりと地に座り込んだ。少しばかり華陀の毒が残っているからだ。

(随分と強烈な毒を扱う天人だった)

鬼は顔から溢れ出ていた血を拭いながら、先程の一撃で引いてくれたことを幸運に思っていた。

(……何故こんなになつてまで戦っているのだろうか)

ここへ来る前、あの死にかけた子供から伝えられた情報を元に、鬼が先生とやらを見たからだろうか。

鬼の脳裏に茅色の髪を揺らしながら子供たちに何かを教えている様子の男性の姿が過る。

「会ってあげてください」、その言葉とあの姿にどう結びつくのかが鬼には分からなかった。鬼にはこの方、時代を超えてまで会うような間柄の存在はいない。同族なんて見たことが無い。

確かに茅色の髪はあの童を思い出しはするが、他人の空似だろうと考えていた。生きている筈が無い。もうあの童は天にでも召し抱えられて、この世にはいないものだ。

…ふう、と思考を断ち切る様に鬼が溜息を吐いた。ひとまずは服を着替えようと考えた。

何故かは知らないが、鬼は不思議な空間を扱うことにより多くの物を持つことが出来て、服や刀などの装備を瞬時に変えることが出来る。そうして不思議な空間へ収納した物は服の傷や刀の刃毀れも何もなくなくなったかのようになるのだから、本当に不思議なことだと思っ

ている。

ここに来る前に着ていた着物と、陽と鴉から僅かに感じる視線を覆うための笠を身に着けて塾の開かれている村へと鬼は引き返した。体の毒はもうすっかり抜けていた。

村への通り道で見えるのはあの茅色の人物の開いた私塾だ。子供の笑い声や鍛錬に励む音が絶えない様子が眩しく感じている。

庭木の松が立派に生えて彩るその門の入り口に人影が立っていた。

「この松下村塾に何か御用ですか」

その顔はどこか泣きそうな童の顔に似ていると、鬼は感じた。

r t 7

こんにちは皆さん。初めましての方は初めまして。こっから松陽先生イベント垂れ流しです。

ここで求められるのは松陽先生のメンタルケアと虚さんの存在を認識することです。

それから必須条件としては平安時代に虚くんの好感度を蓄まで上げておくこと。じゃないとこのイベント即死系になるのであつという間に攘夷戦争が終わってしまいマース。

ほらほらいっくどー!!

「この松下村塾に何か御用ですか」

『はい』『いいえ』『名前は?』

じゃ、まずは名前と年齢を教えてくださいるかな? (500歳越え)

(我々は)知っているけど敢えて『名前は?』を押しましよう。すると互いが名乗って変異体発覚トークが続きます。この選択肢自体、好感度上げてないと出ないものなのでフラグとしては分かりやすいと思います。

このイベントで何よりも良いのは松陽先生の疲れ切った顔悩まし気な表情が見えることですよね。いつも笑顔な先生が実は…ってシチュエーション僕は大好き!

ま、そんな生易しい物じゃないんですけど (震え)

はい、出てきましたね。虚さんが。目が一瞬で吊り上がるの怖い…怖くない?!

ここで好感度を中途半端に上げておくと死亡します (18敗) だからセーブが大事だったんですね (27敗)

今回は好感MAX状態だったので友好的な態度で殺して欲しいとお願いされましたね。ここで『はい』を選んでしまうと虚さんが意気揚々と松陽先生という人格を殺害しに行ってしまう、エンディング5への道が閉ざされてしまいます。『いいえ』を押すと途端にホラー描

写&死亡判定が入り時間を有効的に使えなくなるので私はその中間の『沈黙する』を押しします。

はい。松陽先生が人格の主導権を取り戻して虚さんを引っ込めましたね。はー！世にも珍しい疲れ切った松陽先生のスチルが見られるのこのルート位ですわ！

このゲーム、スチルの回収率とかは無いんですがキャラごとに意味深な空白が開けられているので埋めてみるのも楽しいと思います。松陽先生と虚さんは激ムズ案件&最近アップデートされて未だに未発掘の物が多いんですけど。

さっきの『いいえ』を押すと新しくスチルが埋められますしね…。これ以降は松陽先生のメンタルをケアする選択肢を選びましょう。

私は松陽先生肯定botなので彼に人判定を与える選択肢しか押しません(誓い)

諦めんなよ！諦めんなよ、お前!!どうしてそこでやめるんだ、そこで!!もう少し頑張ってみろよ！ダメダメダメ！諦めたら！周りのことと思えよ、応援してる人たちのことと思ってみろって！あともうちょっとのところなんだから！（修造構文）

「…そうですね。もう少しだけ頑張ってみますよ」
持ち直したみたいですね。いいゾコレ。

というか、今ここで虚さんが主人格権握ってしまったらチャートががががが。

イベントも終了したことで、そろそろ帰ろうかしら。

「また来てくださいいね」

投獄時にまた会いましょう。

前回のパートで少々厄介なことが起きると言いましたが、あのイベント以降松陽先生と会話すると一定の確率で虚さんが出現してきます。話しかけ続けると虚さんが出る割合が大きくなり…という風に複雑なので気を付けましょう。

松陽先生イベントを熟した後はイベントが起きる月までひたすらにJOYがJOYするだけです。

来年2月にはボーナラスステージこと第一次攘夷戦争も一旦終了し

てしまいます。そして、4月には寛政の大獄で松陽先生が投獄され、5月には松下村塾の方々が決起してJOYしてくれられるようになるので戦場エリアが開かれるようになります。やったぜ。

ま、10月にはその第二次攘夷戦争も収束します。というのも、松陽先生が処刑されるのが10月でのイベントなんですよね。

ということですね。2月までJOY、5月から9月までJOYして10月には松陽先生真つ二つという工程です。

あれ？攘夷戦争って大体20年くらいはやってたよね？っていう勘の良い視聴者方には「このゲームの年月結構曖昧で銀ちゃん万事屋経営してからだ結構イベント詰め詰めになるよ」という呪文を授けます。唱えようね！

さあ変装して君も攘夷志士に、なろう！

特に何も無いのでカット

月も2月となり、ボーナステージが終了しました。いやー、何回か死んだ時は焦りましたね。おかげでコントローラーが手汗でベシヨベシヨですよ。もちろん拭き取りましたよ。

空木 変異体 男性

体力：26

霊力：0

知能：98

スタミナ：99

筋力：99

精神力：99

器用さ：99

素早さ：99

幸運：99

変異体特性【不老不死 五感強化 魔眼 日光弱体化 不眠症 蹴

鞠恐怖症 寡黙 無痛覚】

経験点：82

うーん、やつぱり気長&平安時代生まれの変異体だとバグの様に溜

まりますね。うまうま。

もう知能と体力しかあげられるものが無いですね…。というか念願のステータスマAXになるじゃないですか！

キヤツホイイ!!

空木 変異体 男性

体力：99

霊力：0

知能：99

スタミナ：99

筋力：99

精神力：99

器用さ：99

素早さ：99

幸運：99

変異体特性【不老不死 五感強化 魔眼 日光弱体化 不眠症 蹴

鞠恐怖症 寡黙 無痛覚】

経験点：8

よっしゃ。今までクソザコだった体力バーが一気に伸びましたね。うほほい。

にしてもこの月は暇ですね。松陽先生にも頑張ってもらうためにも松下村塾には近寄りたくは無いですし、かと言ってこの期間目ぼしいイベントがあるかというとなんにも無いんですよ。

マジの虚無期間なのでここいらで原作に入った時の流れでも話しておきましょうか。空木くんは適当にどっかの町の茶屋にでも入っててください。

原作開始となる月が来年4月ですね。その頃になると本格的にイベントでんこ盛りです。最早原作キャラ三昧と言っても過言ではありません。もうpart1の時の様に銀魂タグ詐欺動画なんて不名誉なタグも付けられることは無いでしょう。

万事屋に入るもよし、依頼をするもよし、真選組に入るもよし、攘夷党に入るもよし、鬼兵隊に入るもよし。

もう色々な派閥に入り、(通常であれば)原作通りのストーリーやifストーリーを楽しめます(さらば真選組編で終わる筈の佐々木異三郎を生存させたりとか)

これからの方針としてはイベントの発生具合の監視の為にかぶき町に住む予定です。不動産屋に行けば色んな場所を一括払いで購入またはローン組んで購入とか出来ます。

ですがね、かぶき町に住むに当たって恐ろしいことが二つあります。

一つは住居の倒壊ですね。よく壊れます。イベント発生||どこぞの緑の匠並に家や町が破壊されます。原作キャラの居住地以外の辺鄙な場所であればそのリスクは少なくなりますが完全ではありません。住居を直すのにも費用が掛かるのでかぶき町に住むのは結構大変です。

そして何より二つ目。無職、何もバイトや仕事をしていなければ掛かるバッドステータス、通称マダオ。このマダオは状態異常扱いなんですが、精神力関係なく無職であれば誰でも掛かることと、常に会話キャラからはマダオと呼ばれる(長谷川さんがいる場合はマダオ2、マダオmark.2など)ようになり、更に恐ろしいことにキャラグラフィックにグラサンが自動で掛かることです。

何という事でしょう。かぶき町はとんでもなく無職がカツコよく、とんでもなく当たりが厳しい町です。なので、それを避ける為にかまっ娘倶楽部の経営主、西郷さんと必ず一回は戦場で話さなければならなかったんですね。

そーいやアプデで色々職に就けるようになったんでしたっけ。

…攻略wiki参照中…

バイト先やらも増えてマダオ回避&金稼ぎの場が増えてましたね。有難い。自営業も可能になって、自分で素材を集めて加工して出店みたいな生産系システムも充実してました。やはり神アプデであったか…。

茶屋に通うのも飽きたのでそろそろ放浪したいと思います。多分次はカットされて5月になるとおもうんですがそれは(名案)

それではここで終わりたいと思います。
ほな、さいなら。

— —

それは偶然のことだった。塾の傍の道であの人を、師を見つけられたことは。

たまらず寄って、互いに名乗り合った。師は空木という名前だった。私と似たような存在であることも知れた。

積年の願いが叶った奇跡の様な瞬間だった。折角逢えたのだから、私の私室へ迎えて茶を入れて互いに話をした。…話すこと、師と会話していることの喜びを噛み締めていた。

その時だった。

私が現れて、師に言った。「私をその眼差しで殺して欲しい」と。

穏やかだった空間は崩れ、師には私の経緯を話した。赤裸々に、己がやってきたことを話した。

…私の身の内で起きていることも全て。

師はただ茶を飲みながら私の話を静かに聞いていた。

「私は、人に見えるでしょうか。人に成れるでしょうか…」

そう呟いて私の話は終わった。師は静かに湯飲みを置いて私を見た。あの緑の目が私を何の色も浮かばない瞳で見つめていた。それに少ししたじろぎながらも、私は見つめ返した。

「お前は元々人だろう」

「…え」

あつけらかんとした様子で師は言った。

「傷の治りが早い？寿命が長い？そんなもの人より蹴鞠が上手いか和歌が上手いか程度の問題だ。」

何もそう重く受け止めることではない。お前は陽の下で大手を振って自分を人だと主張しろ」

「ですが」

「本当の化生はそのようなことで鬱鬱と考えず日陰に生きるものだ。」

人の死を憂い、その手で何が出来るのかを考える。必死に生を生きながら道に迷い、間違えても我武者羅に生きていると主張するのが人だ。

…なんて言う奴もいるが、人は結構曖昧な線引きで自由なものだと俺は思う。そういつた奴もいるし、そうじゃない奴もいる。お前もその曖昧な線引きの中に入っている人だ」

「私は人、ですか」

その言葉に救われたような心地がした。それは内容か、それとも師から出た言葉であるのかは分からない。

それでも内から囁く破滅の声からするりと救われた。引きずり込もうとする手から、無様にも伸ばした手を取り引き上げてくれた心地がした。ああ、やはり。

「やはり、師は凄いですね」

「俺が凄いのは今に始まったことではない」

「ええ、そうでしたね」

何でもない様に私を連れて、私に知識を与えて、私を人と言う貴方はそうでしたね。

今も昔も変わらず凄いお人だ。

「お前もその内側にいるお前も人だ。伝えておけ」

——私だけでなくても、私をも気にかけるのですから。

「…そうですね。もう少しだけ頑張ってみますよ」

「ならばよろしい」

「おいお前までついて来なくていいだろ」

「俺が先生を呼んだっていいだろ」

「二人ともやめないか」

あの子達の声が聞こえてきた。師はそのことに気付いてか、「そろそろ帰る」と言い始めた。

「また逢えますか?」

「…多分な」

「そこは自信を持って逢う約束をして欲しいのですが」

「じゃあ、逢える。お前が抗うことを止めなかったらまた逢えるさ」

その言葉を胸に、奈落に見つかって、塾が燃やされて、牢獄に入れられ処刑を待つ日々でも抗い続けた。

骸と呼ばれている子供に教えながらも、抗った。

私は私の内側で起きている状況をよく知っている。

一人の私によって数多の私達が殺害されていることなんてよく知っている。

最初に分かれた私が、動き出して私を殺そうとしている。ずっと人に怯えて表に出ていなかった私が今になって活発的に動き始めたのだ。

私の長く焦がれた願いは歪曲し、その手で死にたいという願いへと変わってしまった。

終わりになき苦しみを、生をその手で終わらせて欲しいと。

私を殺し尽くして欲しいと、刀を振る己が言っているのがよく聞こえてきた。

それは四六時中響いた。子供たちに授業をしている時であっても、あの子達が笑い合っている時でもずっとだ。

それに疲れ果てて倒れそうになった時にあの人が現れて手を差し伸べた。

私はその手を取って師と約束したのだから、最後まで抗うべきだ。

：私は人に焦がれました。何人もの私たちが殺し、私たちが殺した人間に。

私は人に成ろうとしました。とある人に拾われて、とある子供に導かれ、とある子供を拾って、とある子供たちと出会えて私は吉田松陽になりました。

そう唱えた。後ろから迫る足音に怯える必要もない。

「最早残りはお前一人だけだ」

背後を振り向いた。喪服の様に黒い着物に身を包む私が刀を持っていた。その後ろには数多の私の亡骸があった。縛られていた筈の腕は今や解かれて、私の隣には一本の刀がある。

それを持って私は私と対峙する。

「私をそう簡単に殺せるものとは考えないでくださいね」

「抜かせ。私たちはあの人の手で終わるべきなのだ。無駄な抗いは止せ」

「私は生きたいですよ。あの子達を見守って、師の隣にいたいと。」

後者に関しては何よりも…私が一番、そう思っていたのでは無いのですか?」

五百年も握ってきた物だが、今までの物とは明確に違うものだった。

師が種を撒き、あの子たちが育んできた物。私が吉田松陽^ととなった証だ。

今度は殺す為ではなく私である為に振るう刀であり、私に気付かせる為の刀。

鞘から刀身をゆっくりと引き抜き、私に向けた。私が目の前で刀を構える私を睨みつけた。

「…師が私と共にあることを望む筈が無いだろう」

「何度も言ってますね、ソレ。飽きないんですか?」

「事実だ。…事実なのだ」

自分のことながら、よくも歪んでしまった私だと思う。苦しくて、人が恐ろしくて今まで隠れていた最初の私。

師を目前にしても変わらずに破滅を願った私。素直に師の言葉も受け取れなくなってしまった私。

「私はまだまだ私に抗いますよ。まだ生きていたいので」

まだ、あの人に伝えたい言葉があるので。

幕間 画狂人の弟子

「ひいひい〜つく〜!」

「爺さん、アンタ飲み過ぎだあ。さっさと帰んな」

「やじややじや…ええやつ見つかるまではここにいたるわ」

「はあ……こうなるといつまでも居座るから困るわあ」

町の茶屋で一人の老人が酒を飲みながら通り過ぎる人をじろじろと見ていた。その様子に茶屋で働く娘が溜息を吐いて経営主の女将に「いつもの爺さんが居座ることになったわ」と報告しに行った。

その間も老人は酒のせいか重くなった脛を必死に開けながら人を見ていた。むにやむにやと口を動かし、伸ばされっぱなしの髭を触りながら「今日もええやつはおらんな」と老人は心内で呟いた。

朝っぱらから家を出て人通りの多い場所の茶屋に酒を飲みながら居座るこの老人はここいらでは有名だった。

浪人崩れ、主婦、子供とかが歩く中、一人の男がその茶屋の前を通り過ぎた。

目深に笠を着けたひよろりとした男だった。しかし無造作に伸びた黒髪が特徴的であった。

(おっおったあああ〜!!ええやつおるじゃん!)

老人はその男を見て電撃が走った。そうして茶屋から飛び出して男の前に躍り出た。

先程の眠たげな様子から一転して目を血走らせる様子を見せる老人に周囲は引いていた。躍り出てこられた男：空木と名乗る男も若干引きつつ、何事も無かったように老人の隣を通り過ぎようとした。

しかし、老人は素早く隣へ移動し息を荒げながら言った。

「頼む！お主の時間をワシにくれええ!!」

町一番に響く大声であった。

「いやー！ええやつおって良かったわい!」

あの後、何度も老人から離れようとしていた空木であったが、何度も老人がディフェンスをしてくるので老人の言う通り、自分の時間を

割くことにした。

「それで、俺に何の用だ」

「なに、一月ばかりこの老人と過ごすだけの仕事よ」

「はあ…？」

「何を言っている」と不機嫌な様子も隠しもしないで空木が言った。それに片目を瞑りながらチツチツチツと音を立てながら何かを言うとした老人は持ってきていた酒瓶を落とした。

「なんと！ワシの酒ちゃんが！一体何をしたこの人でなし！」

「ただ単にお前のせいでは…？」

「まいいや」

「いいのか…」

老人がよぼよぼと歩くスピードに合わせて空木は隣を歩いていた。割られたままの酒瓶を片付けないまま老人は前を歩き、空木も少し後ろをちらりと見て老人に付いていった。

「お主名は？」

「空木」

「ほお。卯の花とな。アレはいい景色じゃったのう…。玉のような白い蕾がパツと花開くのは描いたのう」

「描いただと？」

「ワシ、名の知れた有名な絵師なんじゃよ？その名も方洲処南斉。…アレ、もしかして聞いたことない？」

その問いに空木は頷くことで返し、またもや老人はショックを受けたような顔をした。

「し、信じられん…！このワシを知らぬと申すか…！…この、將軍の絵姿さえも描いたワシを？」

「知らんな」

「ウツソオ…？マジ？マジで言ってる？ねえねえ？」

「知らん」

「ヒョオアアアア!!!」

奇声を上げながら南斉が倒れたが、瞬時に立ち上がって何も無かったように歩き始めた。

「ま、まあ良いじゃろ。こほん。兎に角お主に頼みたいのは絵の画題になつて欲しいんじや」

「それで何故俺が一月もお前と過ごさねばならない」

「ワシが描くのは画題の一瞬、輝ける一時を描く。それには時間が必要なんじやよ」

「はあ…」

「お主、引き受けたからには戻れると思うなよ？おっと、着いた着いた。ここがワシの家」

ワシの家と指差された場所は素朴な木造の一軒家だった。南斉が先に入り、空木が入る。草履を脱いで上がった先は、正に絵師といった様子の家だった。家の柱や壁にはくしゃくしゃになった和紙に柳眉の美人やら道端の草や桜などが描かれては貼られていた。今にもひらりと落ちてきそうなほど何重にも重ねられて貼られている。

その和紙に描かれている絵の一つ一つの線が流麗で、明細に被写体を描いていることが分かる。空木の鑑識眼は素人に近い物だが、素人でも分かる凄さという物があった。

「これは…凄いな」

「そうじゃろ？もつと褒めていいぞい」

「やっぱり凄くない」

「前言撤回!?!」

「ここに座つとれ」と言われて、空木は囲炉裏の前に敷かれてある藁の敷物に座った。その向かいによつこらせと声を出しながら南斉が座った。その間に空木は身に着けていた笠を外し、膝の上へと置いた。

「ほお〜こりやまた描き甲斐のある男じゃな。…男だよね？」

「男だ」

少し視線が鋭くなった空木だが、南斉の答えに満足した様子だった。南斉は「ふむ？…ふむふむ…？」と声を出しながらちよろちよろと空木の周りを歩き始めた。

「もうちよつと隈はどうにかならんかの？」

「何年もの付き合いだ」

「ほー…なるほど……」

何処か納得した様子で南斉が空木の向かい側の敷物に座った。髭を弄りながら南斉が言った。

「何日も寝てない様子じゃなあ…。お主ちゃんと寝ておるか？」
「…」

空木は何も答えなかった。空木は何日どころか何世紀も寝ていない、いや寝れていない。軽く目を閉じて寝る振りをするも一向に眠気は訪れず、そうしている間の時間がもつたいたいと考えて動き始めてしまう生活がここ何世紀も渡って続いている。

「ワシと過ごす時は必ず三食食べ、しっかりと寝て健康に生活することじゃな。

あそうそう、朝餉も昼餉も夕餉もお主が用意してね。最初はワシと一緒に作るけど」

「は？」

「氷室の中にある食材は自由に使っていていいから。あー昼餉が楽しみじゃわ〜」

そう言っただけで囲炉裏の部屋の隣へ移動していく南斉に「待て」と言う暇も無く、空木は昼餉を南斉と共に作る羽目になった。

空木はこれまで調理といったことをしたことが無かった。腹が空けば水か道端に生える野草を食って腹を満たしていた。しかしそれでも改善された方ではあった。

彼が子供を拾った時には腹が減っても何も食わずに、襲った村にあった日持ちのする食料を子供に食べさせていた。子供が食事をしている時に何も食べずにぼーっと日を見上げていた空木は、その子供に食料を半分分けられた。「一緒に食べた方が美味しい」と言われてから空木は腹を満たす行為を行う様になった。

戦国時代になってからは武将の茶会やら宴で振舞われる料理に舌鼓を打ちつつ、水と野草を食べる食生活をしてきた。一時は作ろうとは考えたことはあるが、なあなあになって流れていた。

そういった事情を含みながら、空木と南斉の昼餉作りは散々な様子だった。

空木は何度も南斉からこっ酷く怒られた。

「米を研がずに炊く奴がおるかアアア!!何をしようとしとるんじやワレエエ!!」

「米の炊き方なんぞ知るかア!」

「お前の得意なのは刻むだけか!微塵に刻んでどうするんだお前エ!味噌汁の豆腐が形無しじやろがアアア!!」

「そ、そんなに褒めなくても…」

「褒めとらんわ!?何処に照れる様子があつた!」

両者が息を荒げながら昼餉作りが終わった。食卓には何とか形になった白米と白い粒々になった豆腐が浮かぶ味噌汁が並べられた。

「…お主がここまで作れない奴じやったとは。この方洲処南斉、一生の不覚…!」

「そもそも厨に立つ機会が無いものだ」

「自分の出来ない事を正当化するでないわ馬鹿者」

ベシツと空木は頭を叩かれながら食事は始まり、何事も無く終わった。南斉は夕餉もこんなことが続くのかとうんざりしたが、南斉の昼餉での叱責が効いたのか昼餉の時の間違いは怒らず、それなりのペースで夕餉作りは行われた。

「何じゃ、意外と出来るじやないかお主」

「当然だ。一度知ればやることは容易い」

「米を研がずに炊こうとした奴の言葉とは思えんな…おっと」

南斉は即座に睨みつけられた空木からそーっと視線を離しつつ、二人の食事は終わった。

食後ということもあつて、穏やかな空気が囲炉裏の部屋では流れていた。

「…で、いつ絵を描くつもりだ」

「さつき一枚描いてみたけど見る?」

そう言つて南斉が隣の部屋へ移動するので、空木もそれに伴った。その部屋は南斉の私室だった。細やかな筆や大きな筆、多彩な顔料などが溶かれた小皿にたくさん和紙に描かれた絵が散らばっていた。

踏まない様にして移動するのも難しい散らばり具合だが、南斉は

ひよひよいと移動してとある一枚の紙を取ってきた。

「ほれ、試し描きじゃがな」

「…」

差し出された顔に描いてあったのは男の顔だった。どこか物憂げな様子で目元に隈を作った男が髪を前に持ち出して弄っている様子だ。

「俺はこんな動作はしてないが」

「雰囲気を掴むもんじゃよ。これからもっと描いていくからのう」

にっと歯を剥き出して南斉が笑った。

こうして空木と南斉の生活が始まった。

一一

南斉との生活が続いて一週間後。空木は厨に置かれてある料理本を見ながら一人でも料理が出来る様になっていた。南斉からも空木の出す料理は味良し、見た目良しの判定が出て得意気になっていた。南斉サポートが無くなってからの空木の料理は散々な味でかろうじて食べられるといった物であったことから格段に進化していると言っても過言ではない。

空木の料理の出来に満足した南斉は日がな一日私室に籠って絵を描いていた。そして、「はて、自分はどうか過ごしたら良いのやら」と考えた空木は勝手に部屋を掃除することにした。

最初は壁一面に貼られた試し描きの和紙に気を取られていたが、南斉の家は汚部屋と言わんばかりの様子だった。ゴミや埃なんかは隅に溜まり、そこら中に蜘蛛は巣を張っており、障子の木枠にも高く埃が積もっていた。南斉の私室をすぐ出た場所にある縁側なんて謎の食べかすだらけで歩くのも嫌になる程であった。

南斉に一言「部屋を掃除するぞ」と言い、家の脇に建てられた物置から掃除道具を取り出し、空木は汚部屋退治に赴いた。

長い戦いだったと空木は囲炉裏の部屋でぶつ倒れた。空木には料

理スキルも掃除スキルも無かった。しかしそれらはやっていないから出来ないだけであり、何度もやって繰り返せば人並みには出来る様になるものだった。

何回も桶に貯めた水を零しては南斉に怒鳴られ、人一倍には効く嗅覚が仇となつて埃を掃除する度、目や鼻のむず痒さと咳が止まらなくなつたりもした。

(戦場では助かつていた五感が日常生活では仇になるとは…)と、空木は眩きながら見事に汚部屋を清掃した。

「ほう、ワシの汚部屋を綺麗にしおつたか」

「おのれ南斉。今まであんな汚さで生活していたのか？ほんに嘆かわしい…」

「ワシは掃除しろなんて言つてはおらんがな。チエツ、もうちつとだけ蜘蛛子ちゃんとのスイートハウス生活を楽しみたかつたにの〜」

爛々と目を輝かせながら汚部屋の方が良かったとのたまう南斉に空木は血管が千切れていくのを感じた。だが、勝手に掃除したのは自分の方だという意見には納得できてしまったので、とりあえずは堪えていた。

「あつそうじゃ。氷室にあつた食材も少なくなつてきたから買い物しなくてくれんか？」

「別にそれは、行こうと思つていたから良いが…」

氷室に置かれた食材は空木が来た時から少なくなつていた。南斉がごそごそと股間部から紙入を取り出してざらざらと音を立てながら銭を寝そべつていいる空木に手渡した。

「今どこから紙入を出し入れしおつた」

「んもう、こ・こ・こ・じゃ・よ」

ピンと股間部を強調する南斉に呆れながらも空木は立ち上がりつて手渡された銭と手を水桶に貯めた水で一洗いしてから買い出しへ出かけた。

その背を見つめながら、南斉はじつと玄関を見つめていた。

「今なら菜花ににんじん、じゃがいもが安いよー安いよー！」

「魚入ってまーす入ってますよー新鮮だよー」

空木は今回が二度目の買い出しであった。栄えている市場から少し離れた場所にいる方洲処南斉はここでも噂になっており、名前を出せば金の値引きが容易になることを空木は知っていた。

「あら、南斉さんとこの人じゃない。今日は何買ってくるの？」

「何かおすすめのものとかはあるか」

「そうねえ、それだと筍かしら。近所のお爺さんが取ってきてくれたのよー」

空木が顔を見せた店は南斉も行きつけにしていた八百屋だ。ふくよかな女将が人の良い笑いをして藁で編まれた敷物に並べられた立派な筍を指差す。

「確かに御立派な筍だ。しかしこちらの皮にゴリラの様な染み汚れが付いているので値引きしてくれないか」

「あら？そんな汚れ無いわよー」

口調は穏やかだがさすがさまに空木の指した筍を叩き、何も無かった様に筍を勧める女将は強かだった。

空木は初回の買い物の際に「なんでもいいから難癖付けて値引きせえよ」と口酸っぱく言われて実践してみたものの、中々上手くいかずに定価で買う羽目になっていた。

「んもう、南斉さんそこはお得意さまだから値引きなんてしなくても値引かれてますのよ」

「そうだったのか…」

実際、空木が買い取った筍の値段は他の客から買い取る値段よりは安かったことに気が付いた。なるほど、女将と南斉の仲が良いというのは本当らしいと空木は思った。

「はあく。最近だと南斉さんも変なことに巻き込まれてねえ…」

「変なこと？」

「あら、聞いてないのかい。今、南斉さんのところに厄介な攘夷志士が絵の依頼をしてるっていうのさ。」

その名も：村雨！血も涙も無い男で天人をバツバツと斬り、時には人も斬つたりしてゐるっていうあの村雨さ！」

「村雨…」

「いや、目の前で話しているのが一応村雨と呼ばれていた本人だ」と空木は突つ込みたくなつたが、それにしてはきな臭い話だと思ひ、空木は女将に話の続きを促した。

「最近だと茶屋や居酒屋にまで現れて酒樽の中身を飲み干しては金も払わずに出て荒らしていくつていうもんさ。あんたも気を付けた方がいいわよ〜」

「はあ…」

一瞬だけ空木は、自分〓村雨というのがバレたのかと思つたが、女将の話の聞くにそうではない事に気が付いた。

（俺、絶対そんなことしない、ちゃんと金は払うし酒は程々に抑える）と思ひながら空木は買い物を終えた。

家を出る前に取つてきた籠に筍に菜っ葉、春の野菜に本日捌く予定の鮮魚を入れて南斉の家へと足を進めた。

「——じゃー！」

空木の耳が南斉の怒鳴り声を捉えた。こんなに怒鳴るなんて一週間前位振りでは無いかと考へながら少し足を速めた。空木が南斉の家に近い度度怒鳴り声と南斉が怒鳴つてゐる相手の声が聞こえてきた。

「爺い！さっさと俺様の絵を描きやがれ！」

「だから何度言われても描かんと言つたら描かん！お前の様な乱暴者にワシの筆を震わす魅力はないわい!!」

「言つたな爺！この刀が見えねーのか？」

「そ、それは…！」

「そう！妖刀”村雨”！俺こそが村雨そのものだア!!」

ババアーン！と南斉が怒鳴り散らしている男は鼻息を荒げながら刀を見せつけた。それには確かに”村雨”と彫られた刀身が見えた。

しかし、本物の”村雨”は知つてゐる。あの刀は妖刀ではないし、刀身に名を彫られていた訳では無い。あれは刀の付け根から露を発

生させて寒気を感じさせる刀だ。確か前の使用者が「村雨」とその刀を呼んでいたから空木がそう周囲に説明しただけに過ぎない。

それから、(妖刀と呼ばれているのは村正の方では…?)と思いつつ、空木は村雨を名乗る人物の背後を取る。

「くっ！ぜ、絶対に描かんぞ…！お前なんぞよりワシには描きたい物があるんじゃない！」

「いいのかあ？今まで堪えてきたがこの村雨で血を見ることになっちゃっても…」

少し怖気ながらも南斉は語気を強めて言い返した。村雨を騙る者が刀身を抜き切ろうとした時に空木はその頭を掴んだ。長年鍛えてきた腕力で頭を潰さないように加減をしながらゆっくりと持ち上げる。

「おい南斉。これはどうすればいい」

「お、おおーう、空木いく！そやつ町からほっぴりだしちゃってくー！」

「分かった。ではこれらを氷室に入れておけ。今日は焼き魚だ」

「やつほおくい！」

空木の登場によって一気に強気になった南斉が小躍りしながら氷室の方へ歩いていった。

籠の中身を零れない様に南斉に投げ渡し、刀を取ろうとした男を潰さないように気を付けつつ、町の外へ投げ出した。

「へぶうー！」

「その程度の強さで二度と村雨の名を騙るな」

内心頭に来ていた空木だった。

そう吐き捨ててから即座に南斉の家へと戻り速攻で夕餉を作らねば、五月蠅い南斉の踊りが待っているものだと想像に易かった。南斉はこの頃空木の作る飯を楽しみにしているのか、背後で奇妙な踊りをしながら待つことが多かった。

結局、「まだかのまだかのう魚まだかのまだかのう」と呪文のように唱えては踊り始めた南斉を背に、空木は夕餉の支度を終えた。

「いやー、助かっちゃったよ。空木って実は強い系の侍？」

「侍ではないな。ただ腕つぶしが強いだけだ」

「もう、最近ああいう奴らが多くてのく。村雨って名乗る奴らが何回も来ててもく、もくく！困っててな!!」

「奴ら？らって複数形??」

「そうそう。アイツで五人目だったか…」

（何で？え？五人目だったの？村雨一人だけだよな？どうということだ??）

内心色々と突っ込みたくなる状況に戸惑っている空木だったが、はあ…と溜息を吐いた南斉に少し違和感を覚えながら空木は自分の焼いた魚を突いた。

「攘夷戦争での英雄だか鬼だかは知らんけど、複数いる時点でワシも偽物じゃなどは疑っているのだ」

「そうだな。うん、偽物だと俺も思うぞ」

「そう…村雨というのも振るっていた刀から付けられた名らしいし、多くは語らないその性格から偽物が多く出没しているようじゃいな。

深編笠で顔は隠れとつたらしいし、その笠着けて黒髪、縞袴に緑色の着物を着て村雨って刀を持ってれば誰でも成れるらしい」

「その様なノリで!」

「そんなに強いつて言うなら…なぜワシの甥を守ってくれなかったのかのう…」

「…甥?」

思わず自分の偽物のいい加減さに突っ込んだ空木だったが、南斉の出した言葉が気になった。

不思議と囲炉裏周りの空気が暗くなり、薪のぱちりと爆ぜる音が響く。

「そう、ワシの甥。名を朔介と言って、ワシに似て絵を描くのが上手い奴じゃった」

「朔介?」

「特に風景画を描くのが得意で、『日本の美しい景色を天人共に汚させるわきやいかねえ!』つって刀を持って攘夷戦争に参加して…首だけになって帰ってきおった」

ことんと南斉が箸を置いた。目を瞑りながら髭をゆつくりと弄る姿は泣くのを堪えている様に空木は見えた。

「本当、可愛い子じゃったのに……。ワシに似て、魂を写し取る技術もあつたというのに……」

(絵を描くのが好きな朔介、か)

少しばかり引つ掛かるものがあつた空木であつたが、いやまさかと考えない様にした。

食事を止めた南斉が立ちあがり、隣の私室へ移動して一枚の絵を持ってきた。一人の青年の絵だつた。床に座りながら楽しそうに絵を描いている様子で、見ている者にもその嬉々とした感情が伝わってくるようだつた。

その顔に見覚えがあると空木は思った。

「な？ 楽しそうに描いておるだろ？ 先の短いワシの生活を支えてくれていたんじゃが、結局は一人で終わることになつちまつた」

「もう長くは無いのか」

「ワシ、こう見えて卒寿迎えておるかんね」

ふふんと鼻を鳴らした南斉と思案しながら食事を進める空木によつて、少し騒がしくなつた夕餉は終わった。

その矢先のことであつた。

「のう、空木」

「何だ」

「お主も描いてみんか？」

「絵を？」

南斉は空木にそう提案した。あまりの突拍子も無い提案だつたが、茶化す様子もなく南斉は空木を見つめていた。

「俺は朔介にはなれんぞ」

「そんなの知つとるわ。ウチの朔介はこんな陰気な男じゃないわい」

悪態を吐きながらも空木は南斉の部屋へ行き、南斉から絵の手解きを受けることになつた。

それから一週間後。空木と南斉の奇妙な生活から二週間程経った頃のことだ。

「そうじゃ、線は筆の力の強弱でよく現れる。揚々とだったり、静々とだったり描くも己の自由自在」

スパルタながら南斉の手解きは分かりやすかった。かつては多くの弟子を取っては輩出したと鼻高々に言っていた実績は伊達ではない。

「よしよし。物を捉える目の力はあるようじゃな。あとは魂を込めるのみじゃの」

「魂を込める？」

「そう。絵というのは画題の輝ける一瞬を切り取れる妙技だ。：最近では写真なんぞが流行っているがの。」

それでも、絵には己と画題の魂が込められる。画題の魂を見据えて捉え、一瞬だけキラリと輝くその瞬間の魂を写し取ることが出来るもんだ」

何度も南斉が繰り返し呟く言葉だった。

「空木、お主は良い線を描ける。後は魂だけだのう」

「魂…」

南斉には空木の描いた絵は空っぽに見える。そこに魂を写し取ることが出来れば、己の弟子たちの様に良い絵を描けると南斉は睨んでいた。

空木は着彩を終えた絵から筆を置いた。

「魂とはなんだ」

「魂ってホラ…アレじゃよ。人なら誰でも持つてる類のもんじゃ」

「曖昧だなあ…」

少し疲れた様に空木が笑う。それならば到底己は持てぬモノだと、空木は強く感じた。

それを知ってか知らずか、南斉はその枯れ木の様な腕を空木の頭に乗せた。

「ま、お主はまだ若い。描き続けていればきつと見えてくるわい」

「そうだと良いのだがな。さて、そろそろ夕餉の支度をしよう」

「今日は何じやく？」

「田楽だ。楽しみにしておけ」

「ヒョオオオ〜！」

南斉の私室から厨の部屋へ移動しようとした時だった。荒々しく玄関の戸が開かれた。

それに少し警戒しながら空木が玄関に近付いて、向かい側の壁まで吹っ飛ばされた。壁に貼られた紙がはらはらと落ちて土煙を立てた。

「なんじや空木この音は…っ！」

「よお：爺イ。今日は実力行使に来たぜエ」

「そうそう。俺たち村雨mark2が」「三番目の村正が」「第四代目村麻紗が」「五合目村雨がよオ」

「色々と混ざり過ぎておるぞお前たちイ!!!村雨か村正か村麻紗か統一せい!!!」

「おい、村麻紗。村正だつて言つてんだろ」「や、村正じゃなくて村雨じゃね…?」「あ、そつかあ」

「おいおい、第二第三の村雨でいこうつて言つたじゃねエか。」

つと…。そうそう爺、抵抗は止めておけよ。五人に勝てるだけでも思つてんのか？」

バラバラだった村雨たちが息を合わせたように刀を南斉へ向けた。引き攣った声を出しながら南斉は逃げようとしたが、腰が震えて動けなくなっていた。

じり、じり、と村雨たちは近付いて南斉を刃先で動かした。今まで一人ずつで物を投げれば帰っていたチンピラたちでも集まれば威圧感が出るというもの。

(くそ…あの絵を描く時間をこいつ等に割くのは駄目だ…もうワシには時間が無いというのに!)

日常ではピンピンと老人とは思えない程動く南斉であったが、年には勝てず段々と動きが衰えていく絵の腕に焦りを見せていた。それは素人から見れば早業であり流石高名な絵師であると言うものだが、南斉は自身の衰えを痛い程に自覚していた。

最高の傑作を描いて死にたい。南斉は幸か不幸か自身の遺作に見合う人材を見つけ、自身の腕を戯れに伝授させた。後は、画題の一瞬にして輝く魂を見つuckerだけだった。

南斉は死を覚悟した。絵師としての己の矜持。最高傑作を描いてから死にたいと思つた己の魂を、ここで折ることになるとは。泣きたくなる思いで南斉は私室へ移動させられ、筆を取つた。

「村雨…か」

そんなに強いのなら、今この紛い物の村雨たちを吹っ飛ばしてくれと願ひながら南斉は筆を水に浸けた。

「おい。土足で家に上がるなどそう教育されたことは無かつたのか？」

「て、テメエ！」「んだとコラア！」

「ああ、何でこんなことに…。ほんに嘆かわしいことだ」

怪しい様子で独り言を呟く空木の姿は南斉からは見えなかつた。

「おい南斉。目を閉じていろ。絶対にだ」

「わ、分かつた…」

そう言われてぎゆうつと南斉は目を瞑つた。

空木は、戦場に赴いた時の服装を身に着けていた。

深編笠を着け、柚葉色に細かく散らされた算木崩しの小紋に縞袴。

そして寒気を覚えさせる刀。俗に言う村雨スタイル。

引き抜けば一度寒気と血の雨を降らせる村雨を持って空木は男たちを南斉の部屋から文字通り引き抜き、縁側に見える庭へ放り投げた。

「て、テメエまさか！」

「良いことを教えてやろう。村雨成りきりセットの心得だ」

「野郎！お、襲い掛かれエー！」

「一つ、刀を抜けば獲物の首を狙う」

刀を振り上げた第二の村雨と第四の村雨の首が縁側の庭に落ちた。

「二つ、刀を抜けば獲物の心臓を狙う」

逃げようとした第三、第五の村雨の心臓を一突きし、そのまま絶命した。

「三つ、刀を抜けば獲物の首と心臓を狙う」

「いや一つ目二つ目と同じこと言ってるじゃねーか!!」

そう叫びながら第一の村雨の首が飛び、心臓を突かれて完全に絶命した。

「つまりはだな、刀を振るう俺に喋る暇なんぞそうそう無いということだ」

とん、と転がる第一の村雨を横目に、村雨から発生した露が紛い物村雨たちの血を洗い落とした。

刀を一振りして血の混じった露を払い、鞘に納めた。一息ついて、せめて着替えようと思った空木は縁側から覗く南斉の姿を見た。

「お、お主……」

「見るなど言ったのに」

深編笠を取って空木は顔を表した。南斉は目を見開いて柱を掴んだまま震えていた。

「空木が村雨じゃったとは……」

「そうだな。今までその人斬りと寝食を共にしていたのだ」

「なんと、なんともまあ……」

……哀しい生物じゃな。

南斉の震えた声で出された言葉が空木を苛立たせた。刀を取り出しそうになるのを抑え、口を戦慄かせては堪えた。もうここにはいられやしないだろうと空木は漠然と感じていた。

今まで難無く付き合えていたことの方がおかしかった。そう思うことにした。

「待て」

いつの間にか空木の足を掴んでいた南斉が引き留めた。面倒そうに空木は南斉を見た。一瞬蹴飛ばそうかと思っただが、二週間も過ごしたせいか玄関の角で軽く削ぎ落とす程度にしようと考えた。

「見えたぞ。お主の……魂が!!」

方洲処南斉と空木が初めて出会った時の様に、南斉は大声を上げて目を血走らせていた。

「まったく、あんな場面を見ておきながら家に引き留めるか普通？」
 「ワシはな、もう先は短くない。満足に腕が動かなくなる時が近い。」

…絵師としての己が死ぬ時こそ、また方洲処南斉が死ぬ時。それこそ己が魂朽ち果てる時じゃ。

「ワシは最高傑作を描いてから死にたいわい」

「狂人め」

「もう周りに言われとるわい。画狂人とな」

がはは！と笑いながら南斉は筆を動かした。

庭で行われた凶行は村雨こと空木自身が偽物たちの遺体を回収し、遠くの方に埋めた。家に付いた血や散らされた和紙なども片付けている最中、南斉は狂ったように笑いながら私室に籠り、己の最高傑作を描いていた。

南斉は今まで過ごしてきて見当たらなかった空木の魂をあの夕方の時分を感じ取った。

南斉自身、魂とは何かと答えることは難しい。しかし、他人の心を揺さぶられるその瞬間、南斉のボケ始めて濁ってきた瞳は鮮烈な輝きを見通した。あれは盲目になっても見える類のものじゃと南斉は思った。

「人が恐ろしいか、空木」

「ああ、それはもう。とびつきりに恐ろしい」

空木もまた、寿命の短い人に己が胸中を打ち明けていた。拾った子供にも言わなかった言葉だ。

「恐ろしいのに、悍ましいのに、惹かれてしまうモノだ。手を取れば再び離れることは必定であるのに、何度も何度も日陰から陽の下を歩く人を求めてしまう」

「難儀じゃなあ…お主。それはまるで自身は人ではないと言っているように聞こえるぞ」

「ああ。もうとつくに人ではない。人を斬ることに何も感じないからな」

「ほほおー…言い切りおったな」

南斉はおかしそうに笑って絵を描き進めた。そうじゃな、これだけでは物寂しかろうと南斉は空木の周辺にもう一つ画題を付け足した。

「空木もまた、人であることに違いはないぞ」

「世辞でもそんなことを言うな。そろそろ終わるのだろう」

「世辞じゃないわい。ああ、うむ、後は着色だけじゃ」

ズビー…と南斉が空木に差し出された茶を飲み干した。入れてから大分経ったその茶は丁度良い温さを持っていた。

「そうやって悩むのもまた人…いいや、このワシの目がお主の魂を捉えたのだ。誇れ空木よ」

「…結局その魂とやらは何なのだ」

「ワシにもよう分からん」

「いっつつつつもその回答だな」

「よう分からんが…ワシが昔から目に見えたモンじゃ。それを見たら、”これは残さねばなるまい”という気持ちが昂って絵に残したいと思つたのが初めじゃったな—」

「思い出話か。随分と近いな」

空木の、南斉とはまた違った物が見える目には南斉に浮かぶ線が薄くなっていた。その線は生命を現す物だとなく空木は理解していた。だから、それが薄れるということは南斉の寿命もそこまで迫ってきている。

それもそうだ。空木の正体が発覚した時から南斉は何日も寝ていないし、食べてもいない。

文字通り、身を削って魂を絵に注ぎ込んでいる。

「ワシにも分からんが、空木にはまだ時間がある。魂を探す旅路というのも良いとは思わんか。」

そして絵巻物でも描いてワシに見せろ」

「なんでお前に見せなきゃなんないんだ。そのまま成仏してろ」

「ははは！化けてでも見てやろう。最後の弟子の作品をな」

「弟子か」

「そう。お前はワシの弟子だ。息子にも娘にも、何より甥にも突き放

された老人が戯れに教えた、最後のな」

南斉は筆を動かす。顔料を溶いた小皿に何度も筆を浸し、濃度を調節しながらも絵を描いていく。

…甥。

空木は戦場で出会った、絵を描いている人物を思い出した。方洲処南斉の甥である朔介は空木を見て言った。

「『いつもだったなら風景画なんだがな。アンタを見てつと描きたくなっちまっつてな』」

「お、おい…空木。それは…そりゃあ…」

「どっかの誰かが言っていた言葉だったか。どこぞの画狂人の血でも引いたのか、こんな絵を残して逝ってたな」

空木がひらりと懐から一枚の紙を見せた。朔介が天人の攻撃で世を去る前、眠っている振りをしていた空木に押し付けられたものだった。

「なんだ。俺もアイツも考えてる構図は一緒ってか」

「見た感じそうだな。魂が見える絵師とやらは考えていることも同じになるらしい」

「ガハハッ！ 違いねえなあ…！」

南斉が筆を置いた。

「朔介は首だけでも持って帰れたのがやつとだった。それだけは言うておく」

朔介は天人の砲撃で身体を吹き飛ばされた。倒壊した土くれの中で誰かの遺体の欠片が残っている事自体が奇跡だった。その砲撃で逃げ帰ろうとした攘夷志士にそれらを持たせたのがその場で空木が出来ることだった。

「ハハハ…、画狂人としても方洲処平三郎としても死ぬる。これ以上無い老後がある、か」

それからぼつきりと、南斉の声は消えた。線も消えて、実に穏やかな顔で彼方へと旅立った。

空木が町に行って方洲処南斉の訃報を伝えた。方洲処南斉からの

遺言で葬儀は静かにやって欲しいということ、面識のあったふくよかな女将とその一家、最期を看取った空木とで簡易的な葬儀を行い、南斉の遺体を埋めた。

葬式も終わり、空木はふつと売店へと寄った。

「すまない、筆と墨、それから紙を売ってくれ」

「あいよ。日記でも書くのかい？」

「そんな所だ」

買ったばかりの新品の筆をくるくると回す。南斉が見れば「何をしとるんじや馬鹿者オ！」と怒鳴られそうだなと考えて、空木は懐に買ってきた筆と墨と紙を入れた。

代わりに二枚の紙を取り出した。片や同じような構図で白黒のみの浮世絵、片や同じような構図で着色された浮世絵だ。

「俺が、こんな顔をしている筈が無いだろうが」

泣きそうな顔で眼差しと片腕を陽の元へ向ける刀を持った血塗れの男の姿だ。足元には見事な空木の花々が咲き、男の足元に流れる血の池を映えさせた。

傍らに空木と書かれ、隣には「生きていたい人」と達筆な文字で書かれていた。

第二次攘夷戦争編

第二次攘夷戦争勃発〜坑道発見 part 8

こんばんは皆さん。初めましての方は初めまして。前回の宣言通り何も無かったので5月までカットしようとしたら珍しいイベントが発生したのでその垂れ流しから part 8、始まります。

このイベントは画狂人の弟子と呼ばれるイベントで、なんと経験点を消費せずとも経験点＋スキル「絵画技能」を得られるものです。このスキルを持つておくと絵を描いて出品して売ることが出来ます。つまるところ、職業：絵師になってマダオの寸前回避が出来るんですね。いやー、これが発生するとは思いませんでした。かなりの低確率でしたのでチャートには組み込んでません。特に選択肢も無く、流れるテキストを読むだけのお時間です。でも方洲処南斎殿はゲームオリジナルキャラですが結構良いキャラしてるので好きですよ、ええ。

画狂人の弟子：これは弟子イベントと言われるもので、他にも百利休の弟子や申楽師の弟子など、○○の弟子というイベントはちよつと特殊な職業に簡単に就くことが出来ます。先程言った通り経験点を消費してその職業に必要なスキルを得ることも出来ますが、こういった職業では名声と熟練度というゲージが発生します。イベント経由で職業に就くと、この熟練度が上がった状態になります。

この熟練度と名声がどう影響するのかと言いますと…。例に出すと絵師の場合、熟練度が高いと作成した絵の値段が高くなります。そして売れば売れる程名声ゲージが上がり、更に絵の値段が上がっていきます。絵の作成には器用さ・素早さが関わってきます。器用さが高い程熟練度ゲージが上がりやすくなり、素早さがある程絵の制作に掛ける時間は短くなります。

そう、この空木さんのステータスの場合、最高速度で熟練度を上げることが出来ます。しかもイベントで半分上がった状態です。もう原作入ってからの収入は安泰と言えましょう。

さあ〜て特殊イベントの説明もそこそこに、今回から念願の第二次

攘夷戦争が始まるゾ。第二次攘夷戦争で必ずやっておくことは無いんですが出来るならJOY4との好感度は上げておくといいかもしれません。特にプレゼントも必要なく、戦場で功績を立てておけば勝手に上がっていくんですがね。攘夷戦争時でしか見られないスチルとかあるのでやりたい人はやっておくと良いかもです。

メリットとしては好感度上げておくと銀ちゃんの原作イベントに巻き込まれやすくなりますし、坂本さんは色んな商品を融通してくれるようになります。将来の彼は宇宙を跨ぐ快援隊を経営していますから、たまりに珍品が売られていることもあるので要チェックです。桂と高杉は……ナオキです。好感度上げ過ぎると攘夷党か鬼兵隊に勧誘されるだけですな。

いつもの変装をして戦場にイクゾー！デッデッデデデ！（カーン）

あ、そうだ。第一次攘夷戦争との明確な違いを言っておきましょう。第一次攘夷戦争と基本的なシステムは同じですが、天人がヨワヨワになるのと、何より特徴的なのは幕軍が入ってきます。敵は天人だけではないということ。天人と地球人でのステータス差に気を付けながらやりましょう。もう幕府ちゃんも天人に下っているのですね、後は輪を乱す侍たちを打ち首にするだけの作業だと言わんばかりに攘夷志士を狩りにやってきます。

そういやこの頃になるとロツテンマイヤー殿の片腕が切り落とされている頃でしょうか。おのれ定定めえ……（齒軋り）

幕軍は積極的に天人たちの支援をしてるので天人よりも早くその儂い命を散らしてもらいましょう。そうそう、今回はコメントで要望の多かった短刀を使っています。これ滅茶苦茶にリーチ短いんですがスキルに暗殺術などがあると一撃死させることができます。持っていないんですが持ち前のステータスで一撃死できます。何だお前ゴリラかよ……。

しつつかし、飛び道具戦になるとほぼシューティングゲームレベルに弾幕張ってくるのが厄介ですな。面倒になったら被弾覚悟で射手を先に倒していきましよう。体力バー滅茶苦茶に増えたのでこんな

楽勝ですわ、ヘッ。

おらおら、首寄せ。

『遠くの方で白い狼煙が上がっている…どうやら攘夷志士たちが苦戦している様子だ』

おっとこれは攘夷四天王関係のイベントです。その名も苦戦イベント。これは上手く成功すれば好感度が爆上がりのウマウマイイベントですが天人たちが第一次攘夷戦争時並に強くなります。そのままほっといても彼らは生き残るので残り体力やステータスが心許ないなら無理に参加するのは止めましょう(5敗)

突撃イー！ホラホラホラホラ、こんな小刀に負けて恥ずかしくないんですか？

今回苦戦していたのはラッキーなことになり銀ちゃんでした。白夜叉の活躍を間近で見られる…最高やな！

「お、援軍かありがてーな」

はい、天人と幕軍を全滅させたらイベント終了です。さらば銀ちゃん、万事屋永遠なれルート行きだけは止めてね(急いでセーブ)

さっきのイベントで好感度が大木レベルになってましたね。これだと各所のイベントで声を掛けられることが多くなります。よしよし、順調だア…(ニチャア)

やっぱ小刀使いにくい…使いにくくない？よくこれで戦場行こうと思ったな(他人事)

隙アリイのアリから背後を見ずに一刺し。このモーシヨンかっこいいので何度もやっちゃう。シュツシュツ

って苦戦イベントに苦戦イベントが重なった…だと…いや、誰だよこんな苦戦してるの。坂本さんか？(偏見)いや5月だとまだ坂本さんは来てないか。彼が参加するのは確か6月です。そして退場するのが8月です。

じゃあ桂さんか高杉さんか…。

桂さんじゃないですかー！ヤダー!!

「援軍か…助かる」

他の攘夷志士たちも倒されそうになるのを助けてあげましょう。

桂さんの苦戦イベントでは周囲のNPCにも気を配らねばなりません。おっと危ない！

はい、苦戦イベント終了です……。

「助かったぞ」

じゃあな！もう苦戦すんじゃないぞ!!

『遠くの方で白い狼煙が上がっている……どうやら攘夷志士たちが苦戦している様子だ』

ってまた苦戦イベントって桂さん苦戦してるじゃないですかー!!!

ヤダー!!! (迫真)

「すいませーん、もっかい援軍下さーい」

そう…… (無関心)

そんな替え玉頼むような流れで言われても……ってやっぱり戦場イベントは上がるのが速いですね。もう桜の蕾が咲きそうになります。ガバガバだなお前らの好感度エ……。

じゃあな！もう二度と苦戦するんじゃないぞ!!! (クイックセーブ)

そんなこんなでくってゲゲエ!!アレは天照院奈落！

一体何をしていると思えばそこには坑道。

…… (絶句)

あ、すいません。衝撃のあまり喋れなくなりましたね。そう、そ

こは私が何度も試走して見つけた場所です (血涙)

そっかあ……こんな分かりやすいイベントがあつたなんて……。

チャート組んで実況している身としては恥ずかしい限りですなえ (目逸らし)

この坑道が何かと言われれば松陽先生生存ルートに行きたい全人類への救いの手です。これを使えば松陽先生を脱獄させることが可能になります。アプデで追加された場所ですが、この坑道の地面を掘ると不思議なことに松陽先生が投獄されている側の牢獄の天井が開きます。不思議ですなえ (黒サンングラス)

他の牢獄にもええもんが落ちてる場合があるので可能なら取っておきましょう。

「何奴っ！」

はい。ということ暗殺術の達人こと天照院奈落戦が始まりました。彼らで気を付けるべきは毒針です。ほら、今の様に投げる動作をしたら十中八九毒針なので避けましょう。これは被弾覚悟で当たっているものではない（戒め）

はい、工事完了です…。ごめんな名も知らぬ奈落たち。経験点と服装、毒針その他諸々の暗器の供給ありがとナス!!（下衆道）

前遭遇した時は戦闘しなかったので奈落の服が手に入りませんでした。が、今回のこの実に良心的なイベントは服装も供給してくれる良イベントでしたね。強さも通常ルートの虚さん朧さん周辺の奈落よりもカスレベルです。毒針さえ対応出来たら難無く倒せることでしょう。

そうそう、別にですね10月までにこの坑道を使い、松陽先生を脱獄させることは可能です。でも何故10月まで戦場で頑張るかって？

それは滅多天に表道に現衆れないとても美味しい経験人点が出てくるからです。

天を自称する御老人がお説教中にマジモンの昇天。ああ〜気持ちがあええ〜（根っからの攘夷志士）

天道衆を殺害すると警戒度が上がって宇宙に逃げられることがあります。原作通りのルートを辿らなければラスボスにもなれない上からむにやむに言うだけのクソザコ御老人集団で経験点がやたらと美味しいだけの群れです。脅威なのは下で働く天照院奈落と春雨位です。

じゃけん、見掛けたら積極的に潰しましょうね。

この坑道での道は必ず覚えておいて、攘夷しましょう。そしてイベントも無いのでカットオ!

特に上げるステータスも無いのでリザルト画面もすつ飛ばしていたら今はもう8月。

は？

坂本さんと何もイベント起こせずに退場していったんですけどそれは…。

Oh……。たまに仕入れてくれるレア武器が面白くて紹介したかったのですが、これでは無理そうです。彼は宇宙を旅するので宇宙旅行に頻繁に行かない限り、会う回数は少なく好感度を上げるのも難しいです。

意気消沈したところで今回は終了です（メンタル激弱）

ほな、さいなら。

— — —

「クソ…キリがねえな!!」

「白夜叉だ！討ち取れ！」

いつもの様に単独で奇襲を仕掛けたが意外と天人の数が多かった。確かこの先の方で土佐から援軍が来るっていうのに、斬っても斬っても沸いて出てきやがる。斬りながら死体の方に火種を入れて狼煙を作る。あー、でも高杉が来たら嫌だな。

イラついて思わず舌打ちした時にそいつが現れた。

「む、村雨だ…！村雨が来るぞオ!!」

村雨？なんで雨の名前が聞こえるのかが分からなかった。しかし、その天人の怯え様はまあ酷いもんだ。ただの通り雨の名前を叫んだだけで、俺と戦っていた連中が一齐に一方向へ逃げやがる。

「お、援軍かありがてーな」

天人の波を割いて来たのは笠を被った奴だった。

しかし、その手に持つてるのは刀じゃなくてそれより短い短刀だった。

「おいおい、そのサイズで天人たちを満足させられるとでも思ってるのか？」

「問題ない。無事に昇天させるとも」

ソイツが逃げようとしていた天人の隣を通り過ぎた瞬間、天人たちの首が飛んだ。一面が汚ねえ天人の血の雨が降った。

「ビュウ〜。中々やるじゃん」

そう声を掛けたはいいが、遠くの方でヅラが戦っている方面で狼煙

が上がった。あれは援軍要請用の狼煙だ。へましやがったかヅラ、いや周りの奴らか？

あつちに行くのも面倒だって、…丁度いい奴がいたじゃねえか。

「わりーけどあつちの狼煙の方にも行つてやつてくんね？知り合いが苦戦してんだわ」

「ここはもう大丈夫なのか」

「アンタが来てくれたから蜘蛛の子散らすみてーに消えてったよ。俺アまだここでやつとくわ」

「苦戦している知り合いの名は？」

「ヅラ」

「ヅラって…その人物は禿げているのか」

「そーそー。頭髮が哀れになつてんだよ。それも援軍してやつてくんね」

「それは無理だな。流石に頭髮を再生するにはリーブ20位の猛者が集う場所でない。ではな」

そう言つて場違いに笠被つた奴がヅラの方へ天人斬りながら行つた。

…そーそーいや誰だアイツ？

— — —

そう、あれは俺が卑劣な天人の罠に掛かつていた時のことであつたか…。

奴等、卑怯にも戦場にて人妻ものの春画を置き、そこに落とし穴を仕掛けておつたわ。

「まったく…まさかこんな場所に落とし穴があるとはな…」

「いや、そういう問題じゃないでしょう!? うわっ！」

「鼻血出してないで早く出てきてくださいよ桂さあん!!」

「それもそうだな…よいしょっ。ぬ、抜けぬ…!」

「アンタ何しにやつてきたんだよっ!! 援軍ー、援軍ー!!」

そうして同士である松本くんが狼煙を焚いた方がいいが、戦況は著し

く悪くなつていく一方だった。春画の一番良い所を読み俺も松本君たちもクライマックスを迎える、そんな時であった。

突如として交戦状態であった天人たちが逃げるようになった。しかし、逃げようとした天人たちの首は吹っ飛び、文字通り血の雨が降る状態へと変わっていた。

「援軍か…助かる」

「なるほど、お前がツラという人物か」

「ツラじゃない、桂だ！ところでどなただろうか。良ければ助けてくださいませんか」

「ただの攘夷志士」

「そうか、ならば助けてはくれないだろうか」

「はー、なんともまあ劣悪な人体の描き方だ。実物知らないんじゃないか？」

「いや胸が強調されているのが良いんだろう…。あの、助けてくださいませんか」

「やー助かりました！ありがとうございます！」

「あの松本くん？それから見知らぬ人？ちよつとオ？」

「あの人の事は放つておいてください！」

「松本オオオオオオ！！」

「仕方ない、そろそろ助けるか」

…うむ。そうして俺はピンチな所を見知らぬ人に助けられ、桂浜で援軍を迎えることが出来たのだ。

「すいませーん、もつかい援軍下さーい」

「これが…松陽の弟子なのか…？とんだ問題児では無いか…：…？」

だがまた苦戦した時にもあの人に助けられてな。何とか桂浜で合流できた訳だ。

何故だか銀時と高杉に蹴りを入れられたが…そんなに春画が見たかったのだろうか。今でも不思議だ。

いや、それよりもあの人の名前を知らない方が問題であったか。

うーむ…一目会えればピンと来るとは思うが…、また会えたら俺の秘蔵の春画コレクションでも精査してくれないだろうか。

ちよつとエリザベス？その本の束はつてアアアアアアアアアア!!止め
て!出さないで!お願いだからアアアアアアアア!!

坑道発見く天照院奈落潜入まで part 9

おはようございます皆さん。初めましての方は初めまして。そろそろ第二次攘夷戦争を大詰め！チャートも後半戦をきつて大詰め！そんな part 9、始まります。

以前、私は10月まで攘夷するだけとは言いました。ですが、こんな戦闘ばかりを見ても面白くない…何もお楽しみがなくなる？

前回のパートを編集していた私はそう思いました。

やっちゃいますか？（何を？）

やっちゃいますか？（だから何を？）

やっちゃいましょうよ！（天照院奈落への潜入を）

このゲーム、服を変えれば一定時間だけ所属組織への潜入が出来ますが、ですが、スキル「変装」があると半永続的に潜入し続けられます。桂さんや山崎さんなどがこのスキルを持っていますね。

ということと8月のリザルト画面でそのスキルを取っちゃいましょう。それから一応坑道から天照院奈落に侵入しますが、松陽先生のところには骸ちゃんという強い門番がいます。

なので、出来るだけ物音を立てない様にするスキルも取っちゃいましょう。音が立って確認されなければ松陽先生の様子を見に来た奈落の一人として彼女は考えてくれる筈です。

それではドン！

空木 変異体 男性

体力：99

霊力：0

知能：99

スタミナ：99

筋力：99

精神力：99

器用さ：99

素早さ：99

幸運：99

変異体特性【不老不死 五感強化 魔眼 日光弱体化 不眠症 蹴鞠恐怖症 寡黙 無痛覚】

スキル【絵画技能、変装、隠密】

経験点：27

よしよし。これで例の坑道へ行き、服を天照院奈落の物に着替えて…はいドン！

この位置は一番奥の方の牢屋です。お邪魔するわよ、（牢からこばんは）

アイテム回収を忘れずに…おほ、奈落の暗殺術手解きいく。これはスキル「暗殺術」が手に入る代物ですよクオレ。時間があるときに読んじやいましょう。というか今の内にですね。

『スキル「暗殺術」を手に入れた』

無事スキルも手に入りましたね。これも松陽先生難民救済措置です。暗殺術があれば忍殺マーカーが出るが如く一撃死させられる瞬間が出てきます。

はい。そしてですね、変装すると右下に警戒度ゲージが出てきましたね。これが満タンになると所属組織全員から追われることになります。牢から出て骸ちゃんに見られても上昇しない…変装と隠密スキルは…：最高やな！（潜入完了）

おつす久しぶり松陽先生。何か書いてますね…。先生もこちらに気付いた様子も無いので変装はヨシ！（現場猫）

ではでは…天照院奈落の日常パートを覗き見しましょう。

丁度お昼の時間だったようですね。食堂があるので行きましょう。意外と面白いことが発覚します。

大体原作に登場するモブ奈落たちは無言ですが、ここだと喋り倒すNPCになります。お前ら月人か何か???

「おいおい、今日何にする？」「俺カツ丼」「胃が痛いから粥かしら…」「あー、分かる。最近人使い荒いよなく」「どんだけって感じよね」「頭もよく付きあえるよな」

モブたちは良いとして…おつといました。出番が少ないけど良いキャラしてる枢さんです。

なんと彼は甘党です。ほら、食堂でスイーツの抹茶パフェを食べる姿を見ましよう。何とも殺伐とした組織の中で癒される光景でしよ
うか（目玉グルグル）

「お前何も注文しないの？」

あ、しますします。そうですね、抹茶パフェ注文しましょう。

『奥にいる厳つい男性と目が合った後、男性が少し笑った』

はい。枢さんの好感度が上がった時のテキストが出ましたね。これは彼の好感度上げていくと話してくれるのですが、奈落の人達は甘党よりも塩辛い物好きが多く、スイーツを頼むのは骸ちゃんとか女性奈落位で男性だと少し肩身が狭い思いをしていたそうです。

なーのーでー、一般男性奈落到に扮している空木くんがスイーツを頼むと好感度がチョコロ甘く上がります。可愛いでしょう？連日で五回スイーツを頼むとなんと奈落三羽の一人である枢さんが隣に来て会話してくれます。皆、枢さんルートも楽しいから是非ともやってくれよな！（奈落ルートの宣伝）

ま、それも原作通りに進んでいたら奈落のメンバー全員がミイラ状態になって口数も少なくなるという殺伐とした景観になります。やっぱあの人虚さんラスボスだワ…（恐怖）

パフェも食べ終わった様子なので出ましよう。奈落の仕事はこれからです。

真夜中の集会でお仕事が割り当てられます。朧さーん！見てるかー!!!（変装中）

要人の暗殺。と思いきや、なんと定定の護衛です。はーはーはー???
（攘夷志士）

定定の護衛はまあ…時折襲ってくる暗殺者の対処と、御老人の相手です。老人は若者と話せるだけで良いというのはその通りらしく、ペラペラとロツテンマイヤー殿と鈴蘭さんを引き離した話を話してきます。しかし、この場でバレる訳にはいかないので意味深そうに頷いておきましょう。ケツ。

そうすると定定にも好感度が設定されているので上がります。定定ルート…、彼の裏側がよく知れるルートです。色々と幼少期は苦勞

したんだとか、將軍の威光に恥じずに今までやってきたんだとか、そういう弱みとかを暴露してくれます。

昔から頼れる人はあまりおらず、常に命を狙われて…とか。そう思うと悲しい人なんだなあ…とは思いますがそれ（鈴蘭と六転舞蔵の件）とこれ（寛政の大獄）とは話が別だ、慈悲は無い。

あつ、いいこと思いました。ここでバリクソに好感度を上げておきましょう。接触する機会が少ないだけで彼に設定されている好感度ゲージは滅茶苦茶上がりやすいです。どれだけ寂しい人生を送ってきた事やら。

はい、ですので今の会話で花が咲き乱れております。虚さん（と松陽先生）以外で初めての好感度MAXがこの老人とか救えねえな…。

「このままだと定ルート行っちゃわないの？」という視聴者の方、大丈夫です。定ルートのエンディングに行く条件は一國傾城編、それが無ければ特別に用意されたシナリオでの死亡ルートを折ることです。なにせ、松陽先生投獄イベントが起きた時点で狂える獣の高杉くんがどういったシナリオになろうと松陽先生の仇を取りに来ますので。そこが定ルートの山場というか、彼がラスボスですね、ええ。『定定は自分以外の人を払うように言った』

「のう、お主。名は無いのか？それから顔を見せてはくれまいか」

『笠を外して名乗る（偽名可能）』『笠を外さず名乗る（偽名可能）』『笠だけを外す』『名乗らない』

ここは悩みどころですね。顔を晒すと面白いことにはなるのですが…ここは笠を外さず偽名を名乗りましょう。適当に鳥…鳥の名前…：霍公鳥にしましょう。

『笠を外さず偽名を名乗った』

「…霍公鳥か。覚えたぞ、その名」

はいはい、そろそろ月も変わる頃です。一國傾城篇の時にまた会いましょうね。

空木 変異体 男性

体力：99

霊力：0

知能：99

スタミナ：99

筋力：99

精神力：99

器用さ：99

素早さ：99

幸運：99

変異体特性【不老不死 五感強化 魔眼 日光弱体化 不眠症 蹴

鞠恐怖症 寡黙 無痛覚】

スキル【絵画技能、変装、隠密、暗殺術】

経験点：41

そうなんですよねえ…。そろそろ10月です。こうなると天照院
奈落に入っていると全員あの処刑会場へと赴くことになるので手間
が省けましたね。

経験点もそこそこあるので何かしらのスキルを取っておきたいと
ころです。うーん…。あ、これから確実に殺る為に射撃の腕を上げる
「射撃術」でもしましょう。逃げられては困りますからね。

空木 変異体 男性

体力：99

霊力：0

知能：99

スタミナ：99

筋力：99

精神力：99

器用さ：99

素早さ：99

幸運：99

変異体特性【不老不死 五感強化 魔眼 日光弱体化 不眠症 蹴

鞠恐怖症 寡黙 無痛覚】

スキル【絵画技能、変装、隠密、暗殺術、射撃術】

経験点：21

いやまあ、射撃とは言っても結局自分でエイムを定めなければいけないんですが。そうですね、これは保険みたいな感じですよ。ちよつとヘッドショットの判定が甘くなる程度のもですよ。

というところでキリがいいのでここまでにしたいと思います。

ほな、さいなら。

一一一

「ほほう、中々腕が良いようだな。前の鴉は呆気なく散ってしまったというのに」

「…前の鴉が弱かったのでしょうか」

「それもそうだな。ほれ、さつさと片付けい」

食事を狙ってやってきた無粋な者どもを以前の鴉よりも素早く殺し、ゴミを片付ける速さも桁違いの鴉がやってきた。

こちらの話をしっかりと聞き、好ましい回答ばかりするものだ。朧も中々良い鴉を差し出してきたものよ。

天道衆の者と会う時でも差し支えなく儂を支えた手腕は見事だ。あやつらが言う不老不死なる存在を見つけたかという問いに、「大方の目星は付いております」と言い放ったのは嘘か真かは分からんが…。

しかし…不老不死か。本当にそのような存在がおり、儂もその存在にあやかり永劫にこの国の父となれるのならばなりたいたいものだ。

…ふと、初代將軍徳川家康の日記の中に書かれていた一文が気になった。

『印籠刻に、朱色の葵紋の太刀を持った者が何れ我らが腐りを断ち切る』

…ふん。幾ら先祖といえども、馬鹿馬鹿しいことを書くものだ。儂は腐りなど起こしてはおらん。先代が気を病み、まともに動けない状態で儂が代わりに指揮を執り、開国を宣言したのだ。

近頃では攘夷志士なる者たちが若き命を無為に散らしながら天人たちに抵抗していると聞く。まったく、無駄な事をするものだ。

「酌をせい。鴉よ」

「承知いたしました」

音もなく鴉が隣に立ち、猪口に酒を注ぐ。満月を見ながら一人で酒を呑むのもまた一興。

しかし、満月、満月か…。

「ふふふ、あいつの顔をお主にも見せたいものだな」

「はて…誰のことでしょうか」

「儂を裏切ろうとした者だ。あの絶望する顔…、好いた女を目の前で抱かれるあの時の顔…。

思い出しても涎が止まらないのう」

「零れてます。將軍、涎が零れてますよ」

「おっと…拭き取れ鴉よ」

その男が無言で手拭いを取り出して拭う。束ねている黒髪が揺れているのを見ながら、儂はこの鴉の名を聞くことに決めた。いつまでも鴉と呼ぶには味気ない物がある。

「のう、お主。名は無いのか？それから顔を見せてはくれまいか」

「名は…霍公鳥と申します。顔は少し…困るので」

「…霍公鳥か。覚えたぞ、その名」

笠を被つていてもある程度は見える物だがな。その黒い髪に緑色の目。そして、霍公鳥という名…覚えたぞ。

猪口の酒が無くなったのを見てすぐさま注ぎ、その徳利を置こうとしたその腕を掴む。その男は顔を儂に向けた。

「…何かご不満が」

「お主は、儂を裏切らないよな？」

以前の鴉は舞蔵の肩を持ったから直々に儂が手を下してやった。この鴉はそのようなことをしないと、儂は確信を持ちたかった。

「これからの、貴方の動きによつて変わりますでしょうか」

今まで無表情だった男が口を三日月の様に上げ、うっそりと笑っていた。

…何故だか、その笑顔に悪寒と目を離せない迫力があつたものだ。

雨が降りしきる中、巳厘野家の次期当主である黒髪の少年が倒れていた。つい先程まで結野家次期当主である清明に勝負を挑み、お約束の様に浣腸をかまされて敗北していた。

その少年に近づく人影があつた。旅装束に身を包んだ少年だった。

「おい、道満。また清明に負けたのか」

「またつて言うな…。仕方ないだろ。相手は清明だもん…」

「相変わらず卑屈そうな所は変わらないんだな」

「そういうお前は何か変わったのか。半年も留守にして」

「ああ。神仏から力を授かったぞ」

「いいよなあ…お前は自信満々で」

そう言つて道満は倒れている姿勢から膝を抱える態勢になつた。その様子に旅の装いをした人物が溜息を吐いて道満に手を伸ばした。「俺もお前も由緒ある血統であり、平安時代から都を守ってきた一族だろう」

「僕の所は君の一族みたいに晴れやかじゃないんだよ…」

「それもそうだな。一族の名付けられ方からして汚いもんな」

「そこは否定しろよ！」

「もう…」と言いながら道満が差し伸べられた手を掴んで立ち上がった。

「そうそう。おかえり坂下茸麻呂」

「ただいま。土産があるから早い内に食べてくれ」

坂下家次期当主、坂下茸麻呂はそう言つて道満に包みを持たせた。

坂下家。かつて都に迫る“鬼”を退治した後も都へと迫り来る怪異を退治し、都の平和を影から守っていた一族であり、結野衆、巳厘野衆と共に幕府に召し抱えられた一族である。

エンディング5まで 最終回

曇り空が広がり、若き侍たちの死体が散らばる戦場。それを見渡せる崖に天道衆、吉田松陽、そして大勢の天照院奈落の者たちの姿があった。

「哀れなものだ……。国を憂う心を持った若者たちがこの様な運命を辿ろうとは。」

「これがお前のやりたかったことか？松陽」

天道衆の一人が、縄で縛られた松陽に問い掛けた。

「お前の教え子たちは、お前の教え通りに犬死していったぞ。」

そんな教えを説いた覚えは無い。そう言いたげだな。

「…ならば試してみるか？」

松陽の後ろに二人の侍が突き出された。松陽同様に縛られ、身動きは奈落の錫杖によって封じられている。

長く続いた戦争によって疲弊した彼らを捕らえさせ、師の処刑場に持つてこさせたのは天道衆の命令であった。

「お前の弟子たちが、お前と共に犬死していく道を選ぶか。」

それとも…その手で師を殺めてでも生き残る道を…選ぶか」

白夜叉と恐れられた侍が刀を持ったまま、突き出された。

「教育者たるお前にふさわしい処刑方法だろう。」

師か、仲間か。

どちらでも好きな方を選びな」

地に倒れ伏している二人は白夜叉が行うことを察知してしまった。

白夜叉が一步足を踏み出し、二人が息を呑む。

そして、松陽も死を待つばかりに目を伏せていた。

内面で行われていた闘いは、彼の持った刀が弾き飛ばされ、内側に巢食う破滅願望の持つ刃が首筋に向けられることで終わりを迎えていた。

(これまで、でしたか)

師の言葉に支えられ、刀を握って抵抗してきたが、結局はその刀も飛ばされてしまい、死を待つのみという状況へと陥ってしまった。

(ああ、一目だけでもお会いしたかった)

白夜叉が松陽の背後に立った。せめてもの、彼に一言言おうと口を開いた瞬間のことであった。己が拾った眩しい人の子に。

突如として辺りを白い煙が覆った。それから三つばかりの鈍い打撃音がして静まり返った。

「な、何事だ！」

周囲の奈落も警戒態勢に入り、じやらりと錫杖の輪の音が重なり合って響く。

パァーン！

その音の間に場違いな発砲音が響いた。拳銃と呼ぶには重く、それは迫力がある音だった。

そしてその音と同時に臙が咄嗟に守ろうとした天道衆の一人が倒れた。眉間を撃ち抜かれ、どろりとした血を垂れ流している。その様子を松陽と臙だけが見ていた。

「曲者がいるー殺せー」

一早く状況を感じ取った臙が声を張り上げて周囲に警戒を促した。しかし、その周囲の奈落、または錫杖の音は段々と少なくなっている。そして血の匂いが濃く充満し、水気が増えている様に臙は感じていた。

白煙の中で空木が周りの奈落の首を斬り飛ばしては、その目に映る線を斬っている。

首を目掛けて刀を振るい、時にはその目が映し出す線の通りに体の部位を斬っていく。錫杖で殴られようが持ち手ごと切断して無効化し、得物の消えた人間の命が消えていく。

その様子を見てある奈落の者は毒針を投げたが、投擲音を聞き分けた空木が下から死体を蹴り上げて代わりの的にしては投げた者から狙われて首が飛んでいく。

目の前で動く曲者を抑え付けようと腕を掴もうとする者もいたが、肘で鳩尾を打たれて線を斬られては死亡していく。

穴から血を噴き出す奈落の死体と首だけが離れた死体がバラバラと重なっていく。

白い煙の動く方向、人の一瞬の悲鳴と血の噴出音を聞き分け、臙は曲者の位置を見定め毒針を投げた。見事に刺さった音がしたが、それは曲者ではなく奈落の死体であった。

そして、白い煙が空へと霧散し曲者の姿を現した。

先程まで立っていた鴉は全て地に伏して、血の池といった様子を作り出していた。

その池の前に立っていたのは、一人の奈落の男であった。

三人の気絶した侍を奈落の死体の中へと蹴飛ばしながら空木が臙と松陽へ詰め寄っていく。

「貴様、裏切ったか」

「いいや、裏切ってはいない。最初から鴉ではなかったただけだ」

「ほう、では何だと言うのだ」

「そうだな。この前名乗った名は霍公鳥、或いは今までそう呼ばれてきた名なら”鬼”か」

空木が臙へと斬りかかる。奈落に支給される刀では無く、多くの血の雨を降らしてきた村雨を持つて。

錫杖の柄を持つて臙は対抗し、片腕に力を込めながらも片方の腕を空木の腕へと向け経絡を突く。

空木の目がそれを捉えて臙から距離を取る。すかさず臙は毒針を投げるも針は宙へと弾かれた。

両者が互いに睨み合ったまま、動かず敵対者の挙動を見つめる。

このまま長引かせても面倒だと考えた空木は目を使うことにした。

空木が空木と名乗り始めた時から見え始めた摩訶不思議な力。時と場合によつて使い分けてきた忌々しい緑光の見える世界。

痛みは感じないが、目に急速的に熱は溜まっていく。そこだけが熱された様に熱くなりながら、空木は臙に見える線を斬る為に動き始めた。

錫杖から取り出した刀で臙は空木を横に逸らし、その背を目掛けて刀を突く。

空木は刀を背の後ろで持つていた村雨で迫り上げ、数束髪を切らしながら空木が態勢を変えて臙と向き合う。目に見える線は刀を持つ

右腕、腹、顔の傷とあった。

刀を持つていた右腕に刀を振るう。不思議と切断される筈のそれは離れることなく、体力氣力を瞬時に削ぎ、臙の腔内から血を溢れさせた。

体感したことのない痛みに怯んだその隙に腹を斬り、そして顔の傷に沿って線を斬る。

対峙していた臙の瞼が閉じる前、笠の下から見えてしまった。

その目を見たから分かってしまった。

かつて己が師に出会うように伝えた人物であったことを。

目を伏して視界との接続を切った。ここまで人を連続で斬るのは久しぶりかと空木は内心で思っていた。

「…師匠？」

一連の殺戮と一番弟子と師との対立を見ていた松陽が、掠れた声で驚きながら声を出した。

「ああ、久しぶり。元気にしていたか」

「この様子を見て言いますか」

「その口ぶりだと元氣そうだ」

刀に付いた血を一払いしてから鞘に納めた。

「おい、今お前の内側には何人いる」

「私と彼を含めて二人だけですよ」

「そうか、なら二等分すればいいな」

「えっ」

どういうことですかと視線で問い詰める松陽にやや目を逸らしながら空木が答える。

「お前の話を聞いてから考えていたんだが…お前の中には複数の人格がある訳だ。一つの体に複数の顔を持っているというのが厄介なだけであって、その分の肉体を用意したら良いんじゃないかと」

「いや、精神的にも肉体的にも複数いる自分を見つめることになる私の気持ちを考えてくださいよ」

「最初は穏便に呪法でも使った等分の仕方を取得しようと思ったが段々面倒になってきた。」

だったら物理的にお前を人格の数だけ刻めば平和になるだろうと
考えてだな…」

「なんで手段がバイオレンスになるんですか。って、いやいや！それで私が死んだらどうするんですか!？」

「…死なないだろ？お前」

松陽が目を見開かせる。その内面では松陽に刀を差し向けていた虚がただ茫然と師を見上げていた。

「…必ず生きて帰ってきます」

「よしその調子だ。で、どうやってやるかだ。

真ん中からぎっくりとやった方がいいか？それとも首と胴体を分断？それか心臓を取り出して真つ二つか？」

「その呪法とやらでやって欲しかった気持ちもあるんですが…」

「ま、それは云々いつぞやかの記憶回前の誰かでやってたことだ。俺に呪法を扱える霊力なんぞ持ち合わせておらぬから、結局は物理的に真つ二つの方法を取るようになるがな」

「云々回前の誰か…？それにしても選択肢が狭くありませんか？

…おや、ちよつと変わりますね」

「ん？」

どーれーにーしーよーうーかーなー、と旅先で見掛けた子供たちがやってきた指遊びをしながら空木が松陽に顔を向けた。今変わるとか言ってなかったか？

「いや…ちよつと待って下さいー！どういふことですか師よ!!」

松陽が困惑する虚に自ら主導権を渡して内側に引っ込み、虚が焦りを含んだ声音で叫ぶ。

空木は目を瞬きかせた。

「どういふって、お前と松陽の分離計画だが…」

「何故分離させようとするのですか、今に私が松陽を殺し、そして貴方に殺してもらう方が良いではないですか!」

「お前、俺が好き好んでお前を殺すような奴だと……。いや、そうか。昔は言葉を喋らなかつたからか……」

「もう嫌なんですよ。苦しみたくないんですよ、死にたいんですよ私

は…！

何回人を殺せば良いのですか、何回私は人に刺されなければならぬのですか、何回私は殺されなければならないのですか！何故隣に貴方がいないのですか、何故貴方はあの時…あの時…！

堰を切った様に虚が叫ぶ。何百年もの煮詰められた叫びが血の池地獄にて響き渡る。

その言葉をじつと、空木は聞いていた。

「私を突き放したのですか…」

虚の脳裏にいつも浮かぶのは空木の首が飛んだ後の、諦めを含んだ眼差し。それは空木と共に過ごしてきた虚が今まで見たことの無い色であり、また空木も虚に向けることは無かった色であった。

あの時、自分は大罪を犯したのではないかと。何度も虚は己に問い掛けていた。

「突き放すも何も、お前がアイツに殺されてしまう可能性があったからだ。あの手の力に溺れる様な貴族はな、戯れに子供を殺しても正当防衛だって言う奴がいるんだ。

あのままお前を庇いながら戦っていても邪魔だったろうし、アイツはアイツで五月蠅くなるだろうからお前は逃がしておいただけのことだ」

「あの時の私が邪魔になる、それは否定しませんが…。それで、師がいなくなつては元も子もありませんよ」

「言ってるな。そのせいかな、そんなにも複雑な人生を歩んでまあ…」

はあ、と溜息を吐いた。戯れに拾って飯を食べさせていた子供がこんな人生を辿るとは。あの頃の自分は思ってもいなかっただろうと遠い目をした。

「…いつそのこと、もう殺してください。

私は貴方との幸せだった記憶を持ちながら、死にたい。

それだけが私の願いなのです」

虚は首筋を晒す程まで深く項垂れた。声からも深く絶望していることが分かり、空木は黙って目を伏せた。

二人の間に血の香りと、湿った空気が漂っている。雲は依然として

晴れないまま、青空を覆っていた。

虚の気持ちがお前からは分からないことでも無かった。幸せだった記憶を持って死にたいと願う己は、確かにいた。それこそ虚と出会う前の空木の心情に他ならなかった。

あの頃のまま死にたかった、と。

だが、虚には幸せに死んで欲しいという願いが空木にはあった。どこぞの老人の如く、あの様に死ねたら何と幸せなことだろうか。

空木はそう考え、顔を伏せる虚の前に鞆を支えにしながらしやがみ込み、虚と目を合わせた。

「いいぞ」

その声に虚が顔を上げた。地獄に垂らされた一本の蜘蛛の糸を見つめるかの表情で空木を見る。

「しかしなあ…俺のこの目も万能ではない。お前を殺したとしてもまた蘇るだけだろう」

閉じた目に再び熱を持たせて”見る”。虚にもその線は見えるが、殺しても蘇るだろうということは本人の談から分かっていた。これに不死を殺せる程万能では無いというのは空木自身がよく知っていた。

虚はただひたすらに、輝きを持った眼差しで見つめていた。

「…だからな？暫くは苦しんでくれ。」

俺がお前を完全に殺す方法を探し当て、俺がお前という存在に飽きたら殺してやろう」

「…はい！」

長く乾いていた心が潤っていく、そんな心地が虚を包んでいた。

垂らされた救いの糸を登る様な心地でその言葉に頷いた。

「だから、分けさせてくれ。お前と、お前を」

とん、と空木の指が虚の心臓を突いた。彼を縛っていた縄は空木がとつくに切り、彼らの足元に散らばっていた。

眉が下がり、血の様な目に光を宿した目が眩しそうに空木を見ていた。

かつて虚が空木と共に旅をしていた幼い頃のように、屈託なく笑って

いた。

「私を、…分けてください」

「ああ」

空木が虚の心臓を掴むために腕を体に突き刺した。

ぐっ、と苦しみの声を堪えながら虚は空木が自らの心臓を手にして
いる事実には打ち震えていた。

空木の手が虚の静脈、動脈を千切りながら心臓を柔らかく包み、
ゆっくりと持ち出していく。名残惜しい様に肉の繊維が心臓から千
切れて、流れる血潮が空木の手を濡らしていく。

乗せられた掌の上で鼓動が規則正しく鳴り、空木はその心臓を二つ
へと切り分けた。

霞んでゆく視界の中で、互いが離れていく感覚を味わいながら、虚
と松陽は笑う。

「…ありがとう」

「逃げろ」、とは確かに言ったがな…ここまで逃げるとは。捕まえ
るのにも一苦労だ」

二つに分け終わった心臓を懐に入れ、空木は後ろの方で倒れている
臙の前に立った。

その体に流れる虚の血が傷害を再生しようと蠢き、臙は息を取り戻
し荒く呼吸をしていた。

「不死の血を与えられると普通の人間でも不死になる、というのは本
当だったようだな」

「まだまだ、この血は…枯れぬ様ですな。また、私を殺しますか」

その目で。

臙が目で言う。それに肩を竦めながら空木は顔を振る。

「俺はお前に感謝しているんだ。再びあの子供に…虚と松陽に会わせ
てくれたことを」

「たった先程、殺した男に言う言葉では無いですね」

「そうだな。…うん、奈落としてのお前を殺したとでも形容しておこ

うか。

今俺と話しているのは吉田松陽の一番弟子だ。あの夜中の崖以来だったか…久しぶりだな」

「…ええ、お久しぶりです。無事に会えたようですねによりです」

「まあ、な。色々と言いたいことはあるだろうが…そろそろあいつ等が起きてくる頃だろう」

死体に埋もれさせた三人の侍を指差した。空木が煙玉を使った時に気絶させた者たちだった。見られると色々と言っていると煙玉を使う前のやり取りで空木は感じ取っていたので早々に気絶させた。

「そこでだ。一つ芝居に付き合ってくれ」

「芝居？」

「そう。お前たち奈落はここでさっきの不愉快な天人と共に死んだ。吉田松陽もここで死亡し、何の因果かあの三人の侍だけは生き残った。…という感じだな」

「はあ」

「そこで、お前の遺体をどこかに隠す。俺は暫く諸国を放浪して来るが、何れは住居を構えたいと考えている」

「…」

「もしかしたら、その頃には吉田松陽も、その内側にいた虚もいるかもしれないな？」

「そういうことですか。確かに、今の状況は絶好ですな」

「だろう？何なら今ここで村雨がやったとでも書いてくれて構わん」

おかしくて堪らないと言った様子で空木は笑い、それに伴い臙が控えめに笑う。

「ですが…、私がまたあの人に会っても良いのでしょうか」

「別にいいだろう。師と弟子、自由に会ってはいけないなんぞの理由も無い。」

好きに会い、好きに離れば良いだろう。今まで焦がれた分だけ存分に居れば良い」

「実に勝手なお人だ」

「好き勝手やるのが性分だな」

臙から離れ、よつと、声を出しながら空木が松陽の抜け殻の首を斬った。松陽にも傷が無ければ不自然になるだろうという気遣いからだ。

それから倒れた臙を背に負った。血の池を背に、二人はその場を後にした。

そうして、後ろの方では慟哭が響いていた。

「すまないが、お前たちに師の実情を話すのはもう暫く後になりそうだ」と二人は思いながら歴史の陰に消えた。

かくして、第二次攘夷戦争が終わった。

かつて侍の国と呼ばれた場所には天人なる異形の生物が揚々と往來を跋扈するようになっていた。

侍と呼ばれた者たちは刀を取り上げられ、衰退の一步を辿っていた。

「ここがかぶき町…か」

「そろそろ腰を落ち着けるのですか」

「まあな。松陽、そっちは人混みだ。離れると迷子になる」

「甘味をくださいよ」

「あとで買ってやる。今は不動産屋だ」

「分かりました！」

茅色の髪をした高校生位の子供を二人連れた男が不動産屋へと赴いた。

一一一

こんばんは皆さん。初めましての方は初めまして。

こつからこのルートの実質的なボス戦が始まりますのでセーブを

忘れずになラストパート、始まります。

今御老人がお話している間に言っておきます。別にここで反乱起こさなくても松陽先生と虚さんは分離できます。

ですがね、そうなるとエンディング6に行くんです。

エンディング5と6の分岐点は隴さんです。6に行くと隴さんは通常通り奈落到所属し、最終的には銀ちゃんとの一騎打ちの末、死亡することになります。なんでや…。

part1でも言った通り、隴さんの生存フラグがエンディング5には必須条件であり、それが確実に立つのはこの乱戦後に会話をすることです。この時は松陽先生の遺言ブーストもあつてか、素直になつてます。可愛いですねえ。

あ、丁度いいタイミングですね。坑道でせしめた煙玉くんのお時間です。無くても出来ませんが、せつかくあるので使いましうね。プシュー！（迫真）

この間に連れてこられた三人を気絶させましょう。好感度リセット案件になるのはいやー、（元に戻すのが）キツイです。なので、確実にやりましょう。

はい、火縄銃。狙いを定めてドーン！ああく！老人が昇天する音オッ！！

そしてその間に周囲のモブ奈落たちをサッー！（迫真）とお掃除しましょう。

はい、煙玉の時間も終わったらすぐさま隴さんと拳を交わし合いましょう。殴り合いは友情への近道であり好感度上昇の近道…やはり暴力、暴力は人間関係すらも解決する…！

しかしながら、隴さんは強いです。ほら、今も経絡攻撃をしようとしてきますね。アレやられると一定時間気絶します。精神力高いと気絶はしませんが、精神力対抗で連打ゲージで気絶するか否かになるので出来るだけ当たらない様に。しかもその間も隴さんたちは攻撃してくるので厄介です。

後は魔眼くんを使って…パパッとやって、終わり！

はい、松陽先生生きてるウー？はい、生きてますね。後は選択肢

ポチポチ押しましよ。

ホイ！とばかりに虚さんが登場してきましたね。彼には更に長く生きて苦しむ様に諭す選択肢を選びましょう。

そしたら…はい。

『二等分する』

二等分するとかいうサイコパスな選択肢を押しして…後はムービー鑑賞です。

いやー、空木くん迷わず心臓ぶち抜くとか…こいつやべえな。

「ありがとう」

こ→こ←（スチル回収）

この満面の笑みを見ろよ見ろよ…。これだけで平安時代からやってきた甲斐があります。死ぬ、死んじやう…！（墓場乱立）

幼少期の頃限定で回収できるあのスチルと同じ笑顔です。絶対狙って描きましたね制作班。

本来なら松陽先生がありがとうって言う場面ですが、虚さんも言うとかドキドキしますね…。もしかして、これが鯉…？（ピチピチ）

ちゃんとアイテムボックスを確認しましょう。

はい、「虚の心臓」と「松陽の心臓」とで二つに分けられましたね。フラグ達成です。

虚さんのイベントが終わった後は必ず隴さんの元に行き、話しかけましょう。ここも選択肢ポチー！

ほら、お前も生きるんだよっ！！

「実に勝手なお人だ」

こ→こ←もスチル回収。はく！お前も松陽先生と骸ちゃんと同様亡命して第二の人生歩めコンチキショー！

ということ、隴さんの生存フラグも立ちました。

この後、彼はランダムで松陽先生の元を訪ねてくるようになります。そして二人で塾を開く、なんてルートが隴ルートと松陽ルートにはあるので頑張ってやってみてください（丸投げ）

そーしーてー

エンディング5に必要な条件

- ・ 虚と吉田松陽の好感度が蓄以上
- ・ 虚の生存
- ・ 吉田松陽の生存
- ・ 朧の生存

が、達成されましたので…。

エンディングムービーが流れます。

空木くんが歩きながら背景の方でやってきたザツクリとした経歴と、クレジツト、それからエンディングごとに異なるスチルが流れます。あと面識のある原作キャラなども出てくるので、原作通りで万事屋介ルート入ってたら滅茶苦茶キャラモデルたちが出てきます。

今回は原作前という事もあって少なめですね。

いや…、長かったあ。編集で part10 位に収められましたが、本来なら part20 位は行ってる長さですよ。つらあ…。

でも、あんなスチル祭り見せられたら満足感パないです。完走できてマジ満足です。

今回のキャラ、日光弱体化があつたのでどうなることかと思いましたが…上手く魔眼くんでカバーできたので上々の流れでした。

うわ、敵の撃破数えぐいです。もしかして今までやってきたキャラの中で一番じゃない？君。後で確認しておきますか…。

ほら、見てください。エンディング5だと虚さんと松陽先生が隣を歩いて、その後ろで朧さんが歩いているスチルが流れます。松陽先生が話しかけて虚さんが鬱陶しそうに眉を顰めて、朧さんがふんわりと微笑んでいます。

ウツ（絶命）

やっぱ…、平和が一番やなって…。これが辿り着いた未来…マブシイ…マブシイ…（サラサラサラ

三人の旅路とか普通に DLC でもいいから出してください、お願い

します運営さん！へこへこ

『長く生きてみるものだなあ……。やっと、何かが見えた気がする』
エンディング「鬼の笑う道」

最後に空木くんというか自キャラが喋って暗転してエンドロールの終わりとなります。

なるほど、空木くんのボイスは求道者タイプでしたか。性格とか過去にもありますが、他にもヒヤツハー！タイプとか冷静だぜタイプとか、燃えてるぜ！タイプなどがあってボイスが変わります。

さて、実況はここまでです。今までこのような実況にお付き合いくださり、ありがとうございます。

御視聴、本当に、本当にありがとうございます。

番外編

幕間 旅絵師の書いた約半年の旅路

0日目

朧を適当な場所に下ろし、戦場で金と共に剥ぎ取った服や笠をあげた。それから少しのはした金も。

これで数日は何も気にせずふらふらと放浪出来るとは思う。

俺の四次元ポケットに二人の心臓があると考えると、俺の四次元ポケットは血生臭くならないのかが気になる。

それから、今日からは定期的に絵を描いていこうと思う。紙や墨は近くの里から買ったので暫くは十分な筈だ。

綺麗だと思つた景色や街中の風景などを描いてみよう。

1日目

欠けていた心臓が再生し、小さい人の形の様なものへと変化していった。凄まじいスピードだ。

赤ん坊くらいになったら四次元ポケットから出しておこう。

今日は見事な紅葉の山を歩いたから、それでも描こう。

3日目

小さい人から良く見る赤ん坊サイズになっていた。服屋などの女性にでっち上げた経緯を話して赤ん坊を育てる際の注意や古着を融通してもらった。ありがたい。

二人を抱えて歩いていれば女性に間違われた。例によつて天人と貧相な人間。腹が立ったので地中に埋めておいた。

今日は二人の寝顔でも描いた。あどけなくて可愛いらしい。

8日目

今まであー、だのうー、だの手足をばたつかせることしか出来なかった二人だったが、何と今日は這いずり回ることが可能になっていた。思わず拍手をしてしまった。

歯も生えそろってきたので柔らかめの固形物を食べさせることにした。

寄った茶屋の娘らにも二人の愛らしさは好評で何だか気恥ずかしかった。

今日は百舌が早贄をしている場面を見た。それを描こう。

15日目

最近松陽が俺の食べている甘味に手を付けようとする。流石に蜂蜜は駄目だ。赤ん坊には駄目だ。分かってくれ。

それから食欲も旺盛になってきたので、二人の毎日の食事を考えることが楽しくなっている気がする。

今日寄った町では天人と町の人間とで仲が良い様子だった。先日寄った町は劣悪だった。

まるで世界が核の炎に包まれて棘付きの肩パッドでも装着し始めたのかと言わんばかりに世紀末さを感じた。火炎放射器は何かに使えそうだったので没収した。

今日は町並みでも描いてみようと思う。茶屋などで描いているとよく絵を売ってくれと頼まれるようになった。

そんなに価値があるものだろうか。

23日目

二人が立った。泊まった宿の人間に赤飯を炊いてもらってしまった。醤油が香ばしく香り、絶妙な美味さだった。

今日はそこの町で見掛けた人物を思い出しながら描いてみよう。

28日目

言葉を喋るようになった。たどたどしいが、微笑ましく感じる。

そういえば、二人はあの時の意識のままなのだろうか。二人のやり取りを見ているとそう感じる。

つまり、成人男性が赤ん坊に紛れて……いや、何も書かなかった。何も気づかなかったことにしよう。

今日は枯れ木を描いた。微妙に難しい。

34日目

冷え込むようになって寒いが子供体温の二人は湯たんぽに丁度いい感じに暖かい。

寝そうになったことは無いが、二人が熟睡している様を見るだけで十

分だ。

今日は木瓜が見事に咲いていたのでそれを描こう。

35日目

おのれ天人おのれ天人おのれ天人おのれ天人おのれ天人おのれ天人

36日目

ついやってしまったが気付かれない筈だ。目撃者は皆殺った。

今日も二人は楽しく部屋の中を走り回っている。松陽が元気に虚を追いかけまわしている。

嫌になった虚が俺の方へ飛び込んできて松陽も飛び込んできたので絵が台無しになってしまったが、まあいいだろう。

今日は月夜が綺麗だった。それを描いた。

44日目

絵を売ってくれと言われる回数が増えてきた気がする。黙っている
と段々値段を上げてくるので、もうこれ以上上げられなさそうだと
思ったら売ってみることを繰り返しているせいか、懐が潤ってきた。
二人とも既に幼児へと成長している。凄まじい成長スピードだ。い
つ背を追い抜かされるか恐ろしい。

程よく熟れている柿を見かけたのでそれを買って剥いて二人にあげ
た。

今日は柿を食う童とかいう題名でどうだろう。良い感じに描けた気
がする。魂の輝く一瞬、というのが少しだけ分かってきたのかもしれない。
ない。

49日目

厄介な客に出会った。難癖をつけては絵を持って行こうとするので
構って欲しい奴なのだろう。見ていた二人が同時に脛を蹴った。

夜中に処理をするのも大変だ。二人には危ないことをしないように
言いつけておいた。が、素直に言っただけ分かったわけではないのでまた
やらかすと思われる。

好き嫌いしてはいけなそうと思って天人を描いてみた。意外と描きやす
い。

54日目

最近は何でも無く鉛筆という硬い筆が作られたらしい。紙に描いてみたら本当に硬く、簡単に和紙が破けてしまった。

鉛筆を使う際はスケッチブックなる紙束などの厚い紙質に描くと良いと言われたのでそれを購入してみた。

また筆とは一味違った感覚で楽しいが、やはり筆で描くのが楽しい：が、筆を取り出せない状況ではこのスケッチブックに物や人などを描いていこう。

絵を描いていると二人はじつとこちらを見つめてくる。何なのだろうか。

今日はスケッチブックを進めてくれた店員だ。鼠みたいな顔をしていた。

62日目

二人の成長が早すぎて服屋に通い詰めることになっているが、こういった面倒ごとでもまた幸せじゃよとどこぞの爺は言うのだろうかと思っただ。

今日はあの爺。

63日目

そういえば絵を売るときに名を描いていなかった。「お前にはまだまだ早い絵を売るなら絶対に名前を描け、じゃないと面倒なことに巻き込まれる」とあの爺が言っていた。名前を何にしようか二人に提案したが、言い争いに発展してしまった。元気なことだ。

近くの海辺で鳥の鳴く声が聞こえた。確か都鳥：いや、百合鷗だったか。もう都鳥でいいか。名前なんて適当だ適当。深く考えるだけで馬鹿らしい。

今日は二人と命名記念に百合鷗。名前として都鳥と書いておこう。

68日目

雪が降ってきた。防寒具は二人には外せないものだ。厚着し過ぎて達磨っぽく見えるのがまた愛らしいと思う。

今日は雪景色でも描こう。首が痛くなって取れそうだ。確かにあの日も雪は積もっていたがなあ…。

74日目

雪景色を描いた絵はとても売れた。かまくらとか、雪だるまを作って遊ぶ子供とか、とても輝かしくて良い物だと思う。

宿屋の縁側で絵を描いていたらそつと隣に雪兔なるものを虚が作ってくれた。それから松陽も作り始めて俺の周りは雪兔だらけになった。ちよつと寒い。

今日は雪兔と二人で決定だ。

77日目

昨日訪れた町に吹雪が来たので動くに動けない状態だ。しかし、都にいた頃にはこんな吹雪くといつも雪女だと喚く奴がいたな。嘘だと思っていたら本当に雪女が吹雪かせていたから驚いた。

雪があつても風が強くて目を開けていられないので今日は一日ずっと部屋の中だ。二人は火鉢の周りを動こうとせず、段々溶けていくのは餅みたいだ。

今日は二人の餅状態。

85日目

児童といつても差し支えない位に二人は大きくなっている。近頃は率先して絵の売り子をしてくれたりしている。

意外と連れてくれるのは虚だった。が、大抵何かと言っては二人に触れようとする輩ばかりなので足蹴にしてからお引き取り願っている。もう少し自分を大切にしてくれ。

男色やら稚児自体、都でも普通に横行していたからどうとも思わんが、種無しになる位の覚悟はあるんだろう。

88日目

大きく匂いもそれほど生臭くない蟹があつたのでつい値切つて買ってしまった。鍋を四次元ポケットから取り出して蟹鍋にすることにした。

都：京の老舗店で仕入れて四次元ポケットに保存しておいた豆腐に、白菜、かまぼこ、えのきなどを入れて、調味料のみりんや醤油に出汁、香りつけに袖を一欠片入れて一緒に煮込む。

鍋物は煮込むだけで良いが、素材の良し悪しが鍵となるのでそこだけは気を抜いてはいけない。

鍋のメは何が良いかと聞いたら「雑炊」に「うどん」だった。見事に分かれてしまい、二人が言い合いになったが残りの汁を半分ずつ分けて雑炊とうどんを二人に出した。自分の分はうどんも雑炊も取っておいた。うん、蟹出汁美味し。

今日は鍋で言い合う二人を描いた。またそれで言い合いになった。

93日目

新年が始まった。新年の行事は面倒だった。一族総出で周りに見られるのは恥ずかしいものがある。あんな奴らと同じ血が流れているとは思いたくないが、他人から見れば結局同じ穴の貉なのだろう。

先日蕎麦を打ったおかげが、二人が慣れないながらも雑煮を作ってくれた。出汁もへったくれも無い湯の餅だったが、何となく美味しく感じた。雑煮が不味いのはどちらの責任かで二人は揉めていたが、まずは出汁を取ることから始めろ。

今日は不格好な雑煮と二人を描いた。新年早々目出度いことばかりだ。

95日目

二人の髪を結うのはなんだか楽しいものだ。上の方で結び、歩いては揺れているのを見るのも楽しい。

目出度いことに空を鷹が飛んでいた。あれは初夢で茄子と富士を合わせて見たら縁起が良いという類のものだったか。

今日は鷹。勇ましい姿だ。

96日目

二人の背丈がぐんぐん伸びる。最近ずっと膝やら関節やらが痛いらしい。結局は俺が二人の心臓を分けた時の姿に戻るんだろうとは思うが、それはそれで癪だ。

新年とだけあって家に引き籠もっている連中が多いのか、町の人通りは少なかった。

今日は人気の無い市場だ。

97日目

最近二人が何かを歌っている様子だ。青い魔法のランプの精と盗賊の男が友人になる話に出てくる挿入歌らしい…が…。

いや待て！それ以上歌ったら消される！あの利権だらけの黒いねず
―（ここで文字は途切れている）

100日目

新年から七日目ということで七草粥を作ることにした。今では無病
息災やら正月の料理で弱った胃を慰めるための料理とされているら
しいが、確か実際は百歳を超す親の若返りを願った話だったと思う。
酉の刻から一刻順に芹、薺、御形、田平子、仏座、菘、清白を合わせ
て東の方から汲んでくる清水で煮て食べる…だったか。今では簡略
化されて色んなアレンジがされているらしい。市場にもインスタ
ント七草粥とやらや、七草をまとめて売っている物があった。

調理も簡単なので二人を交えながら作った。やたらと具材が大き
かったが及第点としよう。

今日は七草粥を作る二人を描いた。微笑ましい。

102日目

松陽がオートマタ派ということが発覚し、更に虚がゲシユタルト派と
いうことが発覚した。

言い争いになったが、結局三シリーズ分やってDODをやるというこ
とに落ち着いた。

だからコントローラーを離すな。まだ新宿が残っているじゃないか。

今日はエンディングを見て苦しむ二人を描いた。ははは。

105日目

護身用に何か武器でも持たせて欲しいと二人から相談された。

正直そんな事態になって欲しくはないが、俺の預かり知らぬ所で危険
な状況に巻き込まれて抵抗する手段が無いのもまた…。

松陽からは木刀、虚からは暗器の融通をお願いされた。

二人に人を殺すような真似はして欲しくないというのは俺の我が儘
だろうか。取り合えず虚の暗器は首を横に振っておいた。確実に殺
る気だろう。

今日は鴉を描いた。旅先でよく見かけるが、もしかして朧が見ている
のだろうか。奈落の頭領には鴉を操る術の習得が必須とは虚の言葉
だったか。

114日目

餅を買って焼いてみた。きなこ、黒蜜、抹茶粉、醤油、大根おろし、ポン酢、餡子らを用意して好きに食べさせた。

松陽は甘いほうが好きで、虚は塩辛いほうが好きらしい。

餅というのはハレの日位でしか食べられなかったのに、今や正月となるとどこでも売っている物になっているから驚きだ。

118日目

二人の身長がとうとう俺の眼下まで迫ってきている。み、認めんぞ…。

だが感慨深い物がある。成長すること、それは喜ばしいことだ。

虚の人嫌いもマシにはなってきたと思う。人に肩をぶつけられなくても殴り返せるから大丈夫だ。

本日は成長した二人を描いた。段々男前になってきているな。

119日目

あれから考えたが、二人に木刀を持たせることにした。それを竹刀袋に入れて持ち運べる様にすればどこかの道場の門下生らしく見えた。

それから、松陽には無暗に人を殺すようなことは止める様に諭された。以前やった天人の船での殺戮が効いてしまったようだ。珍しく虚も松陽と同意見だった。

好き好んで殺している訳ではないが、二人の言葉を無視するのも苦しい。

…ので、約束をした。必要以上に殺さないこと。こんな年になってまで約束とはな。一体この約束はいつまで持つのだろうか。二人が生きている間は守って生きていたい。

125日目

節分だった。鬼は外、福は内と豆を投げている様子が見えた。

こっちは鬼も福も内に呼んでやるという意気込みで鬼が人を食べている絵を描いた。普通に間違えた。

案の定「それ人食べてるから駄目じゃないですか」と指摘されて、人と鬼が互いに豆を投げ合っぐるぐる回っている絵を描けば二人が笑った。

ほら、別に豆なんて恐ろしくないだろ。お前たちは人なんだから。

128日目

山の道端で福寿草が咲いていたので描こうと思つてスケッチブックを開けば、それが最後の頁だった。後で買つておかねば。半分ほど二人の似顔絵だったり立ち姿だったので見られたくないと思つたが虚に持つて行かれた！松陽にも見られたので終わった。

今日は…、星を見つめる魚のパイを描いた。遠い西洋の国ではこれが食べられているらしい。何という名の魔境なのだろうか。

136日目

そう言えばよく春画を描いてくれないかと言われることがある。描けないことは無いが、あまり描こうという気力も無いので言われたら描く程度にはしている。金払いの良い客が鼻血を出しながら帰つて行つた。奥方にバレて没収されないようにな。

今日は美人画を描いた。そう言えばあの爺も美人画と春画は喜んで描いてたな。

139日目

今日も雪が降っていた。やっぱり首が痛い。年か？いや、そんな生易しいものではない気がする。戦場にいた時は一切思わなかったのに。今日は雪景色を背にだらける二人を描いた。幸せそうで何より。

143日目

変な天人に絡まれた。薬でもやっているのか、正常に話せていない様子だった。最近天人による犯罪も増えてきている様だし、やはり天人は殺すべき。

だが、人間に良い奴悪い奴がいる様に、天人にもその区別はあるらしい。経営主に叩かれながら、町中で鼻を赤くしながらマツチを売っている天人を見たらそう思った。折角なのでマツチを一つ買った。

今日はマツチ棒がくねくねと踊る絵を描いた。二人に病気にでもなったんじゃないかと心配された。失礼な。

147日目

黒い塊を売る祭りやらがあつた。その名もチョコレイト。チョコレイトかもしれない。

松陽が片っ端から食べようとするので制限を付けてから送り出した。今日はバレンタインデー？らしく、このチョコレートを買っては好きな人、ひいては世話になった人に送るといふ趣旨の祭りだったらしい。俺も二つ買って二人に贈ったら贈り返された。考えていることは同じだったようだ。

今日はチョコレイトを頼張る二人を描いた。

151日目

もう弥生か。寒かった冬から段々と気候が暖かくなり、植物も花開く時期だ。通りがかった里では見事に桃が咲いていた。それから流し雛をやっていた。誰でも参加できるようなのでやっておいた。この程度の形代では俺の穢れは払えんだろうが気休めだ。

今日は流し雛をする町並みを描いた。着色してないが、速攻で売れてしまった。

154日目

最近絵師だと言う奴らが難癖を付けにくる。何となく気配を察知して二人に町中を歩かせて会わせない様にしてはいるが、今回の奴は中々にねちっこかった。途中から流し流し聞いているとどうやらあの爺の弟子の一人らしい。

絵柄をパクっただけの複製しやがっただけの抜かしおった時に二人は戻ってきた。そいつは強制的に退場させられた。

あの爺は弟子同士で争うことなんて望んでなかっただろうに。どうしてその意図すら汲んでやれないのだろうか。

今日は木蓮を描いた。

159日目

絵を売ってはいるが絶対に非売品にしているのは二人の絵だった。何となく他人に見られるのは無理だ。

いくら金を積まれようが非売品。そう非売品ったら非売品だ。

二人の絵を個人的に見直している最中に目を付けられてしまった。天人の星の皇子？とやらだろうが売らない。そう言ったら侮辱罪だのなんだの隣の髭が言ってきた。そもそも寄越せというのが気に入らん。何か気の抜けるような声を出しおって。

161日目

虚から何故絵を描くようになったのかと聞かれたのであの爺のことを話した。

その一瞬を切り抜く、魂を写し取るというのは描いていて本当のことだったと今なら感じる。

形容しがたく、だが確かにそこに在る物。二人に内在する輝き。これは言語化するのが難しいといった南斉の気持ちも分かる。

今日は二人。最近凜々しくなってきた。最初の頃からよく成長したものだとしみじみと思う。

176日目

今日はホワイトデエらしい。あのバレンタインデエと対になる日で、バレンタインデエで女性からチョコレイトを貰った男はこの日に返礼しなければいけないらしい。

ということなので再び二人にチョコレイト：ではなくクッキー☆なるものをあげた。喜んでいる様子で何より。

今日はホワイトデエで浮かれる町を描いた。

178日目

そう言えば今日はあの爺が俺の絵を描いて亡くなった日だ。

あの爺と会った町から今の場所は離れているから墓参りには行けないが、今日は鮮魚の塩焼きにでもしよう。

夜中に松陽がやってきた。丁度あの爺に描かれた絵を見ている途中だったがすぐさま隠した。暫くして虚もやってきて俺の部屋で寛ぎ始めた。自分の部屋でやれ。

今日は爺を描いた。食事の準備中にやっていたあの奇妙な踊りの場面だ。二人にも変な踊りだと言われているぞ。

179日目

そろそろ旅も一旦落ち着こうと思うが、どこにしようか迷っていた。弟子センサーとやらが働く松陽は江戸のかぶき町が良いと言う。虚も特に意見が無かったのかぶき町に住もうと思う。

今日は二人。大きくなったが、かぶき町は歓楽街。六時になったら帰ってくる様には言っておこう。

.....

.....

.....

.....

「師匠、いつもその本には何を書いているんですか？」

「ゲーム^通を起動した状態^常であれば今までの旅路^{セー}を記録^ブしたも^{デー}の…つまるところ日記だな」

「セーブデータ？」

「今はその機能を使っていない。普通に書いてただけだ」

「時折不可思議なことをおっしゃいますね」

和装本を閉じた。その本には『魂録之書』と題名があり、表紙には立派に咲いている桜の木が描かれていた。

元から四次元ポケット…懐に入っていた物だった。不思議と何度書いても紙の頁は補充されている。

「メタ発言だ。さて、いくぞ」

「ここから遠い場所でしたね」

「誰かが日本家屋が良いと言うからかぶき町付近にはなつたな」

「皆が同意したんですからそう言われる筋合いはないですね！」

不動産屋にて一括払いで購入したのは日本家屋だった。それなりに綺麗な場所であつたし、広々とした空間であつたので大きな絵も描けることだろう。

「そうそう、好きに外に出ても良いが六時には家に帰ってきていること。遅くなるなら事前に言うこと。」

それから危ない場所や路地裏にはあまり近付かないこと。分かつたか？」

「はいー」「はい」

「よろしい」

いくら昔はブイブイ言わせていた暗殺組織の首領と言えども今は

子供。危険なことに巻き込まれれば以前の様に対処できないというのは今までの旅で分かっている筈だ。

…人や天人がここまで入り乱れているのはターミナルというもののせいか。ここもここで色々問題が起きそうだと感じる。

「師匠、甘味忘れてませんか？」

「忘れてない。何を食べたい」

「あそこの本わさびを丸ごと一本なんていかがですか？アレにはお似合いですよ」

「おや、そう言う貴方には是非ともあそこのさとうきびでも食べて欲しいですね」

昔よりは騒がしくなった旅だが、別段鬱陶しくはない。後で本わさびを松陽に、さとうきびを虚に出そうと思いい財布を取り出した。

「西郷特盛 西郷てる彦 共に保血を退治す」

「なあ…四月の花見の時に一体俺は何をしていたんだ……？まったくあの時の記憶が無いんだが……」

「なんでもありませんよ。何も無かったんです」

「ボケるにはまだ早いですよ」

「年齢を言うにはお前たちもキツイ年頃だろ」

「師匠に比べればまだピチピチですので……」

「腹立つなあ……こやつら」

はて、一体本当に何があったんだ、とスケッチブックに書かれていた途中の絵を見て空木は思う。

最初は花見をしている人々の絵だった筈だが、スケッチブックが下に行くにつれて何かしら不可思議な図形を描いている。その時の記憶が空木にはめつきりなかった。

その両隣で事の顛末を知る虚と松陽は目配せした。いつもであれば何かと突っかかっては騒いでいる二人が結託している様子を見せるのは珍しいことだった。

（絶対に思い出させないように）

（それを言うのはこちらですよ）

というのも、三人で花見をしようという話になり、近場にあつた花見会場の桜を見ていた空木の口元に謎の黒い物質が入っただけのことであつた。

それは生産者からすれば卵焼き、しかし他人から見ればダークマターと恐れられる物質であり、それを食べさせられそうになった銀髪の侍が避けた先に僅かに口を開けていた空木がいただけのことだった。

そして空木が条件反射的に口に入った物を咀嚼し、常人より鋭い味覚によってダークマターの物質を感知し倒れた。それを側の二人が焦りながら家へ連れ帰り、空木が突然起きたと思えばスケッチブックに何かしらの図形を描いていた。

声を掛ける二人にわき目も振らずに一心に描く様子は異常であり、

とりあえず思い出させてはいけないと二人は感じた。

「…駄目だ。考えると頭が痛い、頭痛が痛くなる」

「言葉の使い方がおかしくなってますよ」

「ああ、うん………。少し外に出てくる」

「分かりました」

いつも以上に不健康な様子に不安を覚えたが二人は空木を送り出した。

そしてその日、空木は笠を着けずに外に出てしまっていた。

一一

「阿呆…。何故こんな時に限って懐にも手元にも笠が無い…」

空木にとつて日光は弱点であり、昔からの大敵である。どうやっても克服しようがない日に照らされながら空木は家にいた時以上にふらつきながら歩いている。

これでは気分転換兼絵の着想を得る以前の問題だ、さっさと家に帰りたいと思うがここまで来ておいて何も得られず帰るとするのは嫌だった。

「おいお前の父ちゃんオカマ〜」

「やい、このカマ野郎」

通行人の話し声から歩く音まで聞こえる耳に子供らしい野次を飛ばす声が聞こえた。旅先でも子供が子供を虐めるとい痛ましい光景はあつたなと思いつつ、その声のする方に空木は近寄っていく。

川辺の付近で二人の子供が一人の子供を虐めていた。受け身を取りつつ虐められている方の子供にぼんやりと視線を合わせ、空木に衝撃が走る。

（み、見えたっ！）

久方ぶりに感じた衝動に身を任せ、空木は懐からスケッチブックと鉛筆を三本取り出し、その内二本を虐めている子供たちの足元へ投擲した。先程まで感じていた怠さが嘘の様に軽くなっていた。

カカツ！と音を鳴らしながら鉛筆がコンクリートの地面に刺さつ

た。

「な、なんだよお前！」

「おい、アイツもカマっぼいけどヤバそうだ！逃げろ!!」

たつたつたといじめっ子がその場を走り去り、空木は血管を浮だたせながら鉛筆の回収と虐められていた子供に絵のモデルになって貰う為に近寄った。

「大丈夫だったか？」

「う、うん！あの…ありがとう！お姉ちゃん!!」

空木の血管がまたもや浮き出てきた。空木にとって女性に言い間違えられるのは地雷を踏み抜く行為だが、「子供の言うことだから」と念じて堪えている。

「お姉ちゃんではなく、お兄ちゃんだな。ところで名前は何だ？」

「西郷てる彦だけど…あの？」

「頼む、絵のモデルになってくれないか？」

「えっ、ええええええ!!?!」

「モデル料ならいくらでも出そう。頼む…!」

空木は必死な形相でてる彦の肩をがっしりと掴んだ。目の隈が凄く、一種の迫力のある人間に急に距離を詰められたてる彦はたじたじになっていた。

「母ちゃんに聞いてからでもいい？」

「構わない。早速君の母君に事情を話に行こう」

「あ…えと、母ちゃん色々と凄い人だけど…大丈夫？」

「大抵のことなら動じない。心配するな」

軽く会話を交えつつ、空木は開かれたスケッチブックの上で素早く手を動かしつつ、二人は歩いた。

てる彦がとある店の前に案内した場所。そこには『かまつ娘倶楽部』という、空木にとってはどこかで聞き覚えのある単語の看板が掛けられていた。

てる彦が店の扉を開ける。そこには世間一般から化物と呼称される類の者たち——オカマたちがいた。

「あらてる彦くん！おかえりなさい、つて…あらま！」

「いい男じゃなくいい！でも隈がね〜」

「あんら、てる彦おかえ……………」

オカマの犇めく並の中から一際背が高く、目立つ人物が現れた。銀髪を結い上げた髪に太ましい眉、立派な青い剃り跡のある西郷特盛が現れた。

西郷はてる彦の横に立つ人物を見た瞬間、固まった。

「てる彦少年、あのだ……………女性？が君の母君か？」

「うん、そうだよ。でもちよつと様子がおかしいや」

「あ」

「あ？…」

「ア、アア、アンタアア!!生きてたのねえ〜!!!」

西郷が上空を飛び上がりダイブする態勢になった。そつとてる彦と共にそれを避けた。

扉を突き破りながら西郷は地面に落ちた。

「マ、ママがあんな風になるなんて……………まさか恋人っ!!」

「いや、愛人かもしれないわっ……………」

「ママが大きな壁……………燃えてきたわ！」

「えっ?…」

「断じて恋人でも愛人でもないわ！邪推をするな邪推を！」

「そうよ。コイツはかまつ娘倶楽部設立の際に意見をくれた大恩人よ」

ぱんぱんと汚れを払いながら西郷が空木の前に立つ。そしてオカマもとい元攘夷志士だったメンバーたちが「えええ!?!」と驚愕した声を上げた。

「久しぶりね。どこかでおっ死んでるかと思ったら生きていたとはね、村雨」

「俺がああの程度の戦力で死ぬ訳が無いだろう、見くびり過ぎだ。それから今は村雨ではない、本名は空木だ」

「あらそう。とりあえず、アンタウチに何の用よ？悪いけど今は営業時間外、営業中に来てくれたらとつてもサービスしちゃうわ」

「そうだな…。君の息子のてる彦少年を絵のモデルにさせて欲しい」

「ふーん？戦争から手を引いた後は絵で生計を立ててるのね？意外だわ」

「失礼だなお前…。俺を何だと思っている」

「え、えつと…母ちゃんとき空木さん？は知り合いなの？」

オカマたちが「村雨」という単語を聞いてまた驚いている間に、てる彦が手を挙げながら声を出した。

「そうねえ…。昔、背を預け合った仲かしらね。ところでてる彦。アంతは絵のモデルになることについては良いのかい？」

「うん。全然いいよ」

「そう。てる彦がいいなら、私からは特に何も言うことは無いわ。しかも描いてくれるのがアంతならね」

軽く片目を瞑りながら視線を寄越した西郷に空木は内心安堵していた。

(思わぬところで”ええやつ”…いい人材を見つけられた)

四月に何があったかという疑問はとつくに消えていた。空木の興味は目の前のてる彦に行き、弟子二人の望むルートへ進んでいた空木であった。

「絵のモデルって何をやるの？」

「特に何も。普通に過ごして欲しい」

「え？」

「俺はモデルには特に時間を掛けさせない。ただ普通に過ごすがモデルの条件だ。俺は君に気付かれないように後ろにいる程度の空気がだと思ってくれていい」

「へえ…：なんか思ってたのと違うやり方だ…：」

「だろう？俺の師がそういう奴だったんだ」

今までとは違った穏やかさを含む声音で空木は言う。

「…ああ、気にせずとも厠や寝所までには押し入らない。そうだな、五時までは俺が見ているものと思ってくれ」

「は、はいー」

そして、空木のてる彦観察が始まった。

空木はてる彦を観察しながらも店の手伝いをしていた。とはいっても清掃や座布団を整えるくらいのことだ。

営業時間外、店の片隅で学校の宿題をするてる彦とそれを教えながら手元を動かしている空木という図は定番のものになっていった。

「ねえ、空木さん。ここの問題どうやって解くの？」

「それは先日の宿題とやらに出ていた問題の応用だな。その公式に数字を……」

「アイツも牙が抜かれりゃあんな穏やかになるもんなのねえ」

「あんな穏やかになる君に教えてる人が村雨なんて…信じられないわ」

かまっ娘倶楽部の従業員は大抵が攘夷戦争に参加していた者たちだった。攘夷戦争中では村雨は単なる気象の名称を指すのではなく、とある一個人を指すということを知っていた。

そこにいれば血の雨を瞬時に振らせ、ふらりといつの間にか何処かへと消えている。第一次攘夷戦争にも、第二次攘夷戦争にもその名前は轟かせた攘夷志士。

現在は過激攘夷派浪士と指名手配はされているが、その張り紙に書かれた絵は笠を被った人物ということだけ。指名しようにも村雨は偽名の可能性が高く、特徴といっても日本人には多くいる黒髪ということだけ。

そんな人物が今目の前で穏やかに過ごしている。半ば信じられない心地なのが半数、ギャップにやられた従業員が半数といった風に分かれていた。中には村雨時代からのファンも含まれている。

空木自身、知覚していないが意外と村雨に窮地を助けられたという人物は多かった。

「アイツもようやく居場所つてもんが見つかつたんだろうよ。戦い以外の、アイツの居場所が」

正体不明とされている村雨について、西郷は通常より多くのこと知っていた。

西郷の妻が死去し、自分が息子の母親代わりにならなければならぬという思いが極地に至り、装いと口調を極めたまで良いものの、世間のオカマに対する視線が今よりも酷く冷たい物だった。

戦時中は装いもへつたくれも無かったが、そんな事情を含みながら西郷が活躍していた時の、ほんの少しの間のことだ。

夜通しで戦場を見つめる空木に声を掛けたのが、二人の些細な交流の始まりだった。

『アンタ、寝ないのかい?』

『寝るよりは戦場を見つめる方がマシだ』

『いつか体を壊すわよ』

『その程度では壊さん、普通より丈夫だからな』

『アンタ、オカマについてどう思う?』

『オカマ:~?』

『言ってしまうば、男だけど女の装をする奴のことさね』

『:ああ。性別が逆という類の話か?特にどうとも思わない。好きに生きてらいいんじゃないか。』

男も女もそう大差変わらない、斬ってしまうばただの肉だからな』
『物騒な言い方ね:。でも:そうね、アンタみたいに肯定してくれる人もいるのね』

『ねえ聞いてよ村雨エ!案外私らみたいな気高いオカマが多いって知ってたア?』

『知らんが』

『それで、私らで店を開こうって話になったんだけど:~:~:アンタも来るかい?』

『俺はオカマじゃないんだが:~:、断る。今の俺はここが居場所だ』

『:~:そう、アンタはまだここが居場所なのね。もう兵も疲弊しきっているのに、アンタはいつまで立っているつもりかしらね』

『戦争が終わるまではここにいる。元々兵なんぞ集ったつもりも無

し、疲れたなら抜ければいい。

お前たちには行く当てはあるかもしれないが、俺のような者には無いからな』

『そ。じゃあ私らが開く店、かまつ娘倶楽部、に来てくれたらたつぷりサービスするわ。——アంతタの居場所もね』

日ごと、兵が寝静まる夜に二人は些細な会話をしていた。

深編笠を被り、顔は見えずとも笠の編目から覗く目は西郷に焼き付いていた。笠を外して会うのは初めてであったのにも関わらず、空木と村雨が結びついたのもその影響が大きい。

あの会話以降、西郷は攘夷戦争から手を引き、気高きオカマの魂を持つ侍たちを率いてかぶき町に店を出した。

「村雨…空木様がフリーなのも分かったからね、じゃんじゃん攻めていくわよ！」

「アイツを攻め落とすには何十年も掛かりそうだがねえ…ま、がんばんなさい」

「「ママア!!」」

本来ならば男同士の恋愛なんて茨の道。しかし、ウチの従業員が空木を落とせば強制的にかまつ娘倶楽部の戦力増強になる、気になる女装姿も見れる、アイツの居場所を作れる、そして懐いてる彦も笑顔になる。

一石四鳥じゃあないか。

にやりと含み笑いながら西郷はてる彦と空木を見つめていた。

一一

ツラ子は白い色紙を取り出しながら空木に差し出した。

「あの、すみません。ツラ子ちゃんへって、サイン書いてくれませんか」

「今忙しいから無理……どうしたてる彦少年」

「クツ、なんてそっけない……何としてでも手に入れてみせるぞ、村雨殿のサインを——」

村雨、と叫んだ瞬間ヅラ子へ鉛筆が飛んだ。

「何やってんのアイツ等」

「あらパー子。あれはいつもの光景よ。ヅラ子が入ってきてから空木様のサインを手に入れられるかって騒いでいるのよ」

アゴ美に説明を受けたかまっ娘倶楽部の新人、パー子は脳内に疑問符を散らした。

「説明しよう。村雨」

「またもやヅラ子へ鉛筆が飛んだ。」

「——空木殿は我々攘夷志士の大先輩に当たる方だパー子よ」

「ナチュラルにパー子呼び止めろ」

「俺は戦時中に助けられた身でな。あれ以降行方が知れなかったが……まさかこんな所でお会いするとは俺も思わなかった」

「いやあの姿……」

パー子は四月の頃に行われた花見を思い出した。

「確か自分が避けた時にお妙のダークマターを不幸にも食して気絶していた奴じゃなかったか？」と。

その後どつかで見覚えのある双子が連れていったが、それ以降姿を町でも見かけないから不謹慎ながら死んだ物だと思っていた。

「へえ……」

いくら熱烈に説明されても、西郷への一言でここへ強制的に入れられたパー子にとっては興味の湧かない話題であった。

——

外が暗くなり、かぶき町が眠らない町として目覚める頃、空木邸では話し声が響いていた。

「そういうえば師匠。私たち最近身長伸びが止まっているんです」

「赤飯を炊こうか！」

「そういう問題じゃないですよね？なんで祝おうとしてるんですか？」

「いや……お前たち、今が一番輝いているからな……。このまま大

人になるというのは少々もつたいないというか、俺としても不本意というか……。まだ半年くらいだぞ、まだ半年しか成長記録が書けていないんだ……。まだ足りんぞ……。空白の頁が幾つあると思ってる？どれだけ俺がお前たちの成長を楽しみにしていると思ってる？それなのにもつと長くお前たちの幼少期を楽しめるだど？まさに祝い事ではないか……」

「長く生きてると、師匠でもどこか壊れたりするんですね」

「この場合、私たちを真つ二つにした時からではないですか？」

「ごほん、と空木は大きく咳払いをした。

「とにかくだ。成長しなくても心配するな。なんならそこで止まってくれても構わない」

「どうとう言いましたね!？」

「成長したら存分に見下ろしてやりますからね!」

「ははは。童が何かを言っているようだな。俺は絵を描く作業に戻らせてもらうぞ」

大広間でぶーぶーと文句を言う二人を背に空木は私室へと向かった。

いつもより空木の気分は上々だった。昼の頃に、絵のモデルにしていたてる彦の一際輝く瞬間を捉えられたからだ。

父親のことを複雑に思いながらも、父親への理解と愛が勝った少年。子の窮地を救おうと、昔懐かしの白ふんの西郷と呼ばれた装いでやってきた父親。

目を焼く輝きがそこにはあった。魂を通す二人の侍がそこにはいた。

輝きを見たいが為に少し危ない目に遭わせてしまったのは申し訳ないと思つた空木だったが、その分のモデル料を上乘せするつもりだ。

弟子二人を置いて来た部屋の中で一人、頬を緩ませる。

「いつになってもああいふ父親というのは、羨ましいものだな」

絵の着色も完了し、細筆で必ず名前を書くことを忘れずにやる。

そこには勇ましい父親と子の姿が描かれた絵があった。

「てる彦少年、これが絵のモデル料だ」

「ちよ、ちよつと待って！こんなに貰っていいの？」

空木がてる彦へ渡した茶封筒には諭吉が十枚入っていた。

「ああ。ほんの少しの詫びの気持ち、それから良い物を見せてもらったからな」

「や、やっぱ見てたんだ…」

「その節はすまない。やはり窮地にこそ真価というのがよく見えるものでな」

あはは…、と苦笑いをするてる彦であった。「ああそうだ」と、空木が懐から絵を取り出した。

「これが出来上がった絵だ。拙作だが受け取って欲しい」

「僕、こんなかつこよく見えてました？」

「ああ、父子共に、とても勇ましい侍だ」

「そつか…。ありがとう、空木さん！また会おうね！」

「うむ。機会があればまた頼むぞ」

「依頼主の絵：とにかくエロい姉ちゃん描いてくれ」

人混みが苦手である虚はよく早朝に町を歩き回る。この時間帯を歩くのは夜遅くまで飲んできた酔っ払い、水商売から帰ってきた人間、そしてホームレスくらいしかないないので、無駄な人通りの無いこの時間を虚は気に入っていた。

松陽はよく昼から歩き回ることが多いが、その時間帯にくると虚は家に籠り、日中絵を描く師の傍にすることが多い。

暗器は無理だがと空木に言われ、護身用にと持たされた竹刀袋に包まれた木刀を常に背負い、虚は恒道館道場と木製の札が立てかけられた道場で立ち止まった。

「このような場所に道場があるとは」

今の時分、道場なんぞはあの狸に仕えていた柳生家の流派くらいしか生き残っていないと思っていたが、場末では細々と生きている道場もあるらしい。

物珍しさから立ち止まった程度の興味だったが、それもすぐに失せ足を動かしその場を去ろうとした。

「あら、こんな時間に入門希望者かしら？」

丁度、スナックすまいるから帰ってきた志村妙にその姿を補足されるまでは。

入門希望者（仮）を見つけたお妙の動きは素早かった。仕事で疲れている筈だがそんな様子を一切見せず、あれやこれやと虚を言いくるめた。虚が何か一言を言う前に二、三言返し、その細身の腕から出されているとは思えない腕力で虚を引き留め、その腕から逃れることも出来ないまま虚は道場の入り口へ案内された。

そしてその中からは誰かの息継ぎと何かが空を切る音が規則正しく聞こえていた。

「丁度この時間だと新ちゃんが鍛錬しているの。良かったら見ていて。はい、これマカデミアアンナツツチョコ。」

「新ちゃん！入門希望者よー！」

虚にどこからか取り出したマカデミアアンナツツチョコを一粒渡し

たお妙は道場の中で木刀を振るっている新八へ声を掛けた。その間に虚はマカデミアンナツツチョコが溶ける前に口に含んだ。口の中で広がる甘さに顔を歪ませながらチョコに包まれたマカデミアンナツツを細かく噛み砕いていく。

お妙の一言で道場から聞こえていた音が一瞬止まり、ドタバタと慌ただしく地面を踏む音が聞こえてくる。

誰も入門するなんて言っていないと心の中でツツコみながら、虚は片方の眉を上げた。それを言っても無駄なことというのは先程の数分で分かったことだった。

「あ、ああああ姉上!?!こんな時間に入部希望者なんて本当………本当にいるウウウウ!!」

「新ちゃん将来の門下生の前でうるさいわよ」

「だから入るとは言って「何か言ったかしら?」………」

「ハッ、それもそうですね」

こほん、と一つ咳払いして新八はお妙に連れられた虚を見据える。

「まずはここ、恒道館・天堂無心流の門下生となるなら僕と一試合してもらおうか!」

「…はあ」

「では、私が立会人をしますね」

そこでやつとお妙の腕が離された。ここで逃げてても良いが、目の前でニコニコと笑うお妙のポテンシャルは計り知れないと考え、その試合を引き受けることにした。ひとまずは事を終わらせてそのまま逃げようという算段だ。

背負った竹刀袋から一本の木刀を取り出した。虚の師である空木が枇杷の木を伐採して自ら作製したこの世に二つだけの逸品だ。壊れた場合は空木に言えば木刀は作製してもらえるが、虚も松陽も手入れをこの木刀の手入れを欠かしたことはない。

竹刀袋を磨かれた道場の隅に置き、使い込まれた跡を感じる木刀を構える新八と目を合わせ、虚も木刀を構えた。

二人の準備が終わったことを確認し、お妙は手を振り上げた。

「それでは、始めっ!」

その手を振り下ろし、声を張り上げた。

「まずは君から来ていいよ」

余裕を含ませた声で新八は告げた。新入り、しかも同年代くらいの人だと見て侮っているのがありありと分かる。

例え、今は天道衆奈落の頭領をしていた頃より身体能力が落ちているとはいえ、五百年ほどに及ぶ経験までが消えた訳ではない。

恐れも知らず、そんな自分へと向けられた言葉に微笑みを零し、虚が動いた。

分かりやすく型を取り、一回で片を付ける為、強く床を踏みしめ新八の元へと距離を詰める。

(突き技か。でも対処法が分かれば……！)

そうして続けることも無く、新八の声が途切れた。そして背に大きな衝撃を受けた。

新八が虚の木刀を避ける前に、その木刀によって壁まで飛ばされたからだ。

カハツ、新八の口から空気が漏れ出る音がした。動く前までに見えるた型は突き技だ、しかしその後、距離をどうやって詰めたかまでは見えなかった。…速い！

一瞬の早業に、立会人をしていたお妙は目を見開かせた。「新ちゃん」と出そうになった声と支えようとした動作を咄嗟に抑えた。今の私は試合の立会人だ、志村新八の姉としての態度は見せるべきではない。

「い、一本……！」

お妙が声を震わせながら試合の結末を言い放った。

格が違う、立ち振る舞いも、その手に持つ刀を握ってきた年数も。それらを新八は感覚で悟った。

目の前に立つ人物は銀さんよりも小さいのに、自分と同一年位である筈なのに、このプレッシャーは何なんだ。

得体が知れない、と新八は身を震わせながら目前で見下ろす虚を見上げた。

その様子を見つめる虚は言い放つ。ここではない、遠くの未来で銀

髪の侍に言い放った言葉を。

「——君の剣は私には届かない」

虚が最も忌み嫌う男を感じさせざる笑顔で、木刀を降ろした。

「……す、凄いい！」

はて。虚は今見下ろしている少年が何と言ったか聞こえなかった。

あれだけ脅した筈なのに、最初は怯えを見せた筈の瞳が何処か眩しさを感じさせながらこちらを見上げてきた。

「ははっ！いやー、負けちゃったな……。君、凄く強いね。……って、そう言えば名前聞いてなかったね」

「…虚」

何を言っている？何故負けた筈なのにそのように笑っている？その理由が分からずとも自分の名前を出した。

「そっか、虚くんだね。恒道館の当主として君のような人が入ってきてくれるのは嬉しいな」

「いえ、私はその女性に無理矢理連れてこられただけなのですが」

「えっ」

「そして道場に入るつもりも毛頭ありません」

「ちよつと姉上……。どういうことですか？」

「あら、ウチに入ってくれる子だと思って案内しただけよ。それにマカデミアンナッツチョコを食べたからにはもうウチの門下生です。文句は認めません」

「しまった。食べてしまった……！」

「いや門下生ってマカデミアンナッツチョコでなれるモンじゃねーからアア！」

道場に入る前の己の行為を悔やみながら、虚は竹刀袋の元へ寄り、木刀を納めて竹刀袋を背負った。

「すみません。ウチの姉上が……。あ、でも門下生は無理でも講師として来てくれませんか？」

「どうしてそんな話になるんですか」

「いやだって強いし！カッケエし！」君の剣は私には届かない”って
！もう痺れますよ！弟子にして欲しいくらいです!!」

「絶っつっつ対にお断りします」

弟子というと私塾を開いていた松陽の顔がチラつき、虚は凄く嫌な
顔をして即座に断った。

付き合っていられないとばかりにこの道場から出ようとして、入り
口へ戻るのも面倒なので縁側から塀を飛び越えようと敷地を踏んだ
時だった。

足元でピツ、と音が鳴った。

「あ、待って下さい！帰るなら玄関から——」

ドゴオオオオン!!

新八の制止虚しく、恒道館に設置されていた地雷が爆破した。

一一

「おかえり。…その頭はどうした」

「最近の道場って地雷が張り巡らされているらしいですよ」

「それは物騒だな。さっさと風呂にでも入って着替えておけ」

空木邸に頭がアフロになり、服に汚れを付けた虚が帰ってきた。居
間で寝そべりながら寛いでいた空木は虚に浴場へ行くよう促した。

今この場に松陽がいたら鼻で笑っていただろう、そしてそれを虚が
取っ掛かって言い合いになるだろうなと思いつつ、昼飯のメニューは
何にしようか考えを巡らせた。

カア、と敷地に植えた木に止まる鴉が一鳴きしていた。

「……そうだな。今日は涼し気な料理にでもするか」

冷蔵庫に何が入っているか確認する為、空木は立ち上がった。

一一

依頼で町中を歩く銀時に遅れてやってきた新八が隣を歩きながら
遅れた理由を話していた。

「…つてことがあったんで遅れました。すみません」

「いや、それどう聞いても門下生がやってきた話じゃなくて無理矢理お前の姉貴に連れてこられた可哀想な被害者の話だろそれ」

「ともかくとても強かったんですよ。同じ年位なのに凄かったなあ…！」

「へーへー」

先程からその人物についての話しかしないことに銀時とその少し後ろを歩く神楽は辟易していた。

「そうそう。あつ！あの甘味処にいました！おーい虚さー！ん！」

”虚”と呼ばれた髪を頭上で一本に縛られた人物が団子を食べながら新八の方を見て、小首を傾げた。

何故かその姿が昔にいなかった人物をふんわりと連想させた。

(…?)

銀時は目を擦って、その人物を見た。先程見えたイメージは消え、新八と同じ年位の少年が団子を食べている。

疲れてるのかもしれないと思い、銀時は今夜居酒屋に行くことを密かに決定した。

「朝振りですわね！」

「??？」

団子の二つ目を食べようとしていた松陽が疑問符を散らした。今目の前で親しそうに声を掛けてくる新八とは面識は無い筈だが、新八は面識があったように話しかけてくる。

それに「なるほど」と時間が経ってから答えを出した松陽が団子を飲み込んだ。

「いやあ、すみません。私、虚じゃなくて松陽って言います。虚は私の弟ですよ」

「えっ!? そうだったんですか?! い、いやー! すみません! 間違えてしまつて!!」

「そーいやお前、花見の時に誰か運んでなかったアルか?」

「おや、そういう貴方たちは…?」

「私らは何でもやる万事屋ネ。今は依頼で絵師を探してるアル!」

松陽の中で虚が「違う！私の方が兄だ!!」と言い張っている姿が見えたが、松陽は知らない振りをした。

新八は人を思いつきり間違えたことに顔を赤くしながら松陽を見た。よく見れば、目の前で松陽と名乗った人物は前髪が下ろされている。朝方出会った虚は前髪を上げていたが、降ろしたら目の前の松陽みたいな姿なんだろうかと新八は現実逃避のように考えた。

一方、銀時は眩暈がしていた。

何故か自分の師匠の面影を感じる少年がいて、名前もそっくりそのまま。どういうこつたよ……と内心混乱して会話に混ざれずにいた。

「しよーよー、お前こころ辺で腕のある絵師とか知らないアルか？」

「絵師…、絵師ですか？」

「そうなんですよ。僕たち、今依頼で絵師さんを探しているんです」

「心当たりありませんが……案内しましょうか？」

「あっはい！」

「やったネ！思わぬ当たりネ！たまには新八も役に立つアルなー！」

「何その僕がいつも役立たずみたいない方止めてくれる!？」

「団子を食べ終わるまで少し待つて下さいね」

「ああ、いえいえ！そんな気にしなくて大丈夫ですよ！ゆっくり食べてくださいー！」

「優しいんですね。ではゆっくり食べさせていただきます。…あ、折角なので虚が何をしていたか聞かせてくれますか？」

「はいー！」

新八が朝にあったことを話し、それを松陽が微笑みながら聞いて団子を食べている。赤い布が掛けられた縁台に座る松陽の隣に神楽が座って酢昆布を食べている。

松陽が食べ終わった時にようやく銀時は状況が整理できた。

今日の前にいる人物が——吉田松陽の子供であると。

銀時は松陽の過去をあまり知らない。過去について話してくれたのは、かつて自分にも師がいたことを一回ポロっと喋ったくらいで、それについての追究や以前はどう過ごしていたかなんてことを聞いても笑って竹刀ではぐらかされていた。その時は俺だけじゃなく、ツ

ラや高杉もいたがそいつらが問い詰めても答えは変わらなかった。

だからだ。自分が父の様に思っていた——今も思っている——人物が意外と遊び人だったという事実を受け入れるのもアイツの弟子として、目の前にいる実子には悪いがアイツに引き取られて育てられた息子の定めつてもんだらう、と思考に区切りがついた。

どこかで松陽が「違いますよ！それ私本人：今は言っではいけないんです！」と自分が引き取った子供の勘違いに涙している姿が見えた。

「よし、じゃあオメーの言う心当たりのところに案内してくれねえか？」
「ええ、もちろん」

己の弟子がそんな勘違いを引き起こしていることにも気付かず、松陽は大きくなつた銀時の姿に目を細めた。

一一

松陽は空木邸のインターホンを鳴らした。が、そこは自分の家でもあるので扉を開けて入っていく。

「どうしましょう銀さん。滅茶苦茶格式高そうなお家なんです。菓子折りの何かでも持つてった方が良かったんですかね」

「ば、馬鹿野郎お前。こういうのはビビつたら終いなんだよ。いぎつて時は神楽の酢昆布を渡すからいいんだよ」

「嫌アル！この酢昆布は誰にも渡さないアルよ!!」

「あの一、皆さん？お構いなく入ってきていいんですよ？」

「あの一、入って…」

冷や汗をかきながら門前で躊躇っている万事屋を代表し、新八が平然とした様子で門を開けた松陽に問い掛ける。

「ここ、私というか引き取ってもらっている師匠の家ですから」

「師匠？つてことは松陽も絵師アルか？」

「いいえ、違いますよ。絵師は私の師匠ですよ」

「…いや、絵師が師匠でお前が師匠つて言っつてんなら絵の師匠つてことじゃねーのか？」

「違いますよ、絵じやなくて人生の師匠ですね！」

「へえ…人生の師匠ですか……」

「紛らわしいアル」

「先程から騒がしいぞ松陽」

門前であたふたしている万事屋一行と松陽に声が掛けられた。

眉を吊り上げながらやってきたのは虚だった。

「やあ、ただいま虚。師匠は家にいるかい？」

「師匠は私室で絵を描いてらっしゃる……げ」

「虚さん！朝方ぶりですね！地雷は大丈夫でしたか…つて聞くまでも無いですよね…。すみません、最近ウチにパンツ泥棒がやってきたもので、その防犯で……」

「…ああはい、特に気にしていませんので。ええ」

だからその話題を松陽の目の前で出すな、と語気を強めながら念じた虚だった。それを聞いている松陽は何を考えているか分からない笑顔で虚を見つめていた。

「松陽、こいつらは？」

「絵師を探しているというので、師匠を紹介しようとしていたんですよ」

「ふうん？」

そうして会話する松陽と虚を目にして、再び銀時は衝撃を受けていた。

——まさかの双子かよオオオオ!!! アイツ何ほっぽって俺を引き取りやがったアアアア!!!

知らない内に身に覚えのない所業が加算されていく松陽はそんな銀時の内心を知らず、万事屋を師匠である空木の元へ案内する。それに何故か虚もついていっていた。

居間を抜けて、三部屋通り越す。そうして、空木の私室へと辿り着いた。その戸は閉められていた。

「師匠、今良いですか？」

「構わんが…その人数は何だ？」

作業を中断した空木が戸を開けてぞろぞろと連れ立っている万事

屋メンバーを見た。

「あのうー…絵師が本業だったんですか？僕、てつきりあそこの従業員かと……」

「…まあ、そうだなパー子とやら。俺はあの店の営業とは一切関係が無い。で、何の用だ？」

どこかで見覚えのある人物が目の前に現れて、またもや銀時はパニックになった。

—

「なるほど、都鳥という絵師の絵が欲しいとな」

「は、はいい。そうなんです。あのうう、こう絵師の人脈というもので連絡できる手段とか無いでしょうか」

「そうヨ、みや…、み〇ねたかし出せやオラア！」

「神楽ちゃんそれ違う絵師の人！僕ら丸っこくなっちゃうし！名前も軽率に出しちゃいけないよ!!」

妙にへりくだる銀時に疑問を覚えながら空木は虚の出した茶を飲む。ほどほどに熱い温度だ。

茶を入れるのは美味くなったなど一人感心していた。

「…で、依頼料は？」

「…へ？」

「依頼料はいくら払うんだと聞いている」

「いや、紹介してもらえないかって話なんですけど…」

「俺がその都鳥だ。俺に絵を依頼するなら依頼料を払ってもらわねばな」

「…ええええええ!!」

驚く様子におやおやと微笑むのが松陽、五月蠅いとばかりに睨むのが虚。

「当たり前も大当たりだったアルな！」

「やったあ！これで依頼料が大量に手に入る！」

「あの一、依頼料ってどのくらい、ですか……？」

言えば言うほど小さくなる銀時の声に空木はうつそりと笑う。

「まずは値段を提示してみろ」

「え、えー？今話題の旅絵師だから…ひいふうみい、…よし。三百円だなー！」

「馬鹿にしているのか!?!」

思わず値段の安さにツッコんだ空木だった。今まで提示されてきた値段より最低でもゼロが一つ少ない値段を提示され、空木のプライドが傷付く音がした。

「いやー、だって、ねえ？話題に上がってるだけで意外と下手って可能性もあるもんなあ?」

「証拠を見せるヨロシ！」

「あー、そうですね。僕らも実物を知らないのです、都鳥さんがどのくらいの腕っていうのも分からないですもんね」

意気揚々と万事屋メンバーは空木の密かに育っていたプライドを折っていく。

知らないと言われるのはまだいい。しかし、「お前の絵にどれだけの金銭価値があるのか?ん？」と問われるのは実に不快であった。

「なるほど。実物を見せれば良いのだな?」

「ああそうよ。それから値段を変更してやらんでもない」

いつの間にか強気になった銀時に、空木は懐から絵を取り出した。一枚だけじゃなく、二枚、三枚と。

合計で五枚の絵が万事屋の前に並べられた。

「こ、これは……」

「…なんか豆粒みたいに人が描かれているアル。気色悪いよー銀ちゃん」

「…ヤベえな。これ」

素人目でも凄いと分かる絵を提示され、銀時は値段変更するべきか?いや、それだと前払いでくれた金を居酒屋で消費する予定がパーになる。

銀時の中で天使と悪魔が争い始め、決着は悪魔が勝った。

「なんなら美人画でも春画も出してやろう」

「最高だなアンタ！一万は安いぜ!!」

ぺらりと追加で出された美人画と春画に銀時はコロリと意見を変えた。空木なりに神楽へは見せない配置に置かれており、諸に見た新八は鼻血を噴き出した。袂から白いハンカチを取り出し、それを拭く。

「そうですね。個人で依頼って出来ますか？」

「ああ、出来るとも。しかし今は『万事屋』として依頼しているのだろうか？それが終わったら俺に依頼してくれ」

「是非ともさせていただきます」

空木の折れたプライドが二人の土下座姿に再び蘇った。それから二人の姿勢が直り、神楽は半目で二人を見た。見せられずとも二人がこうも態度を変えさせた絵の種類には心当たりがある神楽であった。

「では依頼料は一万か？」

そっけなく茶を飲み干しながら空木が言った。

「ああ、一万だ」

「すまない、虚。茶をもう一杯注いでくれ」

「はいー!」

空木の意図を察した虚が笑顔で茶を淹れる。持っている急須にはまだ一杯ほどお代わりできる量が入っている。

虚は茶をその残りを注ぎ、持久戦に持ち込むため台所へ行った。松陽は困ったように笑っている。

一万、と銀時たちが提示されてから無言の空間が漂っている。空木は値段について何も言わず、茶をちびちびと飲む。

「あれ…。おかしいですね。これって一万って言って、「よし決まった！絵を描いてやる!」みたいな雰囲気になる筈じゃないんですか？」

「お、おい…。まさかあの目は……」

漂い始めた緊張感を感じながら、万事屋メンバーは空木の目を見る。

（まだ、出せるだろうか？）

——コイツ、俺達から搾り取るつもりだ!

その目で察した。動作で金のマークを作っている空木の姿が巨大

なイメージとなつて鎮座していた。

しかし、通常なら払うことが都鳥への依頼料は払える筈だった。何故なら万事屋には依頼をされた際に前払い兼都鳥への依頼料として多額の金額が支払われたからだ。

だが、銀時はその金の一部を隠し、残った金で万事屋全員焼肉に行つた。食べ放題、それから高級そうな部位を多く頼み、その金を全て消費してしまつた万事屋。口の中にあの肉の旨味たちが広がっていく。

ここで引き下がる訳にはいかない。しかし、値段を上げなければ奴はいつまでも了承を出さない……!

くつ、銀時の口から音が漏れる。

「……一万三千」

「松陽、茶菓子のかわりを」

「はい」

(駄目だ。バツサリと斬られた!)

(そりやそうですよ銀さん!流石にナメすぎですよその値段は!)

(ここは景気良くパーツと値段を上げるネ!)

(だったらお前らが言えよオオオオオ!!!!さつきからプレツシヤーパネえんだよ!アイツの背後のスタンドが首を斬る動作してんだよ変われエエエエエ!!!!)

(嫌ですよ!僕だつてあんなのに目を付けられたくありませんよ!!!)

(ここは万事屋の主人として、あの焼肉へ誘つた本人として責任を取るアル!!)

(お前らだつて喜んであの焼肉を食べただろうがアアアア!!!!)

脳内で二人と通じ合うも責任のなすりつけ合いになり、銀時は頭を抱えた。銀時が二人に内緒でひっそりと隠した金額は十万。

致し方ない、あの金を使うしか――。

そうもやもやと考えている間に、虚は新たなる茶を淹れて戻ってきているし、松陽も茶菓子である煎餅を新たな器に乗つけてやってきた。口元には何故か煎餅のカスらしきものが付いていた。

「松陽食べたな?」

「いいえ、そんなことはありませんとも」

「口にカスが付いているぞ」

「はっ……！」

虚がそう指摘し、松陽はしまったという顔をした。

空木のみならず、双子まで銀時たちにプレッシャーを与えつつ会話を交えている。その姿を見つめ、銀時はゆっくりと口を動かす。

「に、二万でどうだ」

バリッ ボリッ

上品に、だが大きく音を立てながら空木は煎餅を食べる。その目はまだ語っている。

まだ出せる筈だ

背後のスタンドも首を斬る動作から何処かから取り出した刀でペシンペシンと銀時の頭を叩くようになった。もちろん、銀時の感じているイメージであるから本当に起きている訳ではない。

銀時の背が小さくなる。アゴが心なしに尖り始め、鼻や目など顔がシャープな顔付きになっていく。

背にはざわ…ざわ…という効果音が現れていく。

「や、二万……」

生唾を飲み込みながら、金額を上げていく。銀時の感じる緊張感が横二人にも伝わるのか、彼らも作画：福本〇行になって場をざわ…つかせている。

(ぎ、銀さん…！そんな金があるとでも……！)

(ま、まあな……。銀さんのポケットマネーを舐めんなよ)

(銀さん……！)

そう、銀時は空木の掛ける圧のみではなく、あの時消費した以上の金がまだあるということに従業員二人に悟られることへのプレッシャーも感じていた。

このことが知られば、恐らく己に夜兎族特有の身体能力による尋問が及ぶ可能性は高い。だが、依頼が通れば前払い以上の金が入ってくる。

銀時は尋問と依頼を完遂させた場合の金額を天秤にかける。それ

はギイイイ……と尋問の方に重さが勝り、……かと思えば金額の方に傾いていく。

ゆらり ゆらり

ペシン ペシン

尋問か、金額か。どちらかに揺れながら、決定的には傾かない天秤。銀時は多量の汗をかいていた。滝の如く流しながら、シャープなアゴに汗が溜まり、ぴとんと一滴が落ちたその時、——天秤が金額へと重苦しく音を立てながら完全に傾いた。

「な、七万！七万だ!!それ以上は出せねえ!!!」

「七万……」

パリポリ、煎餅を齧りながら空木が言った。その表情は依然として変わらないままだ。

(行けるか……?)

パリポリ ババリイ！ パリポリ パリポリ バツバリツボリイ
!!!

途中、緊張しながらちやつかりと煎餅はしっかりと食べる神楽の音が混じりつつ、空木が煎餅を食べ終えた。

「……うむ。描いてやろう」

「や、ヤッタアアア!!!」

「ウヒョヒョーイ！また焼肉行けるネ！今度はアネゴも誘うアルー!!!」

「やりましたね！銀さん!!でもそのお金ってどこ、……から……」

喜んだのも束の間、その金の出所を怪しんだ新八はその真実に気が付いた。その空気を感じ取った神楽もまた、その真実へと辿り着く。

「銀さん、後でお話があります」

「どうしたんだよ新八クーン？そんな怖い顔しちゃって……」

「…そーういや、前払いで渡された金は二十万だったアルな。でも、私らが使ったのは十万……」

スチャ、と眼鏡を輝かせた新八に、ゴキリと拳を鳴らし始めた神楽。ビクツと体を震わせる銀時。その様子を愉快気に見つめる空木ら三名。

「まあまあ、その依頼主がどのような絵を描いて欲しいか俺に伝えてから吹っ飛ばせば良からう?」

そうしてほんの少しだけ猶予が与えられ、銀時は実にゆっくりと空木に描いて欲しい絵の特徴と期日を伝え、無事神楽に吹っ飛ばされた。

——そして、新八が空木にとある話を持ち掛けた。

一一

それから後日のこと、トントンと万事屋の戸を叩く空木がいた。銀時が吹っ飛ばされた後、新八から万事屋の住所を教えられ、その通りに万事屋へ依頼された絵を持ってやってきた。

「はい。あつ、空木さんですか!」

「ああ、依頼の絵が出来たから届けに来た。それから依頼料も貰いに」

「はい、少し待って下さいね!」

そう言つて玄関で空木の絵を持った新八が万事屋へと戻り、その手に茶封筒を持って帰ってきた。

「確認して見てください」

「ふむ、一、二、三、四……七。提示された依頼料は確かに受け取った」

「あ、それから例の絵つて……出来てますか?」

「アレはまだ出来ていない。そちらの絵の完成を優先したからな。……それから納得のいく出来になるまではまだ時間が掛かりそうだ。気長に待ってくれるか?」

「はい、こちらはまだ依頼料払ってないんで……いつでもお待ちしますよ!」

「冬の鴉」

空木邸の庭に植えられた植物の葉が赤く色付き始めた。ここに引越してきた時は春だというのに、季節はあっという間に秋になっていた。

相変わらず庭木には一羽の鴉が止まっている。その鴉は空木が定住し始めた頃から見かけるようになった。

「お前も気難しいことだな…さつきと来れば良いものを」

空木は懐から取り出した細い紐のように折られた紙を取り出して、鴉に近付きその足に巻く。

カア！と一つ鳴いて、訓練された鴉が飼い主の元へその手紙を届けに羽ばたいた。

さて、これからどうしようかと考えた時だった。空木の耳がカサコソという音を聞いた。家の中だけではなく、外の方でもしきりに聞こえてきている。

虫の足音がこんなにはつきりと聞こえてくるものなのか？そう思いながら空木は耳を澄ましていく。

『江戸中で異常発生している巨大ゴキブリについて徹底討論していきたいと——』

『中には赤ん坊が襲われた、ペットが食べられた——』
「し、師匠、いますか！…ご無事ですか!!へぶう！」

町の方では何やら大画面でニュースが流れているらしく、遠く離れている筈の空木邸の方にまで放送が聞こえていた。

それに加えて家の方で聞こえていたカサコソ音が大きく鳴り、縁側に接している障子の戸が倒れた。音のした方を向き、そこから見える惨状に思わず声を引き攣らせた。明らかに人体並の全長を持った巨大なゴキブリが松陽と障子を押し倒し、外へ出ようとしていた。倒れた障子の部屋奥では虚が伸びている。やられてしまったようだ。

空木は倒れた松陽の落とした新聞紙を拾い丸めて、飛び掛かるゴキブリに思わず目を使って殺害した。

しかしまだまだ多くの足音が家の中から聞こえてきていた。

『決して倒さない様にしてください』

「実は二人で倒すことは出来たんですが…どうやら仲間を呼ばれちゃって」

放送と松陽から聞こえてきた情報に絶句し、空木は口を開けたまま松陽を見つめた。松陽は笑いながら立ち上がり、そうしている間にもブーンブーンとゴキブリが飛来してきていた。

空木は思わず遠くを見る。…どこを見てもゴキブリがチラついて
いる。

事の発端となった松陽を見る。にっこりと平常通りに笑っているが若干冷や汗をかいている。

「……江戸は未恐ろしいな」

「本当ですよね」

「お前たちは後で家中を隅々まで清掃することだな」

「…ですよねー!」

「それでも師匠がやってくれるなら仲間を呼ばれることなく始末できますよね？」という松陽の視線を受け取った空木はゴキブリバスターに走り出した。そう言えば虫は殺生の内に入らないか…と考えたが、それよりも生理的嫌悪の方が強かったので無視することにした。

空木にとつては外見もだが、ゴキブリの歩き回る音はより鮮明に聞こえてくる。つまりは不快だ。

暫くしてゴキブリ騒動は収まったと放送が入り、その頃には家のゴキブリも消し去り、虚も気絶状態から回復していた。

それから二人が忙しく家を清掃する中、空木はのびのびと私室で茶を飲んだ。

一一

秋もとつづくに過ぎて冬。そして今は夜中だ。この冬の夜中に空木はスナックへ行こうとしていた。その名も『お登勢』。お登勢という女主人の経営するスナックだが、室内で絵を描いていてもあまり茶化

されることが少ないので、空木は週に一度行くか行かないかの頻度でお登勢に通っていた。

空木は目的の場所に着き、からからりと明るい光の漏れる戸を開ける。

「らっしやい。おや、アンタかい」

「ああ。いつもので」

「いつものつつつても酒一杯だけじゃないかい。たまには他のも頼んでくれないのかね」

「酒で失敗すると恐ろしいのはよく知っているからな」

空木が『お登勢』で飲んでいると、たまにだが銀時が現れる時がある。来る度にべろんべろんに酔うまで飲む銀時の姿や、大昔に一度酒で大失敗を犯した父の様子を見ている空木はそんな風になるまで飲むということとはしなかった。

空木は室内に入り、いつも定位置にしている端のカウンター席に座る。テーブル席の方ではキャサリンが客に酒を注いでいた。

「酒一杯とは言っても高いものを頼んでいるからノーカウントだ」

「はいはい」

空木が座ってから取り出したスケッチブックの横に酒の入った徳利と猪口が置かれた。早速徳利から猪口に酒を注いで飲み始めた。

お登勢はふう、と煙草を吸ってから空木に話しかけた。

「アンタ、今月暇かい」

「…いや、その既婚者とは…………お付き合いは…出来ないというか…………」

「何気色悪い勘違いしてんだよ。普通に予定聞いてるだけだよこつちは」

「ジョークだ」

「もつとマシなジョークを吐いてくれないかねエ…………で？」

「特に予定はない」

「ちよつとばかし男手の必要なアルバイトがあんだけど、受けてくれるかい？」

「…それはどんなアルバイトだ？」

「知り合いに山奥で旅館を経営してる友人がいるんだがね、こここの所繁忙期だから人手が欲しいってもんでさ。十日位でいいから手伝ってくれって話さね」

「十日か……」

空木自身が十日間家を留守にして、二人を家に置いておくことには何の問題は無い。しかし、二人には空木が不在ということで起きる問題がある。

あの二人は致命的に料理が出来なかった。旅の合間などで何かと料理を手伝わせてはいたが、それでも料理の腕は上がらず、塩と砂糖を間違えた後に台所を壊すレベルであった。今も手伝わせて入るが、基本的に空木が朝・昼・晩と作っている。

「受ける分には構わないが……」

「アンタのところで引き取ってる双子が心配かい」

「心配は心配でも、あの二人が料理を作れるかが問題だな」

「ある程度自立できる程度に料理は教えといた方がいいさ」

「いや、教えている筈なのに塩と砂糖、コンソメと味噌を間違える位に危ういんだ」

「それで学べるならいいんじゃないのかい」

「その程度ならまだ可愛い方だが、酷い時には目を離すと鍋が爆発する。大惨事の際は台所が故障して使えなくなる」

「…重症だねエ」

「だろう？」

そのお陰で九月初旬の頃には三食外食に頼る羽目になった、という言葉を酒で流し込んだ。

どうやったら味噌汁を作っていた鍋が爆発して、更には台所が爆発する経緯に繋がるんだ。今でも空木は疑問に思っている。しかし、それは某人物の作る料理が全て卵焼き（ダークマター）に変換されるレベルに矯正が不可能なことであるというのを空木は知らない。

「とりあえず、受けられそうだったならその仕事は受けよう」

「期待せずに待っとくよ」

居酒屋で絵を描くと「そんなもん描いてねえでさっさと注文しろ」

という場所が多いが、ここ『お登勢』ではそういったことを最初に言われるも強要はされない。無論、夜の飲食店で絵を描いている奴の方がおかしいのだが、『お登勢』はそんな客もそれなりに受け止めている。

それにお登勢は以前空木の絵を買った客でもある。その絵が早速店の中に飾られているのは尻がこそばゆくなる感覚があるが、飾られた絵を見て褒められるのも悪くはない。

要するに、空木のお登勢に対する好感度は高い方であったから、お登勢のアルバイトの件を受けようと考えている。

猪口に最後の酒を注いでちびちびと飲みながらスケッチブックに鉛筆を走らせる。目の前で煙草を吹かしながら接客をするお登勢に、奇妙な猫耳が生えている天人のキャサリン。赤ら顔になりながら酒を飲んで騒ぐ客たち。

自分が酔うのは嫌だが、他人が酔って醜態を晒すのを見る分にはいい。酔っぱらうと奇怪なポーズをとることがあるので構図の練習にもなる。

「チョットチョット。私ソナ顔ジャナイデスヨ。マリオンモンロー並ノ美女デスヨ」

「いやいやそれはねーよ」

「マリリンモンローレベルではないな」

ひよいと横から空木のスケッチブックを覗いたキャサリンが言えば、それに客たちがげげらと笑いながら茶化してキャサリンがキレながら客を酒漬けにする流れは鉄板だ。

空木はその声を聞きながら猪口に残った酒を飲み干した。

「勘定」

「あいよ」

お登勢に頼んだ酒分の金を支払って『お登勢』から出た。

店内の暖かい空気から身を縮まらせる程に冷たい空気が広がる。自分の背に笑い声が聞こえてくる。そんな場所に簡単に入れる様になったこと、あまつさえ店の女主人にアルバイトをしないかと持ち掛けられることをどこかおかしく感じた。

「…さつさと帰ろう」

酒でも回るのか、余計なことを考え込まない内に家に帰って絵を描く作業に入ろうと思う空木であった。

一一

朝方、空木邸の大広間にて朝食も摂り終わった三人が座って話していた。

「アルバイトで十日間留守になるが」

「無理です」

「…だよな」

二人が飯を作れなくとも外食で済ませられればいい。しかしそれは朝と昼の場合であって、夜の場合は気が進まない。九月には空木という保護者が傍にいたからいいものの、高校生ぐらいに見える二人だけで夜中…しかも繁華街が多いかぶき町内で夜間外出させるとするのは空木の胃が足りなくなる位に心配であった。

「いや…しかし…どうむ…」

「単純にコイツと二人きりなのが気に食わないです」

「それは個人個人の問題なのでどうにかしてくれ。俺は関係無いしな」

「物理的に分けたの貴方でしょうが」

「それに了承したのもお前だな？」

「っ……」

悩んでいた空木が意地悪く笑う。バツが悪そうに虚は顔を背けた。虚と松陽を分けた本人は笑ってはいるが、内心あの時の心臓を握った感覚が蘇って気分が悪くはなっている。空木は気持ち悪さを切り替える様に手を一握りした。

一先ず食料問題は外食ということで解決したが、後は二人の安全面のみ。誰かに預けてみるか、それとも二人が何も問題を起こさないことに賭けるか。

「そういえば…何でもやってくれる奴らがいたな」

「げ…」

「万事屋に預けられるんですか？」

「…いや、ないな。止めておこう」

万事屋に面倒を見てもらう、そんな手段が思い浮かんだが却下。二人の小遣いをあの手この手で引き出して使う可能性と、厄介ごとを持つてくる可能性があるからだ。

前者は甚だ不快であるが、問題になるのは後者。巻き込まれた厄介ごとで万が一にでも二人が怪我をし、その特異性を見られたら困るのは二人だ。

いくら昔と気風が違えど分からないものや不老不死に対する考えは共通しているだろう。恐れるか、求めるか。こんなことをおいそれと他人に言えるような秘密でもない。

「…おや、インターホンが鳴りましたね」

「こんな明朝に来客か？珍しいこともあるな」

空木が大広間から出て玄関へ移動する。玄関とも言える木製の門扉、その格子の隙間から見える姿は男の様だった。笠を目深に被つていて、うねった白髪を持った男。

門扉を開ける為に近付けば近付く程、覚えのある気配であることに気が付く。それに薄っすらと香るあの忌々しい血の匂い。

その扉を開けた後、男が笠を外した。顔には斜めの傷痕があり、目の周りの隈は濃い。

「いい加減鴉を使って監視するのも止めたのか」

「ええ。どなたかから頂いた手紙、言葉どおりに、私めも好き勝手にやろうと思ひまして」

「随分と長かったな。情報操作でもしていたのか？」

「ええ。長らく世話になると思っただので、その後始末をと」

「そうか。…まあ、入れ。臙」

扉を開けた空木が臙に中へ入る様に催促した。薄らと笑っている空木の後ろを、臙は付いていく。

行く先は言わずもがな、二人の待っている大広間だ。

「部屋は多くあるから好きな場所に入れ」

「…随分とあつさりしていますね」

「こうなるだろうとは考えていた。半分不死で松陽の一番弟子であるお前なら別に家に住む位は構わない。それよりも…」

「それよりも…?」

「手紙にも書いただろう。寝言がうるさくて構わんだ。臃、臃、と暇さえあればその名を呼ぶ」

「それは……」

前を歩く空木はちらりと臃の顔を見る。そこには不器用ながらも微笑みを浮かべた男の顔があった。

空木はそれを見なかったことにしようと思つて前を向き、大広間の障子を開いた。

「二人とも、来客だ」

一言そうかけて、空木と臃が大広間に入り、二人と対面するように座った。松陽は目を見開かせてその姿を見た。虚は松陽ほどのリアクションは無いが、目には入ってきた人物への興味が見えた。

「この度、ここで世話になる臃と申します。以後お見知りおきのほど、よろしく願います」

「…ええーまた、よろしく願いますね!」

僅かに流れる涙を袖で拭い、松陽は臃にそう言った。

「調査結果」

・陸奥…治り変わらず。

・伊豆…治り遅し。

・丹後…治り変わらず。

・出雲…治り早し。龍穴か源泉が近くにあるからか。

・伯耆…出雲より治りは遅いが早し。出雲の影響か。

・大和…治り早し。

・山城…治りは当然の如く早し。龍穴の影響か。

・阿波…治り変わらず。

・江戸…治りは山城と同じく早し。ターミナルに使われている動力源のアルタナが原因だと思われる。

龍脈…天人からの呼び名はアルタナ。惑星の生命エネルギー。生命体に何らかの変質を促す作用がある。

なお、不死性もこのエネルギーを使用しているから起きる現象であると思われる。龍脈によって生かされているということであれば、地球から龍脈がある限り、地球が存在する限り死なないものだと思われる。

つまり、死ぬ為には地球を滅ぼす必要がある。アイツを殺す為には星一つ滅ぼさなければならぬ。

だがその為にする手間、基気力は無い。なぜなら上記の手段では俺ごと死ぬ。それは駄目だ。

俺は生きて、且アイツだけを殺す方法を考えなければならない。

龍脈のエネルギーが全く無い状態で殺し尽くすのがベストか。狗神で一時龍脈を活動停止させ、俺が殺すこと。

それか、この星ではない場所なら不死を殺せる技術があるのかもしれない。

とは書いたはいいいものの、それらの手段を準備する気分にはなれん。片手間程度に探すか。

「気付いたこと」

・不老不死を求める人間へ感じた嫌悪は同族嫌悪に近い。これは記憶が戻ってから気付いたこと。そんな存在に近付いてしまったのは偶然だったが、それでも私は生きている。私の自殺は最も許されざる行為だ。

・冬になると首が痛い。首と言うか、昔斬られた傷痕。これについては不明だが、痛みほど煩わしい物も無い。この前首を切り離れた芸を見せたら顔面蒼白になった二人には気付かれない様にしなければ。

・江戸には携帯電話という絡線があるらしい。相手が遠くにいても通話ができるものとか。買っておくべきか…？

「夢幻教と変な夢」

隴は生活の中で非常に馴染んでいた。食事に清掃、食料や備品の買い出し。

朝食は虚と松陽が起きる前に食卓に並んでおり、空木邸の床は毎日光り輝く程に磨き上げていた。

また、食事の栄養バランスもよく考えスーパーで買い物をする姿からは、かつて暗殺集団の頭領であったとは思えない程に日常に馴染んでいた。

「もう四日です」

「何が四日なんですか…」

そんな隴から竹箒片手に「行ってらっしゃいませ」と送り出され、朝の日課に恒道館道場で新八と試合することが追加された虚が誰に言うでもなくそう言った。

新八は呆気なくやられて手放した木刀を取りに行きながら虚に聞いた。

「師匠がバイトへ赴いてからもう四日です」

「あ、ハイ」

「…四日ですよ？ちよつと日が経ち過ぎていませんか？」

「いや、最初に空木さんは十日間バイトで出掛けるって自分で言ってますんでし——」

ヒュツと新八の顔の横を木刀が過ぎ去った。

(め、めんどくせエエ!!!)

「暇でしようがないんですよ」

はあ、と木刀に手を這わせながら溜息を吐いた虚は心底キていた。一日の大半を部屋で過ごす空木に付き添って、師の部屋で大半の時間を過ごしていた虚はかなりの暇を持って余していた。

町で歩いて買い物をする欲も無く、松陽の様に人間の営みに好き好んで入る程虚は人間好きではない。結果として生まれたのが、四日間師の部屋の天井の木目を数える遊びをして過ごす虚の姿だった。

目玉を剥き出しになりながらも新八が名案を思い付いた様子で言い放った。

「じゃあ、暫く万事屋を見学しませんか？万事屋にいと毎日刺激で一杯ですよ」

一一

折角だからと声を掛けられた虚は万事屋と万事屋従業員新八の姉、お妙を含めた鍋団欒にお邪魔することになった。

「へエ、最近姿が見えねエと思っいたらそういうことだったのか。俺アてつきりおっちんだのかと」

「先に貴方を墓場に入れますよ」

「ねーねー銀ちゃん、もうちよつと具材入れる？もつと入れちゃうアルか？」

「あーそうだな、この際だから冷蔵庫にあるもん全部入れるか」

「じゃあこれも入れてください」

「いいもん持ってんじやねーか。コイツは俺が頂くわ」

こたつの上で虚は普通の鍋から魔改造されそうになっている鍋に入れようとしたマカデミアンナツツチョコをかすめ取ろうとした銀時だったが、あえなくマカデミアンナツツチョコは鍋に入って鍋の仲間入りを果たした。おそらくコーティングのチョコが溶け、中の硬いナツツが少し柔らかくなって生産者たちの口に入るだろう。

「鍋は色々入れた方がうまいからな」

「バランスよく野菜も追加しましょう」

「ならもつと肉も入れるアル！こんなんじや足りないヨー！」

「根菜を」「牛乳とか」「砂糖も」……

志村家の冷蔵庫にある物を一通り入れて出来上がったのは異臭のする謎の液体だった。姉の帰りが遅いと心配していた新八はそのことに気が付き、ツツコミを入れ始めた。

「まったく、虚さんもどうして止めなかつたんですか！」

「いえ、私は止めましたよ。折角の御同伴でしたのに……」

「おい、何しれつと安全圏に行こうとしてやがる。オメーも入れてたじゃねーか」

「嫌ですねえ。ちよつとした隠し味ですよ」

「ハーゲンダッツも入れたら姉御も喜ぶネー！」

「おい待てエエエ!!」

片付けようとこたつの机を動かし始めた銀時と新八とそれを抑えようとする神楽、そしてこたつから出てそれを眺める虚。

「新ちやーん。冷蔵庫に入れてたハーゲンダッツ知らない？」

いつの間にか帰ってきたのか、お妙の声がこたつのある居間にも届いた。それは穏やかながらも死刑宣告にも等しい力を持っていた。

「ヤベー！奴め、ハーゲンダッツに早くも気づきやがったよ！お玉はどこいった？」

「無理無理！もう溶けてますよ！」

慌て始めた銀時は咄嗟に鍋の中から溶けたハーゲンダッツを掬おうとして手を入れてしまった。

あつアつアつアつア!!という叫びと共に銀時は鍋の中身と共に手を振り払った。

そしてそれは襖を開けて客人を案内しようとしたお妙の顔に降りかかった。

お妙は能面のような笑顔で銀時と新八の顔をタコ殴りにした後、ハーゲンダッツを100個買ってくるまで二人は家に入れなくなつた。

一連の流れに僅かに顔を青褪めさせた虚に気が付くと、先程のことは無かつた様に「こんなに大勢でお鍋なんて初めてね」とお妙は笑い、鍋を新たに作り始めた。

「私止めたネ。全くしよーがない奴等アル」と掌をクルツクルツと裏返しながら神楽はこたつに入った。

それに倣い、虚も「聞く耳を持たないというのは恐ろしいことですネ」とこれまた掌を裏返してこたつに入った。

そして、お妙の連れてきた客人である花子が浮かない顔をしながらもこたつに入った。

あまりにも浮かない様子に「大阪出身だから、お鍋じゃなくてお好み焼きの方が良かったかしら」とお妙は言うが、花子は静かに涙を流し始めた。

「アカン……。ごめん。江戸に来てから人の優しさに触れたことなんて、あんまなかったもんやから。」

「アンタみたいな人もおったんやな。こんな近くに……」

「花子ちゃん……」

「オーカサドーしたアア!! 元気出せよオメー!」

飲め! コレ、飲め! と鍋を勧めてくる神楽を横目に、花子はお妙にお金を貸して欲しいと頼もうとしたが、「おか」の二文字で内容を察したお妙が圧を掛け、花子は涙を流しながら「話…聞いてくれる?」と身の上話をし始めた。

踊り子になる為、江戸へ出稼ぎにきた花子は言いくるめられてインチキ宗教に入信させられた。

夢を掴むにはドリームキャッチャーと呼ばれる力が必要だと言われ、かの家康公も豊臣秀吉も持っていたと吹き込まれて高い金で購入したのが毛の付いた付けホクロだった。

このホクロさえ付けていればドリームキャッチャーに、夢を掴むことが出来る!

そして、お妙はホクロを付けた花子の顔を鍋に沈めた。傍では神楽がオーカサこと花子をはい上がってこい! と応援している。

馬鹿げた話に乗る輩もいるものなんだと虚は考えていたが、外から聞こえてきた足音に耳を澄ました。

鍋からはい上がってきた花子は夢幻教に入信させられたことによる被害を話始め、お妙に縋りついていていた。

大阪は人情の街だが、江戸は冷たい。そんなことを言いながら花子は泣いていた。

お妙からさり気なく地元に戻るように言われるが、まだ花子が江戸に残って夢を追いたいと考えているのならいつでも力を貸すとも言った。

「江戸には江戸の人情ってものがあるんだから」

ハーゲンダッツを買ひ占め終わった後、縁側に座つてハーゲンダッツを食べている二人に向けて言った。

一一

あの時の小僧の言葉に乗るんじやなかった。間違つても志村家の魔改造鍋と一緒に製造することなく、宗教に騙された小娘を見捨てて真つ直ぐに家に帰るべきだった。

そう虚は死んだ目をしながら考えていた。

「みなさ〜くん！夢見てますかア!!」

「見まくつてま〜す!!」

「夢にむかつて走り続けてますかア!!」

「走りまくつてま〜す!!」

かつて松陽の弟子だった男というのは存外に他人を思いやる心があるらしい。小娘の奪われた貯金とやらを取り返す為、夢幻教という神通力の扱える男が作った宗教に潜り込むことになった。

「ハイ！みなさ〜くん夢見てますかアアア!!」

「見まくつてま〜す!!」

声は出さずに腕だけは上げるポーズをした。

「志村妙さん。アナタの夢はなんですか?」

「父の道場を復興させることです」

「花子ちゃん。君の夢は言わずとしれたア?」

「インチキ宗教団体から金をとりもど…」

目的を言いそうになつた花子の頭を銀時とお妙が叩いた。

「私の夢はア〜飯一膳に「ごはんですよ」を全部まるまるかけて食べることです!」

でもオ!夢は叶うと寂しいからずっと胸にしまつておこうと思ひます!」

「ハイ。そ〜ですか」

夢幻教の創始者斗夢はいつの間にか神楽に奪われたマイクを取り戻して新八に向けた。

「君は……眼がよくなりたいたいかそんならどうせ。いいや」
「オイ！ちゃんと聞けやアア!!」

ぞんざいな扱いにツツコむ新八からマイクは虚へ向けられた。

「君の夢は？」

「師匠と再会することです」

一も二もなく答えたが、お妙の時同様に軽く流された。そして斗夢は銀時にマイクを向けた。

「君の夢は？」

「夢？そんなもん、遠い昔に落つこととしてきちまつたぜ」

「お前何しに来たんだアア!!」

見かねた新八が「サラサラヘアーになりたい、とかでいいんじゃないッスか」とぶつきらぼうに言い、銀時はそれを自分の夢に採用した。

「……君達、ロクな夢も持たずにここへ入信してくるとは。どーいうつもりだ。ホントに信者か？」

「そいつアこれから決める。なんでもアンタ、夢を叶える神通力が使えるらしいじゃねーか。」

そいつをこの目で一度拝んでみたくてなア」

「ちよつと銀さん！」と新八が止めに入るも、銀時は斗夢を煽る為に喋り始める。その銀時の斗夢に対する態度に怒り始めた夢幻教信者たちが野次を飛ばし始めた。

消えろ！消えろ！という声にほんの少し眉を顰めながら虚は不気味に笑い始めた斗夢を見る。

ドリームキャッチャーの力の一端を見せようと、斗夢はポーズを決めて叫んだ。

「ドゥーリームキャッチャー!!」

暫く沈黙した後、斗夢が銀時の頭を指差した。

「君……ものつそいサラサラヘアーになりたいっていつてたよね？頭をござらんよ」

その場にいた者の視線が全て銀時の頭に集中する。

そこには、髪型がぱつっんに変わったサラサラヘアーの坂田銀時の姿があった。

「ウソ？ウソでしょ、ちょっと…」

疑わし気に自分を指差した銀時は、お妙の持っている手鏡で自分の姿を確認すると喜んだ。そして斗夢の前に膝をつき、忠誠を誓い始めた。

一体これはどういうことだと動揺するも、斗夢はまたしてもドリムキヤツチャーの姿勢をした。

すると、神樂の頭の上にごはんですよがまるまる乗つけられたご飯の茶碗が置かれていた。

だが、虚は神樂の後ろに顔を隠した忍者らしき人物がごはんですよが掛けられた茶碗を用意し頭の上に置いていたのを見た。それから梁の上へ戻った所も。

（忍者を用いて奇跡が起こった様に見せているのか）

臆から聞いた話では、徳川定定に政権が移行してからお庭番衆は解体され、奈落が更に重宝されていたと聞く。恐らくその者の一人だろうと目星を付け、この場における奇跡と呼ばれる現象の仕組みが分かった虚はどうしても良さげに外を眺めた。

「みんなで夢を掴んで幸せになりましょう！」

「夢幻教万歳いい!!夢幻教万歳いい!!」

斗夢の起こした奇跡に興奮した信者たちに倣い、銀時たちは道場へ移動した。「ドリイイムキヤツチャーアア!!」と何の為にもならないことをしている人間を横目に虚はさっさと帰ることにした。

「えっ帰るんですか!」

「特に面白味も無い仕掛けでしたので…それに門限がありますから」

「門限?その年になってまでですか!」

新八は驚愕した。門限なんて関係無さそうな顔をしている人物に定められていたことに心底驚愕していた。

「あら、心配性な……母御さんなのね」

「は、母御じゃなくて父親ですが……ま、まあ、そうです」

「花子ちゃんの仇は私たちが取っておくわ。心配される前に早くお帰んなさい」

「いや姉上、まだ花子さん死んでませんよ?」

「せやで！何勝手に死んだことにしとるん!？」

お妙が曖昧な記憶を頼りに虚の引取人である空木を思い出しながらそう言った。

「あ、それよりもさつき、あの仕組みが分かったってさつき言ってますんでしたか!？」

「忍者ですよ」

「忍者!? ちょっとどういうことですか」

突然の忍者発言に新八が言い寄ろうとするも虚はさつきと付け合クロを捨て、衣装も着替えて帰途についていた。

陽が落ち始めて人通りも少ない時間に、密かに虚は笑った。

(今度母御に間違えられていたらそっと訂正しよう)

お妙のあの様子ではまた母御に間違えられるかもしれない。師匠は女性に間違えられることを酷くお怒りになられる。自身がその誤解を助長させていると知れた場合、最悪首が飛ぶやもしれんと身を震わせた。

——同時刻、バイト先でくしゃみをする空木がいた。

「どうした新入り? 風邪か?」

「いえ、何でもありません」

「体調はしっかり管理しときなよ。生者は死者と違って病気になりやすいんだから」

「あはははは!!」

親し気に声を掛けてきたのは身体が半分透けている幽霊、何故かは知らないが笑い始めた声も幽霊。

とんだバイト先に来てしまったと思いつつ、銭湯の清掃に勤しむ空木だった。

かつて、天皇がおはせし都には必ず龍脈が地を巡っていた。

それは天運か、はたまた偶然であったのかは分からぬことではあるが、時の人はその龍脈の力を操る術を編み出した。

今は表舞台に出ることは無きその術の名前を龍脈道と呼ばれ、この名が表で大々的に知られていた当時にはその術を修めようと切磋琢磨していた者たちがいた。

この力を操れる血脈として専門家の間で語られる一族の名を坂下。又は龍脈道の開祖ではないかとも言われている。理由はとても簡単な物で、発掘した文献に龍脈道の後継者に坂下という名字の者がいたというもの。

しかしながら、専門家の発掘した文献はただの龍脈道の後継者リストであり、龍脈道について何か書かれている訳では無かった。

龍脈道とは何か。専門家たちは議論し合い、そして龍脈に関係する、龍穴と呼ばれる地が各地で祀られていることを突き止めた。それによってこの文献の重要性は上がり、龍脈道の真実を求める為に研究が今も続けられている。

というのが現代で知られている龍脈道の全てである。

実際、龍脈道は密やかに受け継がれているものであるが、彼らがそれを知り得ることは無い。

「何故なら！本流とでも呼べる地点を全て天人に占領されたからです！」

龍脈とは星に巡る生命力のことであり、それを異星ではアルタナと呼び、星の命と引き換えに発展していった。アルタナを独占する奴等にとって専門家は邪魔な存在。真実に気付かれる前にその命を消されるだろう。

「あいつ等本当に減らすことしか考えてない！まったくもって不愉快！しかも閻魔様からともうにかしてこいと言われて地獄を追い出された始末!!」

「…可哀そうだと思いませんか？」

「いいえまったく」

そんなことを一気に言われてもという気持ちで占めている虚と松

陽だった。

一日も終わり、寝てみれば隣に同じ顔をした人物がいるわ、目の前に不審な人物が突然語り出したわで早く目が覚めないかと思ってる。

「じゃあもうちよつとだけ龍脈道について教えてあげましょう。龍脈道は減らすだけの天人と違って龍脈を活性化させて増やしたり減らしたりして星の体調を整える術とも言います。この術を使って都を守護したり、各地に赴いて龍脈を整える仕事をしていました。

あと！それから坂下家が龍脈道の開祖ではありません！大伴家ですよ!!あーもうムカつくなああの若造の家エー！」

枸橘と出合い頭に名乗った男は手に持った笏をベシベシと手に叩きつける。

その間に二人はしりとりをし始めた。

「あ、聞いておりませんね？龍脈から産まれた方々」

「せ…セミファイナルdTVで放送するらしいので見ましようね」

「ね、ねだと……」

「しれつと宣伝もしてるじゃないですかー…。あーあ、どうしましようかね。この幼い頃の空木の写真」

ぐるんと二人が見向きもしなかった男を振り向いた。にたりと笑いながら男は指に一枚の写真を挟んで揺れさせた。写真の中では空木の面影のある少年が目を瞑っている姿があった。目の隈もまっただくないが、何となく空木であると思わせる人物だ。

しかし、二人にはその写真の人物が確実に空木であると感じ取っていた。

「お…幼い頃ですって」

「…捏造では？いいえ、捏造です。あの時代に写真なんて技術があるものですか…！」

「あ、いらないうんですか？今なら一枚だけ特典でプレゼントしようかと思っただんですが」

二人は即座に殴り合いを始めた。片やストレート、片や足を使って同位体を蹴落としていく。変わり身の早さにうん？と男は疑問に

思ったがまあいいかと写真を争っている二人の上空に放り投げた。

「!!」

上からひらりと落ちてくる写真を目にし、二人は飛び上がった。姿勢はまるでボールを望むスポーツ選手の如く、自身の持つ身体能力を前面に使って——その写真を握った。

片や喜びに笑みを浮かべ、片や目を見開いて深く落ち込み始めた。

「じゃ、嫌がらせはこの位にしておきます。ではでは」

暢気な男の音声と共に、視界が真っ白に染まっていく。

そうして空木が留守にしてから五日目のこと。

一つの部屋に離れて敷かれた二つの布団の間の地点にて立ち上がって何かを手にする松陽の姿と、地に崩れ落ちる虚の姿を目にして、臃は僅かに口を開けたまま呆然とした。

異説 『多き生なれど、今を楽しめ』

皆さんお久しぶりです。ゆっくりです。

さて、無事虚エンディング5「鬼の笑う道」を達成した動画を挙げて以降、私はもつと他のエンディングが無いか探しておりました。苦節十……千年くらいは掛かりましたかね（すつとぼけ）

その間何をしていたかと言いますと……、虚さんの色んなエンディングを試行錯誤した結果。

私はエンディング7を見つけました。

もう一度言います。

エンディング7を見つけました。

条件を言います。

- ・ 原作ストーリー外（平安時代・鎌倉時代などの時代辺り）
- ・ 種族は人間
- ・ 虚を討伐

たったこれだけ！ 簡単！

なんだこれは、たまげたなあ……。

三つ目の所をどうしてやろうかと思ったのかコレガワカラナイ状態ですが、そもそも銀魂のアニメを見返していたのが原因です。ほら、松陽先生が銀ちゃんに「君は君の剣で、人の剣で私より強くなってくれなくちゃね」って言っていたシーンで「せや、人間の状態で虚さん撃破したらどうなるんやろ！」と思ったのが始まりです。

ですが、変異体NPCと戦闘する場合、体力を削っても何度も復活しますが、それでは撃破扱いにはなりませんでした。虚さんの撃破方法は後々お伝えしますので、早速キャラメイクしていきましよう。

先日の小さいアップデートにて、これまでであったようであった機能が追加されました。

その名もキャラモデルのコピー&ペースト。

私は今まで疑問に思うこと無くキャラメイクしてましたが、ユーザーの方々から「気合入れて作ったキャラメイクを使いまわしたいからコピー&ペースト機能が欲しい」という声が多かったようです。ということを追加されたこの機能を使っていきましょう。

コピー先のキャラモデルは前動画にしたこともある空木くんです。

これをコピーこうして、ペーストこうじゃ。

はい、キャラメイクの画面が空木くんの時と寸分変わらないものになりましたあ〜！

性格、能力値、変異体特性といったものもそのまま同じです。ステータスを決める振り分けポイントすら同じ。スバラシイ……。

空木って？ という方は私の上げている動画で「銀魂：白銀ノ魂録 実況プレイ 虚ルート」という動画ハイルムンで投稿した小説ツリーがあるので、気になった方はそちらを是非見てください。

しかし同じキャラモデル使うのものにやび……、なのでちよちよいと細部を変えます。細かい体を健康的な肉体へ build upさせ、目の隈も無くしましょう、そして髪型をポニーテールにします。

はい、健康的な空木くんが出来上がりました。名前も変えようと思います……が、まずは一番重要な種族を人間に変更します。変異体特性の欄が消えて魂特性の欄が出ました。出身は母なるちきうのままにし、時代は戦国あたりにしておきます。やっぱ戦国時代が経験点稼げるんですわ。

さて、魂特性の欄は原則一つのみですが、変異体特性と同じくランダムガチャです。早速回してイクヨーイクイク。

「絶対の力」

ああ〜いいつすねえ〜

「絶対の力」というのは火事場の馬鹿力の効果があります。体力バーが真っ赤になるとステータスが全て大幅にUP！ タイムアタックなどでは重宝される魂特性です。

ではお次、性格と過去を決めていきましょう。過去はフレーバー的なものですが、性格と若干関わっているので重要です。では回しますよお……。

「力が欲しい」

どうすつかなく、振り直し……。いえ、性格も振ってから考えましょう。

はい、ドーン！（人差し指）

「慈悲深い」

何だお前（驚愕）

力が欲しいくせに慈悲深い？ とんだトンチキな組み合わせですよクオレハ……。

「力が欲しい」だと、経験点やスキルをよく習得できます。意欲的に学んでいるということですね。

「慈悲深い」は……。それこそフレイバーのようなものです。善人に好かれやすくなり、悪人に嫌われやすくなるとかそんな感じのもんです。折角説明した過去と性格が入れ替わってんな……。 （長考フェイズ）

まあエアロ、と振り直しませんでした。「力が欲しい」方が重要度は高めですからね。

続いてステータスの振り分けポイントを変えます。

体力：+12

霊力：+0

知能：+7

スタミナ：+9

筋力：+13

精神力：+9

器用さ：+16

素早さ：+26

幸運：+8

霊力なんて要らぬツ！ というステータス振り分けにしました。素早さは勿論、筋力や体力、器用さも高めで欲しいので多めに振り分けました。

続いて名前ですが……。今回は真面目に考えて中之丞なかのじょうという名前にしてみました。剣術を獲得する気なので、武士っぽい名前にしたんで

すよねえ。

じゃ、開始ボタンを押して……イクゾー！

はい、なんというか死体だらけの村スタート。お前、前もこんなスタートじゃなかった？気のせい？なんていうコメントは消していこうね〜^^

スタート地点なんてどうでもいいですよ。ステータス確認のお時間DA！

中之丞 人間 男性

体力：3

霊力：37

知能：53

スタミナ：42

筋力：98

精神力：32

器用さ：65

素早さ：71

幸運：37

魂特性【絶対の力】

経験点：0

はっ？ 体力ゴミカスすぎない???

おっと失礼。概ね筋力があって素早くて——という中々の高ス

テータスなんです。如何せん体力が……。フリーザ様に「体力たっぷりの3……ゴミめ」と断じられてしまいそうなくらい深刻です。

……というか、霊力……あることない？ ウツソだろお前……（呆け）あほくさ。

よろしいならばこのまま行きます（鋼の意志）

別にカス体力なんて経験点を振り分ければ済むことなんで。最初は死なない様にして、経験点を溜めていき、体力が40代になるまで割り振ってから他のステータスを上げていきましょう。

一先ず武装じゃ武装。刀狩りのお時間です。辺りの村から刀を探しましょう。農具は簡単に手に入りますが、やっぱ刀っすわ。単純に攻撃力が高く、そして「武術・独学」が手に入る確率も高くなります。今回はこのスキルと、「龍脈道」がキーとなります。「龍脈道」については追々説明していきます。

……青年刀探し中……

おお、ええやん。大きい屋敷の所で無事な状態の刀をゲットだけしました。早速装備していきましょう。

そしてこの刀を使いまして……今から修行を行うッ！

日に30時間の鍛錬という矛盾のみを条件に存在する肉体を作り……ません。

ここでひたすら体力が10代になるまでの経験点を稼ぎます。修行は刀振ってるだけでやれます。

おい待てえい、そんなに悠長にやっつけられる時間があるのかゾ？ という質問が出てきそうなのでお答えしましょう。

ストーリー外での時代で人間を選べば、その時代を五十年くらいまで遊べます。誰得仕様なんだと思ったら、このエンディングに行くための仕様なんだと僕は思います（眼鏡カチャカチャ）

というのは嘘です。変異体他繁殖不可能生物以外の種族には子孫システムという仕組みがあります。原作ストーリー外のみに対応

されるものです。この時代で死亡しようが好きな時代でプレイキャラの子孫（なお外見は同じ）というものが突然生えてきて違う時代でも遊べるってことです。

この仕様を使えばで幕府創立者のメンバーの家系になったり、柳生家とニコイチになったりと出来ます。はえくすつご……。製作費とか、足りてらつしやる？ 早く（DLCを）出してくれ、（金をつぎ込みたくて）待ちきれないよ！

修行シーンなんて見せても無駄な光景ですから倍速倍速ウー！

おっと、過去のおかげかたつた三ヶ月で経験点が8も溜まりました。

中之丞 人間 男性

体力：3

霊力：37

知能：53

スタミナ：42

筋力：98

精神力：32

器用さ：65

素早さ：71

幸運：37

魂特性【絶対の力】

経験点：8

これを全部体力にぶち込んでやるぜくく

中之丞 人間 男性

体力：11

霊力：37

知能：53

スタミナ：42

筋力：98

精神力：32

器用さ：65

素早さ：71

幸運：37

魂特性【絶対の力】

経験点：0

これでなんとか体裁は整いました。修行は一旦止め、「龍脈道」を獲得する為に龍穴スポットへ行きたいと思えます。そこにいる龍穴の守護者……、銀魂でいう阿音と百音の姉妹巫女のように龍穴を守る家系の方々がいます。その人たちの元へ突撃して「龍脈道」という龍脈版陰陽術を習うのが目的です。これは霊力の値無くても大丈夫ですが、突撃したとしても教えてもらえる確率はんにやび……不明……ですすね……。

賢いホモの皆さんはこの動画を見てる時点で察していると思いますが、普通にこの中之丞くんは獲得できました。だから、動画になっているんですね（メガトン構文）

あー、でもその前に……、とんでもない事実が発覚しましたね。

〽キャラの場所が孤島へ

船も……ないっすねえ……。クオレハ……想定外デース……。

見てください、この栈橋の向こうに広がる海を。そしてミリ単位で見える本土らしき場所を！

落ち込んでいてもしょうがないので船を作ります。幸いにして器用さは高い方なので丈夫な作りの物が作れる筈です。

……青年製造中……

！
船が出来ました。早速これに乗って本土を目指します。倍速ウ

……青年移動中……

着きましたく

どうやら今の場所は伯耆国鳥取県中部・西部辺りです。クソデカ龍穴があるのが出雲鳥取県東部、大和奈良県、山城京都南部らへん、武蔵国東京都・埼玉・神奈川の一部らへんなどですから、出雲へ行つた方が良さそうですね！

道中の野盗たちは斬り殺してイクゾー！デッデデデデ（カーン！）さあやってきましたー！　ここが龍穴を守る一族がいるハウスです！

お邪魔するわよ？　お話、いいかな？

出てきたのはおばあちゃんです。巫女服が似合ってるねえ〜！

「なんじゃ小僧。参拝かえ？」

『はい』『いいえ』

三つ目の選択肢、『指導願ひ』を押し——まず出ていません。最初は会話で好感度を上げてからが本番です。

ちよつと手探りですが、このおばあちゃんNPCに毎回話しかけた後プレゼント攻撃を仕掛けましょう。はい、会話から煮物が好きらしいので料理を試してみましよう。でーじようぶだ、器用さがあるのでレジエ妙ンドみたいになんてが真つ黒こげになつて好感度激落ちくん!?!にはなりません。

煮物やらなんやらでプレゼント爆撃していくとおばあちゃんNPCもにつこり。好感度も苗から徐々に蕾が見え始めた頃になりました。

「どうした小僧」

『話を聞きたい』『指導願ひ』『なんでもない』

やつと出ましたね。特定の技能を持つNPCや原作キャラと仲を深めるとスキルを継承してくれる『指導願ひ』の選択肢が出ます。

ですがこれ、性格や変異体特性に「寡黙」に類するものがある場合、コミュ障すぎて出ないんですよ。やつぱりある程度のコミュ力は必要つてはつきり分かんだけね。

一応そんなぼっち救済用に経験点を使用してのスキル習得がある訳ですが……。

さあ迷いなく押します！　ポチー！

『文字を覚えた』

違うんだよおおおお!

となった場合、またおばあちゃんに話しかけて先程の流れを繰り返します。

『料理』を学んだ』

『体術』を学んだ』

『投擲術』を学んだ』

『擲術』を学んだ』

?!?!?!?!

な、なんか……老婆から習うにしては物騒なもんが見えましたが、まば、性能が上がったということ流しておきます。本命の「龍脈道」が出るまで根気強くウ……、してから四か月経つちやいました……。「……お前が求めるのは龍穴に関するものか?」

『はい』『いいえ』

やっと出ました。チカレタ……。

『龍脈道』を学んだ』

F o o → 気持ちいゝゝ

じゃけんこんな老婆の元から出ましようねゝゝ ほな……。

さて、これで残すは「武術・独学」の取得、それからステータスを上げる為の経験点稼ぎです。

中之丞くんがいるのは戦国時代。勘のいいホモの兄貴たちならお分かりですか?

戦に参戦ッ!

人を斬っても犯罪にならぬ世ッ!

多く斬れば斬る程報酬も好感度も経験点も溜まるとかいうポーナスステージッ!

では出☆陣!

……青年参戦中……

ハイ、ヨロシクウ！

はえ〜すつごいたくさん……。これ、全部斬っても？ あ、そう
ですか。

ホラホラホラホラ（千人斬り）

天下無双（コロンビア）

（刀の切れ味）見たけりや見せてやるよ（武者震い）

アツ（被弾）

……青年参戦中……

はいザクザクカットして、大体20年経ちました。合間合間で経験
点を割り振っていましたが、後半からは面倒になって溜めています。
た。

今全ての力を発揮する時、いざ鎌倉（時代違い）

中之丞 人間 男性

体力：40

霊力：75

知能：53

スタミナ：78

筋力：99

精神力：54

器用さ：65

素早さ：71

幸運：61

魂特性【絶対の力】

スキル【料理 体術 投擲術 棒術 龍脈道 弓術 馬術 道術

槍術 杖術 鎖鎌術 射撃術 捕縛術 武術・独学】

経験点：307

相手のゴールにシュウウーツ！！！！

中之丞 人間 男性

体力：99

霊力：99

知能：99

スタミナ：99

筋力：99

精神力：99

器用さ：99

素早さ：99

幸運：99

魂特性【絶対の力】

スキル【料理 体術 投擲術 棒術 龍脈道 弓術 馬術 道術

槍術 杖術 鎖鎌術 射撃術 捕縛術 武術・独学】

経験点：12

これが……力……。すごいのお……体中から力が溢れてくるのお……ッ！

このように「力が欲しい」になると経験点も、スキルもなんでも欲しいがりさんになります。流石、「過去」の中でも超有能過去と言われるだけがあります。もう最高に気持ちがいいええ、

虚さんに挑める状態になった所で彼の元へ行きましょう。

え？ 前動画の parterry くらいに虚さんとコンタクト取るの難しいって言ってただろって？

そうですね。でも、そんなの「龍脈道」があれば関係ないんすよね。先輩イ、知ってましたア？

虚さんは龍脈ことアルタナの変異体。体に流れる血にはびつちりぎつちりむつちり最後までアルタナたっぷり成分です。この「龍脈道」はアルタナの感知・操作を可能にしますので、それで虚さんを探索。見た目はとても分かりやすいです。アルタナが人の形をしている場所⇨虚さんが徘徊している場所になります。

ほな、会うまで倍速します。

その間に作戦をお話しましょう。

通常、生まれた土地である地球産のアルタナで動いている虚さんを地球で倒したとしてもすぐに復活します。虚さんでなくとも変異体、

又は隴さんのように変異体モドキは体力バーを0にしても復活しません。

その際、虚さんこと変異体の体力バーの下にアルタナバーと呼ばれるものが現れます。これが隴さん、終盤の変異体モドキ奈落たちなら倒す度に減っていきますが、完全な変異体たる虚さんは地球で倒した場合アルタナバーが減りません。地球外での戦闘……、烙陽決戦篇で海坊主vs虚の間にお邪魔するぜえくく！って海坊主と共闘して虚さんを倒した時、虚さんのアルタナバーは二ミリ減りました。

アルタナバーが減っているということは、虚さんは倒せる訳です。例え減るのが二ミリでも。

こんなの倒せる訳が無いよッ！とかいうシンジくんは最後までお聞きください。お前はエヴァに乗るんだ。

地球で倒してもアルタナバーは減らない。そんなジレンマを解決するのが「龍脈道」です。このスキルを持っていればなんと、撃破時に虚さんのアルタナバーを減らす事が出来ます。後はアルタナバーが底を尽きるまで殺せばいいという訳です。至って簡単なお話ですね！

『やたらと鳥が多い』

お、虚さん登場テキストが出てきました。

ああああああああああああ戦国時代の奈落の衣装ほんとすこしゆきい……。

しゆきだから殺るね。

「おや、姿を見られてしまいましたね」

『鳥の嘴のような面頬を付けた青年はこちらへ刀を向けた』

戦闘入りまゝす。

こちらが 地球で長年生きている変異体虚さん 殺意トツピングです。

攻撃時 舐めプされているのを見て攻撃を激しくしたら 虚さんからの誠意で即死級の攻撃をサービスしてもらいましたア〜！（魂特性発動）

俺の頑張り次第で虚さん潰すことだってできるんだぞってことで、
いただきま〜〜す！ (一殺)

まずはスープから…… (二殺・三殺) コラ〜！ (四殺)

これでもかって位クソツヨAIの動きの中には隙が入っており
嬉しさのあまり虚さんへ太刀をぶつけてしまいました〜！ (五・六・
七殺)

すっかり虚さんも立場を弁え 貴重なビビリ顔をスクショした所
で (八・九・十・十一殺)

お次に (十二殺) 圧倒的存在感の即死級攻撃を 流す〜！ (十三・
十四・十五殺)

殺すぞ〜！ (誠意)

サイヤ人じみた動きの中には動揺が混じっており (十六殺)

さすがの中之丞も間合いに入って行ってしまいました〜！ (十七・
十八・十九殺)

ちなみに、虚さんが床ナメしている様子はぜひこの動画をご覧くだ
さい (二十殺)

工事完了です……。 (戦闘終了)

計二十回、虚さんのクソ硬体力にぶち込んでアルタナバーが全部減
りました。トドメの一撃をすると〜……、

シーンが入ります。

中之丞くんの斬撃を受けて倒れた虚さん。中之丞くんは迷わず虚
さんの心臓を持っている刀でぶち抜きました。

器用にそのまま心臓を取り出して、手で握ります。

「……ああ、これで、終わるのですね……」

場面が変わり、傷だらけの虚さんが眩しそうに心臓を見つめていま
す。

「ありがとう、名も知らぬ人間よ」

中之丞くんが「龍脈道」を使って虚さんの心臓を結晶化させて――

ゴリラの如き握力で握り潰しました。

心臓と穏やかな顔で眠る虚さんが緑色の光になって消えていきました。

エンディング7に必要な条件

・原作ストーリー外

・種族人間

・虚討伐

が、達成されましたので……。

エンディングムービーが流れます。

中之丞くんが歩きながら背景の方でザツクリとした経歴と、クレジット、それからエンディングごとに異なるスチルが流れます。ここで原作キャラと面識があれば彼らの姿が映りますが、今回は戦国時代メンバーでおなじみの四人と虚さんが映っただけで終わります。少ないですねえ……。

はー、達成感がパないです。一回被弾した時はどうなることかと思いましたが、魂特性が「絶対の力」であったことを思い出し、そこからノームスノーダメ攻略になったのはキツかったです（素人）

もしやる場合なら耐久特化の魂属性を持つておくと……いややっぱ攻撃力ブーストの方が早く終わるので、被弾したら無難に体力回復アイテムをポーズ画面で使用して体力を回復しましょう。というところで解決方法は回復アイテムをたらふく貯めることですね！

エンディング7だと幸せそうに死んでいく虚さんのスチルが流れた後、松下村塾前で朧さん銀ちゃん桂さん高杉クワンが松陽先生を囲んで幸せそうにしている場面のスチルが出てきます。

ウツ（絶命）

ふう……。賢者のホモの皆様ならお分かりでしょう。虚さんはプレイヤーキャラに殺された後、吉田松陽としての穏やかな生を送ります。いわゆる転生というものです。死亡してベイビー転生の後、優しい人間の元で育ったものだと思われれます。やっぱ幼少期の環境は大事つすわ。

根幹的に彼は変異体ですが、人の捉え方が前のように血みどろでは

なくなつたのでしよう。私たちの良く知る吉田松陽先生がそこにいます。

『次は良き生を』

エンディング「多き生なれど」

最後に中之丞くんが喋つて終了ですが、ちよつと彼のボイスの判別がんにやぴ……。慈悲深いタイプということにしておきましょう。

実況はここまでです。突然番外編を上げましたが、ここまでお付き合いくださり、ありがとうございます。

御視聴、本当に、本当にありがとうございました。

一一

本土から離れた離島ではあつたけれど、別に不自由なく過ごしていた。

剣を覚えてくれる父と、いつも支えてくれる母。

この島の村において、ちよつぴり私の家というのは特殊なんだそう。

元々、この島はお偉いさんが罪を犯した時に島流しという刑によつて流される土地らしい。ここに流されてきた幾人かのお偉いさんの内、ある一人が村の娘と恋に落ちた。村は交際を認めないと言つたが、そのお偉いさんの態度が良かったのか、交際を許してもらつて子が生まれた。その子供も親になつて夫婦になつて……。そうして私の家が生まれたいらしい。

自慢では無いが、ここは島では数少ない名字持ちの家だった。

まあ、全員死んでしまえばそんなことは些事になるのだけれども。

ここは島流しの地。それは今も変わらず、あるお偉いさんが流されてきた。

でもそのお偉いさんが生きているのを好ましく思わない輩がいたらしく、その人へある一羽の鳥かかしを使いに出した。

その頃には着いていたお偉いさんかかしを鳥は迷わず公衆の面前で殺した。

この島にいる人間、全て消してしまえばいいと考えたのか、それとも島に人間がいること自体許せない人がいたのか。もう本人には聞けないが、これに関しては聞くほどの興味もない。

突如として起こった島での虐殺で、何故か私は見逃された。子供一人、放置しておけば死ぬとでも考えたのか。腹立たしくも、だからこそ今も生きてられた。

そして、そのお陰で私は自らの力不足を自覚し、あの鳥を葬る事が出来た。

両親を殺した鳥がゆつくりとこちらを振り返った時の、あの目。

最愛の両親が殺された怒りよりも、全てに憂いて嘆いて死にたがっているあの眼差しをどうにかしてやりたいと思った。でも、それはそれとして彼への殺意はあったので、慈悲を以て殺してあげようという考えに行きついた。

その為には力が必要だった。単純な力と、もう一つ違う強さが。

父が鳥に立ち向かって付けた傷を瞬時に癒した、あの超自然的な力に対する策が。

強くなる。それは、がむしやらに家の屋敷にある剣を振っていればいいものではないと気が付いた。

とりあえず腐りかけた皆の遺体を埋めて、島を出てみようと思つた。だが、島と本土を行き来する船は鳥によって破壊されていたので、見様見真似で船を作つて浮かべた。

海の旅は楽しかった。権の動かし方にもコツを掴んできたという所で、私は本土へ着いた。

それからすぐにある老婆と出会えたのは幸運だった。彼女はすぐに傷が治る力へ対する手段を持っていた。

一人でいる所を話しかけられて、それからなし崩しに老婆の元で世話になった。他愛ない会話が心地よくなるほどには距離が近付いた頃に私の目的を話すと、老婆は様々なことを教えてくれた。

まずは文字。次に料理。老婆の好きな煮物を作るのが得意になってきた頃に、体術。枯れ木のような腕から一体どこから力が出ているのかというぐらいに痛めつけられ、体の動かし方を覚えた。物を投擲

する時のコツに、棒を使った戦闘なども。

込み入ったことは話さなかったから、結局老婆は何故そんなことを知っていたのかは分からずじまいだった。

でも私が一番知りたいことは、その時まで敢えて教えなかった節がある。

「これは、殺す為の術ではない。世を平らげく治める為の術であるぞ」
きつと老婆は、私の一番知りたいことを知っていて、私はその力をどう扱うかということも知っていた。

この……大地というか、星にはとある力が流れている。その名を龍脈。龍脈流れる土地で国を興せば繁栄し、人の限界を超えた治癒能力を可能にするとか。正に求めていた力に一番近いものだった。

私は強請ねだった。何度も強請ねだった。そうして根負けした老婆が教えてくれた星の命ともいうべき力を授けてくれた。

これで烏からすを殺す為に必要なのは純粋な力と経験、そして技術のみだった。

世は混乱の最中、いつでも戦があつたからそこへ飛び込んで人の命を多く奪った。

こんな辛い世の中では生きるのも辛いだろう。そう思った私の慈悲と、思いついた技の試し切り……という面が無かつた訳でもない。ともかく彼らのお陰で私はめきめきと強くなれた。刀を振る速度と技量、力の強さ……は元から強かつたが、最小限の動きで命を散らせる術などを開発した。

ああでも違うんだ。開発したいのはそういうのじゃあない。人を多く速く斬る為のものではなく、龍脈の力で不死になっている烏からすを殺す剣だ。その術を探す為に、あらゆる道具の使い方や術を覚えてきた。そうしてやっと、型らしいものが出来た。

老婆から習った龍脈道、それを組み合わせた、ある烏からすを殺す為の剣。それは驚く程に効果的だった。

老婆から教わった力で人を半分だけ不死にして効果を試したから、これは必ず効く。

積もった雪を乗せた木々が並ぶ森の奥。奇妙なことに、鳥の鳴き声が重なって聞こえてきた。あの日、島に男がやってきた時も同じだった。高まる期待に足を運ばせると、——少しだけ開けた場所に、ソイツがいた。

体に龍脈が流れている鳥、村を滅ぼした張本人、私がどうしても殺してあげたい男。

「おや、姿を見られてしまいましたね」

鳥はそう言うと、持っていた刀を凡人には目にもとまらぬ速度で抜き、私へと斬りかかった。

——刀の速度を目で追えた。村にいた頃は見えなかった刀の軌道が見えた。鳥へ近付いていた。今まで殺してきたことは無駄では無かった。

ああ良かった。私が今まで殺してきた人は無駄ではない。喜んで

私はこの鳥に挑んだ。

鳥は酷く手強かった。

ある程度彼の動きに慣れて剣を受け流し、近付こうとしたら重たい一撃を食らった。

「どうしました？　これが、わざわざ私を見つけに来た貴方の全力ですか？」

鋭く、素早く、何よりも強い男の一撃を、受け身も取らず脇に食らった。皮膚から内臓へと斬撃が届き、硬くある筈の骨すら柔らかかに断った。

——ああなるほど。誤算があった。

僅かに折れた骨で臓器が痛む、が、相手の剣先が見えた。咄嗟に防御する……。衝撃が体中に響き、内臓がぎしぎしと血を吹き出していた。

鳥は生まれてからの不死だ。普通の人間ならば傷を避ける為に避けたり、受け流したりとするが、コイツにはそもそもそんな行動をする必要性なんて無いんだ。

傷は負っても治る。だったら先に相手を潰せばいい。なるほど、不

死なりの合理性ってヤツか。

想像していたよりも鳥は高みにいる。目の前に聳え立つ壁の大きさをよくよく見せつけられた。

あ、あ、ああ。……すごく楽しいな。

ふつつつと体に力が湧く。刀を握る腕がまだまだ振るえるといきり立つ。壁を前にしても私の鳥への想いは変わらない。

——老婆から教わった力を使えば、相手に流れる緑の血潮が見える。その彩を赤に戻せたのなら、きつと私の勝ちだ。

「鳥……い、お前を今アッ！ 人にしてやる！」

瀕死の人間が上げた啼き声に鳥が嘲笑で返した。

「できるものなら」

言質は取った。顔が笑みで歪む。

ほんの少しの動きで相手の動きを見極める。目は最大限に動かし、意識は鳥のみに集中させる。体はなんとか追い付かせる。

右に振る、左と思わせまた右下から刃が来る。避ける。鳥が踏み込んで懐へやってくる。そんなに来たいならもつと刀を寄せてやる。片手で目を潰す。刀を持った、もう片方の手で刀柄を使い、頭を打つ。脳震盪を引き起こさせて僅か一秒以下の隙で首を切る。一回、相手の首を取れはした。

僅かにだか、奴の臉は驚く様な動きを見せた。

「どうだ、これで一手」

「ふ、まだ一回ですか。鈍いですね」

普通の人間は一回で死ぬんだけどな。余分な言葉を出しそうになる口は閉ざす。

相手に流れる龍脈の操作に鳥の動きに対応して。これまでの人生の中で一番忙しない。そして一手間違えたら死が待ち構えている……、だがそれでいい。

背に刃を突き付けられている緊迫感が私を強くするから。

鳥からすの力を思い知る度に私は成長できるから。

二回目は繋がった首を切る。三回目は心臓を突く。首か心臓を殺れば相手は少しだけ動きを鈍らせる。

四回目は両方。さて、少しは気付いてきたのか鳥からすの動きが早くなってきた。私はそれに対応した。剣がまさか風のように思える日が来るなんて。体が軽い、けど振るう際には重たく相手に、着実に攻撃を与えられている。

五回目首、六回目頭潰し、七回目体の四肢をバラバラに。

「貴様、何を、したっ……!」

バラバラになった四肢を繋げながら立ち上がる鳥からすはようやく気が付いた。

「お前を殺す為の技を使っている」

傷の治りが三秒、四秒、五秒と回数を増すごとに遅くなっていることに。

八回目首、九回目首、十回目体半分、十一回目首。やはり首の方が治癒する部位としては少ないせいとか、回復が早く、次の死へ素早く繋がられる。鳥からすの付けていた面頬の紐が千切れる。露わになった鳥からすの素顔は、やや私に対してか怯えているような様子が見えた。気に食わないな。

「まだ、まだお前の血潮は赤くない。もつと殺すぞ」

それでも最初見た時よりはやや赤みが戻って人間らしい色になってきている。成果が目に見えて現れる。笑みが止まらない。

そして十二回目、首を折った。

流石に命の危機を悟ったのか、憔悴した顔で鳥からすは連撃を繰り返した。一つ一つが凡人ならば目に見えず、攻撃されたとは知覚することもなく死ぬ類のものだ。まともに防御すればそれこそ内臓に圧が掛かって紙一重で生きている私は死ぬ。

ならば、と受け流す。

衝撃は外へ、何も無い空へ。

その為の動きを私は知っている。この日の為に編み出した技だ。

——お前わたしたしを殺す剣だ。

——何十年も懸けて編み出したお前を殺す剣なのだ。

十三回目心臓、十四回目心臓、十五回目体を斜めに真つ二つ。

龍脈が薄れゆく。治りが遅くなつていく。鬼は人へ、鳥は人へ。

「……なる、ほど。そう、ですか。あなたが、あなたが、あなた、ならば……」

「終わりたいのだろう。長い生は飽きただろう」

「……ええ」

鳥の口元に、笑みが宿る。目には剣呑さと、——深い絶望から救われるような希望の光が見えた。

「我が生、至上の力を以て、貴方と向き合ひましょう」

もうお互い血塗れでどちらが鬼なんだか分からない。でもそれでいいんだ。

十六回目心臓、十七回目首、十八回目首、十九回目首。

互いに笑い合つて斬り結んだ。鳥の顔に怯えはなく、ただ俺を見つめて剣を振るう。思い返してもどうやって戦っていたか分からないが、ただただあの時の戦いを、私は楽しいと感じた。

ふらふらとしながらも足に地面をしつかりつけて。

刀は一切落とさず相手を見据えて体を動かして。

冷えた体に対して心は熱くて。

吐く息に血が混じつても感じる喜びは時が経つほど増して。

歯を剥き出しにして刀を鏝迫り合わせて火花を散らし、殴り蹴りの応酬をして。

——そうして、私は、鳥の心臓を抜き取った。

赤い血潮が背にする雪に飛び散った。僅かに緑光を発するソレを取り出す。

疲労を携えた体がゆっくりと地へ倒れる。今、この場は血の池地獄と称しても問題ない程、鳥の血で滴っていた。

「……ああ、これで、終わるのですね……」

きっと人生で一番したことのない、慈愛を含んだ眼差しで、鳥は心臓を見て、ふっと私へ視線を移した。

「ありがとう、名も知らぬ人間よ」

込み上げてきた。祭が終わった後の寂しさのような、大きなことを

やり遂げた達成感のような、大事な友人が去っていったような。色んなものがごちやまぜになった震えを抑え、老婆から教わった力で彼の心臓に流れる龍脈を結晶にして塞ぎ止めた。

「……ありがとう、烏からす。私の生涯の友人よ」

結晶を割る。穏やかな顔で、烏は緑色の光の粒となつて、宙へと消えていった。広がる血の池も共に。

体からがっくりと倒れた。ああ終わった。満足だ、満足。

私は私の力で烏からすを打ち倒した。不死の生命に勝った。そして、そして……瞼を閉じた。

次に目を開ければ、私は暗い空間の中にいた。ここはどこか、と考える前に、私の前を幼い子供が走る。

『父上〜！ 剣を教えてくださいさ〜！』

幼き日の私……であった。そうだな、確かに昔から私は父に剣を習うことをねだっていた。

何とはなしに、その場で座る。目の前で父と、小さい私が剣をぶつけ合った。カン、カンと乾いた木刀の音が場を支配する。懐かしい、とても、懐かしい……。

「はは、拙いなあ……」

術というにはつたない。動きも型も使わず、ただ木刀を振るだけで楽しかったな。なんと穏やかな走馬灯だろうか。

手を前に突き出す。傷痕だらけの、剣に時を費やした腕が見える。父と打ち合った私はやがて疲れて、そのまま地べたに転がっていた。

瞬きをすると、倒れていた子供の私は成長していた。年の頃はそう、老婆と出会った時ぐらいだ。

腰が曲がり、白髪をまとめて背に流した老婆が私に色んなことを教えている。彼女の話すことをうんうんと聞いている。これは確か……。

『これは、殺す為の術ではない。世を平らげく治める為の術であるぞ』

神妙な顔で教わったのは大昔のこと。平家、源家と争いあう時より前の時代にあった、ある一つの道。

その者は地下を巡る力を知り、それがこの星自体の生命にも等しきものであることを探り当てた。この力が集まる場所には富や幸といったものが集まり、人々には活力が生まれるという。

病にかかったように痩せさらばえた土地、飢饉や不作が起りがち
な土地ではこの龍脈が巡っていないか、かつては巡ってはいたが時が
経つにつれて衰えたか、というのが原因らしい。

この道を修め、帝、ひいてはこの世を守ろうとしたが、その道を修
めていた一門は帝の怒りを買って破滅。

数少ない生き残りや、道を修める為に門扉を叩いてきた者たちが密
やかに教え、龍脈の力が一等強い場所龍穴に住処を構え、守ってきた。

老婆はそんな歴史を語って聞かせた。

『お前はこれを殺める為に使おうとしているのは分かる。だが、先程
言ったことだけは忘れるでない』

私は頷いた。枯れた手が乱雑に頭を撫でた。忘れていない。老婆
が好む煮物の味に、何故か教えられた棒術やらも忘れていない。

瞼を閉じる。景色はあの鳥からすと対峙した場所からすに変わっていた。しか
し、鳥の姿は見えない。

血だまりのあつた場所に、私が一人座っている。

雪が降っている。喜んでいいのか、悲しんでいるのか分からない、
天から降りし雪花が肩に、頭にと積もり体温を奪っていく。

背を立てて座っていた筈の私は、横たわっていた。漠然と、今の姿
こそが本当の私の姿なのだと分かった。

走馬灯ではなく、うつつ現。

からす鳥との戦いが終わった後の場だ。

からす鳥。私は、君がどんな生を生きてきたのかを知らない。だが、肉親
を殺された恨みと、元々あつた強くなりたいたいという気持ちが高じて、
君わたしのを殺す剣を作り上げた。君に通用した。力んで足跡が力強く残る
地面を手で撫ぜた。

——ふっ、と……。

あの鳥も望んで生まれた訳では無くて、きつと理不尽なまでに理由も分からぬままに産み落とされたんじゃないか。なんて考えが浮かんだ。

加えて、鳥の体には龍脈が流れていた。そう、人間に巡るべきである血潮ではなく、龍脈の力そのものが。

……もしかして、この星から龍脈が無くなるまで、あの命は繰り返すのか？

明らかに鳥は人工的に作られた物ではない。自然に産まれた、人の形をした命だった。

もしそうならば、鳥はまた、私が殺す前の様に虚無の顔をして生きるのだろうか……。

両親を殺した時の、あの冷たい眼差しを。全ての生に飽いた、底の見えない暗闇を含んだ瞳を。

それはなんだか寂しい。うん、寂しいな……。なまじ、強いばかりに、楽に死ねやしないだろうし……。

——うん。それは悲しく、寂しく、哀れなことだ。

おもむろに立ちあがる。血を多く失った体は、今でも動くことが不思議だと自分で思えた。

こんな体でも私は生きている。なればこそ、今の私がやるべきことはゆつくりと雪に埋もれることではない。

「また君が死にたいと思うのなら……、私は、その為の術を、細やかながら後世に残そう……。」

一一

世にとある剣術あり。それは細々と、だがしかし着実に受け継がれていた。廃刀令が出され、江戸期に栄えていた多くの剣術が着実に弱っていく中、まったくブレずにあるというのは確かに異質かもしれない。

だがこれといった特徴は無いともされ、そもそもそんな剣術が存在するのか？ とさえ言われる始末。大体が伝聞や他の指南書にちよ

ろつと触れられるくらいのも物だから仕方なし。

そもそもこの剣術なんてそう大層なものではない。でも剣客を名乗っておいて流派を名乗らないのもアレだ。それで一応名乗りはすると一部の達人が「ざわ……ざわ……」ってなるのはなんでだろう。そんなに先代ヤバヤバなことでもしたのかと知りたくなるが、もう先代は死んでおられる。知り合いの御爺も軒並み逝ってるだろう。

私は孤児であつたが、先代に拾われて剣術を習い、先代が生きている間も死んだ後も剣客として生きてきた。

時は矢のように過ぎていった。天人との戦が二度起き、その全てに参加して早何年か。日本は天人側に服従する形で、世の中は平穩そのものとなった。

となると、増えるのが天人という彼奴等。

「剣客やつてるとかwww」「おい侍、俺と一戦やろうずwww」「姉ちゃん可愛いね〜！ 女侍ってヤツ？」

とかなんとか天人に煽られる始末。試合は受けて勝ってやったし、素面の癖に寝言を抜かした奴は闇討ちしておいた。

厄介な者は増えたが根無し草なのは変わらないし、私が一剣客であることも変わらない。暇だから道場破りとかやってみようかな……。ほら、そのまま衰退するより花のある内に終わらせた方がいいでしょう。

「もし、そこの方」

「はい？」

茶屋で暇つぶし……。日銭稼ぎの為に作っている木彫りをシヨリシヨリ彫っていると声を掛けられた。

なにやら珍しい茅色の髪を持った男だ。いや、それにしてもなにやら……コイツ強いな！

分かる、分かるぞ！ コイツは根つからの強いヤツだ！

「いやあ、見事な木彫りですね」

「それはどうも。手先が器用なものでね」

でも声色や物腰は穏やかだ。ふむ……。先代と同じくオニダルマオコゼ的な生態をしていると見た。怒りに触れれば死——、みたいな。

しっかしそんな御仁が何の御用か。凶りかねるな。護衛にしてもその腕ではいらんだろう。

「貴方を名のある剣客と見込んでお願いしたいことがあります」

「……ほほう、何故私を剣客と？」

「呼吸の仕方に立ち振る舞い、それに、手に出来ている剣だここからですかね」

「ああなるほど……。それで、お願いしたいこととは？」

「実は教え子の様子を見に江戸へ行きたいのです。ですが、最近出来た江戸行の道とやらがよく分からなくて」

「ははあ。よく御老人がおっしゃられるようなことですね……。貴方、意外と見た目に似合わず年を取ってるのか？」

「おや、分かりますか？ そうなんです。意外とおじいちゃんなんです」

冗談も面白いとは、どこぞのオニダルマオコゼとは違うな。

目の前の男は二十代位にしか見えない。多く見積もっても三十代いや、先代もそれなりの化物じみた年の取り方をしていたけれども、早々そんな化物がおる筈なからう。

「ふむ。仕事としては護衛と道案内、お値段はいくら払えますかな？」

「ぎつとこのぐらいです」

男が着物の袖から取り出した財布。そこから渡された金額に思わずぐくりと喉が鳴った。

……護衛と道案内だけで万を超える金額だと？ 破格じゃないか

！

金は天下の回り物。あつてよし、蓄えてよしの逸品だからな。

「よろしい承りました。して、出向日はいつ？」

「今日です」

「……でしたら早く行つた方が良さそうですね」

木彫りをしまい、立ち上がる。

男はにっこりと微笑んでいる。……仲良くなつたら試合とかやつてもらえないかな。

「では行きましょう！ いざ江戸へ！」

「おー」

こうして奇妙な男との旅が始まった。私塾をやっている、教え子が結構な数いて、悪ガキばかりであったが戦争の不況によって私塾を閉じざるを得なくなったがまた開いて、と。中々に波乱万丈な男の話を聞いて、私は旅にあつたことを話して……、そうやって過ごしていく内に妙な気持ちを感じた。

男の姿が誰かと姿が被る。面頬を被った、黒い男だ。そいつも男と同じ、長い茅色の髪をしていた。……まるで昔から知り合いだったような、変な感覚がする。

私にこんな男の知り合いなんていないし、先代と共に旅をしていた頃に出会ったこともない。

元々寒かったが、雪が降り、日が落ちて更に寒くなった夜のこと。

奇妙な感覚に押されるように、私は火鉢を共に囲む男に言った。

「人生、楽しいか？」

男ははっとした目で私を見つめた後、目に涙を溜めた。そんなに泣くほどの人生を過ごしてきたのだろうか。私塾を閉じざるを得なかった、という話よりも根深い何かがありそうだった。

涙を流さず、堪えるように男は口元を引き上げ、眉を柔らかくさせ、目を細めた。

「ええ」

その一言に、私では考えつかぬほどの感情が込められていることを直感した。

私は、なんとなくその一言で気持ちが安らいだ……ような気がした。

「そうか」とだけ返す私に、男は満足そうに、眼を閉じて笑っていた。

そうして男を江戸まで送った。まるで旧知の仲の友と旅するように、旅路は思い出すだけで愉快で面白おかしく、終われば名残惜しいものだった。

あつという間に萩から江戸へと着いてしまった。

「そういえば、名前を聞いてませんでしたね」

「確かに」

別れ際になつてやつと気が付く頃には、この男との間に、他人という境が存在しないことに気が付いた。奇妙なものだ。

「改めて……私は吉田松陽。松の陽と書いて松陽と呼びます」

「松陽、か。いい名前だな」

ぽろつと出た言葉を言えばやけに嬉しそうな顔をした。そして、松陽はじつと私を見てきた。

今度は私の番だ。んんつ、と咳ばらいをする。

なんだか思映ゆい心地だ。ただ自分の名前を告げるだけだというのに……。

「——九代目雪消流師範、伴中之丞ともなかのじょうという。近い内、貴殿と刀を交わしたく候」

そう告げれば、何がおかしいのか松陽は「くくく……」と含み笑いをした。

「なにかおかしかつたか」

「いえ、やつぱりというか、お変わりないというか」

「む、一体どういうことで」

「——流石、ということですよ。……ええ、まだ江戸に滞在なさるのなら、教え子たちの顔を見終わったら是非、受けさせてくださいな」

喜びのあまりガツツポーズをした。

絶対だかな！絶対だかな！と約束を交わした。

私たちは一時の惜しい別れを経験し、——数日後、普通に町中で出会った。

カツコつけて退散したのに恥ずかしいやらなんやら。

でもまあ、その後試合が出来たのは幸運で、やはりというか——男は強かった。

初めて師匠以外の男にボッコボコにされた。穏やかな顔付きなのに、木刀を握った瞬間人が変わったように攻め立ててきた。興奮した。彼の教え子なんか（何故かついてきた）引いた目で見ていたけれどたまらん。やはり私は剣客一筋だな。それ以外の道なんて考えられない。強さを求めるのはきつと私自身の性さがで恐らく前世から染み

付いている気性だ。そうに違いない。

——ああ、世界って広いな！

なぜか懐かしく見える地面からの光景を最後に、私は心地よく意識を失った。